

過去を偲ぶ

豚でかきたま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

早川アキのかつての同級生だった少女は、『誘惑の魔人』へと変貌していた。

思い出したくないけれど、記憶の片隅にある。

忘れかけていたけれど、こびりついて離れない。

次第に膨張していく、過去の記憶。

魔人オリキャラ♀。

前半アキ・後半オリキャラ視点。

幼少期のアキが歪まされ気味です。

途中、性的・虐待・グロテスクな表現が入ります。

主人公は魔人故、キャラクターを悪く言う描写があるためご注意ください。

原作沿い・ネタバレも入るので、原作既読推奨。

本編で明かされていないところ・アキの過去など、一部捏造有。

10/16 所々、話の矛盾点を改善する為、修正入れています。ご容赦ください。

目次

前編

最悪の出会い

1

心を揺さぶる

7

君の笑顔

13

想い人

17

芽生える

23

心を支配する

27

片鱗

31

歪んでいく

35

誘惑

41

蠢く何か

44

乖離

50

訣別

58

過去を偲ぶ

62

後編

プロローグ

68

最悪の始まり

76

共有

82

敗北

89

吊い

99

頭のネジ

106

憧れ

115

映画

127

思惑

137

蛙の子は ※倫理的観点で、一部描写が不快に思われる方がいらつ
しやるかもしれません。ご了承の上お読みください。

アイス四本

189

空腹

204

前編

最悪の出会い

「特異4課だけど、もう一人魔人を入れることになったの」
横を歩くマキマさんの唐突な言葉に、啞然とする。

正直、また面倒な奴が増えるのか。という気持ちだが、マキマさんの前だ。口が裂けてもそんな事は言えない。

「大丈夫だよ。すごく強い悪魔が憑依した魔人だから、即戦力になると思う」

「いや、戦力になるかという問題よりかは…」

魔人は、人間じゃなくて悪魔だ。

どいつもこいつも、人間性が足りなくて、正直手に負えない。

戦力云々以前に、別の仕事が増えるだけだ。

「まあ、会ったほうが話がいかな」

そう言っつて、マキマさんは会議室の前で足を止め、ドアを開ける。

そこにいたのは、一人の少女。

後ろ姿を見ただけで、身体に一本、針金を通ったように硬直した。

淡い栗色の髪。癖がなく細くて、さらさらと揺れる。

そこから覗く、雪のように白いうなじ。

プリーツスカートから伸びる、白いハイソックスを履いた、折れそうなほど細い脚。

彼女が振り返る。

人形のように大きい瞳と、俺の目が合った。

「彼女は『誘惑の魔人』。人間のときの名前が気に入ってるみたいだから、アマネちゃんって呼んであげてね」

「この子はパワーちゃんと同じで、…いや、パワーちゃん以上に知能や理性が備わった魔人なの。新入りさんだから、色々教えてあげて。本来は岸边さんとこの仕事なんだけど、先の件で人手不足だからね」

マキマさんは、いつものように有無を言わせない、にこやかな笑顔で命令した。

横を歩く、この女。

アマネ。

下の名前も一致している。

ただ、かつて同級生だった筈のアマネのいまの姿は、あの時から顔立ちも背丈も成長はしているものの、俺と同じ年の20代には見えない。デンジと同じくらいか。

本来、パンツスーツの筈の公安の制服が、何故かプリーツスカートを履いているというのも相まって、学生に見える。

そして何より違う点が、栗色の髪から僅か覗く、特徴的な耳。

軟骨部分が上に向かって尖っている。人間にはあり得ない形だ。

「これからよろしくね、えっと、早川さん？」

耳触りのいい、すこし高めの声。

記憶が押し寄せるように蘇る。

確かに。ああ、確かにこんな声だった。

本当に、アマネなのか？

本当に、魔人になったのか？

死んでしまったのか。

混乱のあまり、返事をすることもできない。

魔人相手に情けない。

だが、今の俺はこいつを目の前にして冷静に判断することができない。

「……悪いが、指導の方は後日でもいいか。今日はあまり体調がよくない。マキマさんには、俺から伝えておく」

「あ、あの」

困惑するアマネを置いて、早歩きで立ち去る。

何も考えずに歩いていたら、いつの間にか人気のない通路に辿り着いていた。

「早川くんだよね？」

声がる。

足元には、俺ともう一人の影。

勢いよく振り返ると、突き放した筈のアマネが、窓から射し込む夕陽を背に、にこやかな笑顔で立っていた。

「……は？」

「早川くんだよね？北海道、○×小学校の。わたし、あなたとクラスメイトだった茅森アマネだよ。……覚えてる？」

「……本当に、茅森なのか」

アマネは頷く。

いや、でもこいつは、魔人だ。

魔人になった人間は、悪魔に人格を乗っ取られる。

「……何故、茅森の時の事を知っている」

「うーん、知っているっていうか……わたしが」茅森アマネだから」かな」

呆氣にとられる俺を他所に、アマネはクスクスと笑う。

「わたしは魔人だけど、人間のときの人格を失ってないの。勿論わた

しの中に悪魔はいる。でも、今のところ”誘惑の悪魔”より、”茅森アマネ”の理性の方が勝ってるみたいなんだよね……さつきは他人面してごめんね？ちよつと驚かせてみたくって」

そんなこと、あるのか？

そんなこと、ありえるのか？

ただ、目の前にいるこの少女の、悪戯っぽい表情、話し方、悪いと思っていない癖に謝るとき、あざとく小首を傾げる姿。

全てが、かつての記憶の彼女と重なった。

「ほ、本当に…茅森なのか……？」

「そうだよ、久しぶり」

ずっと、記憶の隅に、けれどとはっきりと残っていた少女。

全て消えたと思っていた故郷の、記憶の忘れ形見のような少女が、いま目の前にいる。

「茅森……俺……」

アマネの大きく、潤んだ瞳に、俺の情けない顔がうつる。

「俺は……」

「ぷ」

唐突に、アマネが口に手を当て、ふき出す。

「きやつはははは!!あく、おかしい。もう我慢できない!」

アマネが、腹を抱えて笑い出す。

俺が唾然としていると、一通り笑ったアマネは、再度俺に視線を向ける。

「悪魔の言葉に簡単に惑わされちゃ駄目じゃん、早川アキくん？」
「なっ……」

顔がかつと熱くなる俺を、尖った耳に髪をかけながら、こいつはにやにやと見てくる。

油断した。

こいつは魔人だ、悪魔だ。

”誘惑の悪魔”だ。

悪魔に気を許すなんてことは、絶対にあり得ないことなのに。

この上ない屈辱だ。

普段デンジにも再三言っている癖に、気を緩めてしまった。

……何故よりによって、アマネの身体に憑依しているんだ。

「はく笑わせてもらった。……つて、ちよつと待つてよ」早川くん

”?”

「二度とその呼び方で呼ぶな。気色悪い」

足を止めずに睨みつけるが、当然悪魔は怯むことはない。

「ちよつとしたジョークじゃん、怒らないでよお。これから一緒に働いてく仲なんだから」

へらへらと笑い続けるこいつは、アマネの顔だが、アマネとは似ても似つかない。

はらわたが煮え繰り返りそうさ。

しかし、あまり熱くなつてはこいつの思う壺だ。

「でもさく、なんでアマネの生前のこと、こんなに知ってると思う?」

俺の足が止まる。

革靴特有の、床を踏むときの硬い音が、ゆっくりと近づいてくる。

「わたし、他の悪魔と違って身体の持ち主のこと気に入つてさ。アマネとは仲良しなんだよねえ。だから、アマネの記憶をたくさん知ってるの」

足が動かない。

立ち止まったまま俯く俺の視界に、上目遣いのアマネが入り込む。

「アマネが早川くんのこと、どう思っていたのか知りたくない……」

「？」

そう、耳元で囁かれる。

悪魔の甘言だ。耳を貸してはいけない。

けれど、俺はそいつを突き飛ばすことも、その場から立ち去ることもできず。

足が地面に貼りついたように、その場から動けない。

「ま、兎にも角にも、これからよろしくねくはやか……えつとく、アキくん？」

そう言うのと、プリーツスカートの裾を軽やかに翻し、スキップで立ち去っていく。

悪魔の言葉だ。

絆されてはいけない。

しかし、俺の視線は、立ち去っていくアマネの、夕陽をうけてキラキラと揺れる彼女の髪から目を離せずにした。

心を揺さぶる

「マキマさん、今回こそ。今回こそ本当に無理です」
後日。

アマネの件で直談判をしに、マキマさんを訪れた。

マキマさんはそんな俺に物ともせず、書類から視線を上げない。

「どうして？理由を言ってくれないと分からないな」

「どうしてって……言われますと……」

「アマネちゃんは、デンジ君やパワーちゃんよりよっぽど扱いやすいでしょ？あの二人よりかはいくらか社会性も備わってるはずだよ」

「そういう、点ではなくて……」

マキマさんは、言い淀む俺を見兼ねたのか、漸く顔を上げる。

「私は、早川君ならできると思ってお願ひしたんだよ。」

勿論、やってくれるよね？」

マキマさんの気迫に、息を呑む。

マキマさんは書類を置くと、ふうと溜息を吐き、背もたれに背を預ける。

「今回はあの二人に加えて一緒に生活して、なんて無理は言わないよ。」

ただ、最初だけ一緒に行動して、デビルハンターとしての仕事を教えてほしいだけ。その後はまだ不確定ではあるけど、能力を踏まえての立ち位置を用意してる。そのくらいならできるよね？」

「……はい。尽力します」

ドアを閉めると、一気に脱力する。

予想はしていた結果だったが、やはり無理だった。

マキマさんの命令は、絶対だ。

明日から早速パトロールにアマネを連れて行かなければならない。

今日だけでもゆっくり休もう。

休むといっても、家に帰ればアイツら二人がいる所為で、まともに

休めた環境じゃないが…

帰路につこうとすると、向かいから軽快な足音が聞こえてくる。
嫌な予感がした。

「アキくくん、調子はどう？」

「お前に会った瞬間、最悪になった」

今、一番会いたくない奴に会ってしまった。

誘惑の悪魔…アマネ。

「なんでよく、つれないなあ」

無視して、歩き出す。

普段のこいつは、アマネ…茅森とは話し方や表情、そして雰囲気
が違うことが、唯一の救いだっただ。

茅森はもつと暗い女だった。

話し方も大人しくて、笑顔に陰があつて、けれど、

いつだって、見惚れてしまうほど美しい少女だった。

そして…

「待ってよ、アキくくん…。もう、仕方ないなあ」

また後ろから追いかけてくる声がある。

そして先日のように回り込み、俺の目の前に立ち塞ぐ。

「ね、早川くん…」

アマネの目が弧を描く。

薄く開いた口から、俺を呼ぶ声。

「やめろって言ってるだろ!!」

アマネの肩を掴み、強い力で退ける。

しかし、アマネは軽くふらついただけで、倒れることはなかった。

「次、その呼び方で呼んでみる。お前を殺すからな……」

早川くん。

そう呼んでくる奴なんていくらでもいる。

でもこいつの声で、こいつが態とらしく作った声で、
そう呼んでくるのが、耐えられない。

「おいおい、なんの騒ぎだよ。お前が大声張り上げるなんて珍し
……………」

偶々近くを通りかかったのか、デンジが怠そうにしながらも此方に
やってきた。

そして俺の横にいるこの魔人を見るなり、硬直する。

「え、あ…あ?!この、こちらの?お美しい方は、どちら様で……………?!」

「…動揺を見せるなデンジ。コイツは誘惑の悪魔を宿した魔人だ。お
前みたいなのは氣イ抜くとすぐに取り入れられるぞ」

「はじめまして。4課に配属になったアマネでくす」

「デ、デンジと申しますれば!!!ヨロシヤス!!!」

赤面して、ぎこちない仕草で頭を下げるデンジに呆れるしかない。

俺は不安しかない今後に、溜息を吐いた。

「おいおいおい、やべえって、早パイ。どう考えてもツラが良すぎるつ
て……………」

「おい邪魔だ。そして仕事だ。もつと氣イ張れ」

パトロール中にも関わらず、肩を組んできたデンジは、数歩後ろに
ついてくるアマネにちらちらと視線を向けながら、小声で話しかけて
くる。

「そんな事言っちゃって!寧ろよくあんな良い女を前にして冷静を装え
るな?!逆に不安になってきたぜ、お前のことを……………」

何故か呆れた様子で、漸く俺を腕から解放したデンジは、後ろにい
るアマネに絡みにいく。

「えつと、アマネサンは、いつから魔人になったんすか？」

「年齢あんま変わらないと思うし、アマネでいいよ。」

「そうだねえ、マキ：公安に捕まったのが最近なだけで、魔人になったのは何年か前かなあ。この子が高校生くらいのときだね」

不覚だが、後ろの会話に耳をそばだててしまう。

やっぱり、そうだったのか。

アマネは、成人することなく亡くなったのか。

けど、昨日こいつが言ってた事が本当だとしたら…

もし、こいつの中に、アマネがまだ”生きてる”としたら？

「おい!!」

肩を強く引かれる。

それと同時に、先程まで後ろで駄弁ってた筈のデンジの背中が見えた。

何かを弾き返す音。

瞬時に事態を察知した。

寧ろ遅すぎたくらいか。

「おいどうした先輩?!俺に遅れをとるなんて、ほんとにどっかおかしいんじゃないのかア?!」

目前には、巨大な悪魔が街を破壊している。

いくら人気が少なく、市民の騒ぎ声がしなかったからと言って、この反応の遅さはどうかしている。

こればかりはデンジに何も言い返す言葉がない。

「くっ……、すぐ援護する!…おい!お前は周囲に警戒しつつ、逃げ遅

れた市民がいらないか搜索……」

俺が背後のアマネに指示を言い終える前に、アマネはゆつくりと悪魔の方へ歩き出す。

「何やって……」

「おいで……」

聞き取れるか聞き取れないかぐらいの、小さな声でアマネが言った。

その瞬間、デンジと対立してた悪魔が、こちらを向く。

「あ?!おい!!」

そして、デンジには目もくれず、一目散にこちらに駆けてくる。

デンジも拍子抜けして、動きが止まる。

「何やってんだ、後ろに下がれ!!」

アマネは聞かない。

悪魔は、こちらに、いや。アマネに向かって距離を詰める。

茅森は、どんな最期を迎えたんだろう。

あの時死ななかつたってことは、銃の悪魔の襲撃には巻き込まれなかつたって事だよな。

それでも、結局10代半かそこでその命に幕を閉じて。

死んだ後も、悪魔に身体を乗っ取られて。

そして、またこいつの訳の分からない自爆行為に巻き込まれて、死ぬのか？

カースは釘を3回打たなければ、意味がない。

この距離での狐は…アマネの身体を巻き込む可能性が高い。

俺の目の前で。

また、俺の目の前で、大事な、ひとが。

「やめろ……」

悪魔が、目前まで迫る。

「アマネ!!」

俺が手を伸ばし、叫んだと同時に血が、俺の頬に一筋飛んでくる。アマネの服にも、血が飛び散る。

ただ、腕も、脚も、胴体も、そのままだ。

その直後、血の雨が降り注いだ。

アマネを噛みつかうと口を大きく開いた悪魔の顔が、真っ二つに割れ、俺らの両側に倒れた。

俺も、奥に立つでデンジも、呆然と立ち尽くす。

「マキマの話聞いてた〜？わたし、結構強いんだって、いったたでしょ
お」

アマネが振り返る。

血で塗れた顔で、へらりと笑う。

「ちよつとやさつとじゃやられない予定なので〜そこんところ、よろしく！」

そう言って、血を滴らせる右手でブイサインを作り、こちらに突き出した。

君の笑顔

「誘惑の悪魔……。どんな悪魔でも惹きつけることができる。その上、攻撃力も高い」

先の悪魔討伐の一連を報告する。

聞き終えたマキマさんは、満足そうな表情で頷いた。

「うん、想像以上の実力だね。昨今デンジ君を狙って寄ってくる悪魔が多いから、いい避雷針になる」

「避雷針……」

当然の判断だろう。

俺も目の前で、あいつの実力はまざまざと見せつけられた。

宣言通り、”ちよつとやそつとでやられない”であろう戦闘力を兼ね備えている。

けれど、あいつの…アマネの、華奢で、今にも折れそうな白い手足が、首が。

捻じ曲がり、骨が飛び出、転がり落ちる。

そんな想像をしてしまう。

胃液が喉に昇ってくる感覚に、つい口元を押さえる。

「どうしたの？早川君」

「いえ……その……」

言うか躊躇う。

最近、上司で、憧れであるマキマさんに、私情を挟んだ申し出をしすぎている。

「ああ、そっか。彼女の身体、早川君の幼馴染なんだっけ」

「……！知ってたんですね」

「うん。異例な程の知能だからね。身体の持ち主の記憶を利用して
るようだったから、一応身边を調査したの。そしたら、経歴に書いて
あった学校が、早川君と同じって事に気がついて」

マキマさんは、なんて事ないように言う。そして、そのままの声音
で続ける。

「でもね、早川君。もう彼女は、貴方が知っている幼馴染の、茅森アマ
ネさんじゃないの」

マキマさんの、普段と変わらない声音。

それが、俺の耳の奥に、深く突き刺さるような感覚だった。

「彼女は、”誘惑の魔人”。今は、人間の皮を被った、ただの悪魔です」

煙草に火をつける。

煙を肺一杯に吸い込み、宙に細く、長く吐き出す。

この一連動作で、身体は落ち着いた感覚がする。

しかし、頭の中は、まだ先程の想像がこびりついて、離れない。

こんな状態じゃ、俺はデンジの足すら引つ張ってしまうのではない
か？

「あく探してたよお、アキくん」

後ろから、猫撫で声で呼ぶ声が聞こえる。

先程までは顔も見たくなかった。

けど今は、顔だけでもいいから、見たい。

偽物でもいいから、姿形を見て、安心したい。

「アマネ……」

「おっ、漸くその名前で呼ぶ気になってくれたんだねえ」

そう言っつて、俺の横に座る。

「煙草、吸うんだね。これは、わたしの記憶にはないアキくん。ま、あたり前かく子供だったし」

「煩い偽物、ちよつと黙っててくれ……………」

「ひと口もくらい」

アマネは、煙草を手に持つ俺を強引に掴み、フィルターに口をつける。

「おい!!」

「う…………うえ…………なにこれ? 不味くない? よくこんなもの吸えるねえ」

「何やってんだよ! ふさげんな!!」

勢いよく手を引いた拍子に、煙草が地面に落ちる。

「…………随分とアマネの身体を氣遣つてくれるんだねえ。この子、気管支の病氣持ちだったもんね。」

でも大丈夫だよ! わたしが乗っ取ったお陰で、完璧健康体に生まれ変わったから!」

そう言つて、またブイサインを俺に向けてくる。

俺は、力が抜けて、ベンチに再度腰を落とす。

「頼むから…………その身体で変なことをしないでくれ…………最近、集中できないんだ」

俯く。

視界の隅に、先程床に落ちた煙草から、力なく煙が立ち昇っているのが見える。

「俺はまだ死ぬ訳にはいかないんだ。銃の悪魔を倒すまで…………お前には関係ないことかもしれないが…………頼むよ」

「ふくん、銃の悪魔、ねえ……………」

項垂れる頭の上に、手の感触。

柔らかくてひんやりしている。でも、血の通っていない冷たさは、感じない。

そのまま、緩やかに、頭を撫でられる。

「…………大丈夫だよ、アキくん。わたし、そう簡単に死なないよ?」

澄んだ声。顔を上げる。

屈託のない笑顔を見せるアマネ。

口を大きく開いたそこから、鋭く尖った犬歯が見えた。

「だって、わたし…魔人だもん。ねえ？」

想い人

「アマネちゃんにはバディを固定せず、特異課全体……主に人員の少ない所で動いてもらう形にします」

アマネの試用期間が終了する日、マキマさんは俺たちにそう告げた。

「4課に配属……という話ではなかったんですか？」

「うん、当初はそのつもりだったんだけど……。実際動いてみてもらった結果、デンジ君と一緒にだと一箇所に悪魔が集まりすぎるかもしれない。それだと、街への被害が大きくなる危険性があるからね」

「なるほど……」

俺が返事をする横で、アマネは一言も言葉を発さない。

てつきり文句を垂れる物かと思っただが。ただ、表情は険しく、不満気な様子を隠そうともしない。

「アマネちゃんには、もう既に話しているんだ。それで納得してもらってる」

ね、とマキマさんがアマネに視線をやる。

対して、アマネはその目を強く睨み返す。

「わたしは……納得してる訳じゃない。あんたに負けたつもりもない！あれでわたしを服従させたつもりでいるなら、勘違いも甚だしい!!」

普段の間伸びした声音からは想像できない、怒気をはらんだアマネの声が、執務室に響く。

「おい……、何マキマさんに喧嘩売ってんだよ」

慌ててアマネの肩を引くが、マキマさんは驚いた様子もなく、アマネの目を見返す。

「勿論、そんな事思っていないよ。君が”耐え続けることができる”ことができれば、私は君の言った”条件”を守り続ける」

数秒沈黙が流れる。

やがてアマネが罰が悪そうに舌打ちをし、部屋を後にした。

「おい！アマネ!!」

「早川君ももう大丈夫だよ、ありがとう。ご苦労様」

マキマさんに視線を戻す。

いつもの穏やかな彼女だ。

「はい……失礼します」

先程の二人の間はなんだったんだろう。

割って入ることのできない空気に、何も言うことができなかった。

それに、いつも天真爛漫なアマネのあんな姿を見たのは初めてだった。

「お……話、終わったか？」

部屋を出ると、外で待機していたデンジとパワーがいた。

先程まで元気だった筈のデンジが、何故かしよぼくれているが。

「どうしたんだ、コイツは」

「女に振られて傷心なんじゃ。放っておけ」

パワーが言うが、意味が分からない。

「ハア……俺も、マキマさんに会いたかった……、やっぱ、俺にはマキマさんしかいないんだ……。よく分かった、絶対にもう浮気はしない」

「ワシは会いたくない」

「やめとけ、忙しそうだった」

デンジのうわ言は何なのか、いまいち分からないが、無視しよう。

「しっかしまー、あまりにもキレーすぎて時々忘れっけど、アマネもやっぱり魔人なんだよなあ。なんか普通に強えし……パワーも地味にビビってるしよお」

先程執務室から出て行ったアマネの姿を見て思ったのか、デンジがぼやく。

「ワシはビビってなどおらぬ!!アヤツが奇妙な技を使って奇妙なおいをさせてるから気持ち悪いだけじゃ!!」

デンジの何気ない一言が気に障ったパワーが怒鳴る。
よくあることだ。戯れる二人を無視して、歩を進める。

マキマさんやデンジのいう通り、アマネは強い。
想像以上だった。

今のところ、戦闘することになった全ての悪魔を呼び寄せることに成功している。

それに、あの折れそうな、細い腕を一振り。
それだけで、悪魔は血を嘔き出し、地面に倒れ込んだ。

通路の曲がり角にさしかかったところで、アマネの声が聞こえる。

あと、姫野先輩だ。

何やら二人で話している様子だった。

「……………で、君はアキ君の何なの？」

「アキくんの元カノでくす！」

「ハア?!ほんと?」

「うつそお、初恋の想われ人でくす」

「……………もつとタチ悪いじゃん」

「おい、姫野先輩にいい加減な事を吹き込むな」

「あつ、アキ君」

声をかけると、少し慌てた様子の姫野先輩がこちらに手を振った。

「この子、新しく入った魔人ちゃんなんだってね。噂は聞いてるよ」

「姫野先輩、こいつの言うこと間に受けないほうがいいですよ」

「言われなくても分かってるよ。……………相手は悪魔なんだから」

そう言ってアマネを一瞥する。

「せいじゃ、私は非番だからもう帰るよ。じゃーね」

姫野先輩は、ひらひら手を振りながら、その場を立ち去った。

「あくダルっ」

姫野先輩の背中を睨みながら、アマネはそう吐き捨てた。

「なに、あの女」

「俺のバディ、姫野先輩だ。…お前もあの人の後輩にあたるんだ。言葉遣いには気をつけろ」

「バディ?!あの女がアキくんのバディなの?なんか呼び方も被ってるしい……ウザ!!」

「言ってる側から……気をつけろつつつてんだろ」

姫野先輩を睨みつけていた視線が、こちらに向く。

何故か、俺の耳元のピアスを凝視すると、鼻を鳴らした。

「あの姫野とかいう女も…マキマも。みくんなうざあい。……アキくんはわたしのものなのに」

小さく、低い声。

肌が粟立った。

顔を見ると、普段目まぐるしく変わる表情の、一切が抜け落ちたような顔で、アマネは空虚を見つめている。

そして、また小さく、唇を開き、

「みくんな、死んじやえばいいのに」

そう呟いた。

「アマネちゃん、だっけ?あの子」

パトロール終わり、いつもの中華料理屋で昼飯を食べていると、唐突に姫野先輩が切り出す。

急な話題で、口に入れていたチャーハンを吹き出しそうになるのを

堪え、飲み下す。

「その動揺っぷり、やっぱり唯ならぬ仲なのかな〜?」

「唯ならぬって…小学生のときの同級生ですよ」

「初恋の相手ってことは本当なの? ねえ」

姫野先輩が興味津々と言った感じで聞いてくる。

俺は眉間を押さえる。

「でも、難儀なものだねえ…：相手は今魔人でしょ? しかも、無駄に人間のときの記憶ももっている。…過去のあの子を知ってるアキ君の立場としては、この上なく辛いよね。」

マキマさんも酷なことするなあ。あの人、絶対知った上で4課にいらてるもん」

「マキマさんが…俺なら出来ると判断し、任せてくれた…おれは期待に応えるだけです」

そう言つて、煙草を啜える。

ライターを出そうとポケットに手を入れると、その前に姫野先輩が、火をつけたライターを差し出した。

「ただね、アキ君。…：あの子には気をつけた方がいいと思うな」

「…：勿論です。魔人としてしっかり区別して接して…」

「いや、アマネちゃんは…：誘惑の魔人は、アキ君に対して、ちよつと異常なほど執着している。」

アキ君は優しいから情に絆されないか、ちよつと心配だな」

姫野先輩は、いつものようにからりとした態度で、でも俺の目を真っ直ぐ見据えている。

「アキ君には長生きしてもらいたいからね。」

恋愛沙汰で銃野郎に辿り着く前にリタイアとか、絶対にやめてよく?」

「…ウス、氣イ引き締めます。すみません」

ならよし、と笑いながら、姫野先輩も煙草に火をつける。

そんな変わらない毎日、昼下がりのことだった。

この数年間、姫野先輩とこの店で飯を食って、姫野先輩が煙草を吸う姿を見て。

しかし、変わらない毎日がある日突然変わってしまう。

それが、俺らがやっている仕事、デビルハンターなんだという事を、俺はすぐに思い知った。

芽生える

「随分派手にやられたみたいだねえ、アキくん」

黒瀬さんたちが訪れてきた翌日、見舞いの花束を片手に、コイツは病室に顔を出した。

「……生きてたか」

「生きてますとも、当然ですとも。まあ大変だったけどねえ？特異課の人間はほとんど殺されちゃったし、わたしも銃で撃たれるしさあ」

「大丈夫なのか?!……ッ」

急に身体を起こした所為で、傷が痛む。

アマネは、「あらら、無理しないでえ」と、俺の身体を支えながら寝かす。

「いやそりゃあね、痛かったけどねえ？でも全然大丈夫！撃たれたところ……ここなんだけど、ほら！」

そう言いながら、シャツをたくし上げる。

白くて柔らかそうな、真っ新な肌が露出する。

見てはいけないものを見てしまった気分になり、視線を逸らした。

「アマネの綺麗な身体には傷ひとつ残ってないよ」

「分かったから、腹しまえ……」

昨日ベッドの上で吸おうとした煙草が、床に転がっているのが目に入る。

姫野先輩が、死んでしまった。

幽霊の悪魔にすべてを捧げ、跡形もなく、消えてしまった。

記憶を反芻すれば、また目頭が熱くなる。

コイツの前だ。泣く訳にはいかない。

「目が腫れてる……泣いたでしょ」

アマネが俺の顔を覗きこむ。

顔を逸らそうとすると、頬を両手で捕らえられた。

アマネが手に持っていた花束が床に落ちる。

「あの”姫野センパイ”がいなくなったのが、そんなに悲しかったんだ……」

アマネが、そのままベッドに乗り、俺の上に跨る。

顔が近づき、大きな瞳が、俺を捕らえる。

薄い榛色の瞳には光がない。

渴いた冷たさだけが、そこにある。

心臓の音が煩い。

アマネの口角がゆっくりと上がった。

「きやは！あゝ、せいせいした！」

あの女、人間の癖に純粋なアキくんの色々刷り込んでくれたみたいで、ほんとにうざかったんだよねえ〜！」

アマネは、顔を紅潮させ、心底楽しそうに笑い声を上げた。

開いた口からは鋭い犬歯が、揺れる髪の間隙からは、尖った耳が覗く。

そうだ、こいつは…

「アキくんはアマネにぞっこんなのになえ?!あゝほんと……」

悪魔だ。

「死んでくれてよかった〜!!」

「黙れ!」

気づけば、アマネの胸ぐらを掴んでいた。

アマネは、不思議そうに、小首を傾げている。

悪意のない、幼い子供のような表情だ。

俺の中で、何かがぷつりと切れる音がした。

「それ以上、姫野先輩を侮辱するような事を言ってみろ……お前を殺すからな」

「ふくん、殺せるの。アマネのこと」

「お前はアマネじゃねえ、誘惑の悪魔だ!!」

アマネは…そんな事は言わない……! その顔で…アマネの声で、汚い言葉を喋るんじゃない! 吐き気がするんだよ!!」

「なくにを言ってるんだか」

アマネは嘲るように笑った。

「わたしの悪魔的発言に対する言及は置いといて…アキくんさあ、アマネの事、記憶の中で美化しすぎじゃない?」

「は……?」

つい手の力が抜ける。

アマネは俺の手首を掴む。

「これはアマネの本意だよ。わたしにとったら、姫野なんて生きようが死のうがどうでもいい、ただの人間一人にしか過ぎないんだからあ」

「本意って……」

「言ったでしょお。わたしはアマネと仲良しなの! アキくんに対する、わたしの行動や言動の殆どが、茅森アマネの意思だよ。ま、それを行動するか話すかどうかは、わたしの判断というか、気まぐれみたいな節はあるけども?」

手首を掴むアマネの手が、上に移動してくる。

そのまま、指を絡められた。

「それを踏まえて、よく、思い出してごらん？茅森アマネがどんな人間だったか……」

思い出したくなくても、駄目だよ」

アマネが、耳元で囁く。

栗色の柔らかい髪が、俺の頬に触れる。

「君の大大好きなアマネちゃん、怒つちやうんだから……」

心を支配する

「どういふ風の吹き回しですか？」

俺は、むくれ顔のアマネの横に立つ大男……

俺の師匠であり、新体制となった特異4課の隊長となった、先生……岸辺さんに問いかけた。

「何故こいつが岸辺隊長のバディに……？」

「なんかわたしの美貌にやれたとかなんとか、………つたあ!!」

ガチン、と鈍い音がし、アマネの脳天を先生が殴る。

「誰が魔人相手に欲情するか。そもそもガキに興味はねえ」

「ちよつと見たあ?!アキくん!こんな美少女の頭、普通殴れる??やっぱイカれたジジイだよあんた!今からでもバディを解消してやる!!」

ギヤーギヤーと騒ぐアマネを他所に、先生は続ける。

「先の銃撃で俺のバディも殺られた。それで残った数少ないメンバーの中で、こいつが一番マシだった。

誘惑の能力も便利だが、一撃の攻撃力が高い。それに感けて体力もねえし、とろいが。……そこは今鍛えている最中だ」

「ひっ……!」

先生の黒い瞳がじろりと横に向くと、アマネは青ざめた。

そういえばデンジとパワーも先生に稽古をつけてもらっているらしいが、毎日死にかけの状態で帰宅してくるな。

お陰で静かで助かっているが。

「次に予定している、サムライソードとヘビ女を捕まえる作戦……新4課お披露目の頃にはあの二人同様にある程度使えるようにしないとだからな。お前も死にたくなければ本気でやれ」

「………分かってるよ」

アマネはそっけなく返すが、神妙な面持ちだ。

今回の作戦が失敗したら、おそらく特異4課は解体される。

デンジやパワーと同様、魔人のアマネは公安によって処分されるだろう。

改めて、こいつは魔人で本来敵対する相手だということを思い知らされるようだった。

「はーあ、最悪。なんでアイツがバディなの？ジジ臭いし、酒臭い：おまけに毎日毎日半殺しにしてきて超しんどいし！く！く！く！」

折角空ぎができたんだから、アキさんとバディがよかつたんだけどお

アマネが、盛大な溜息と共にぼやく。

先生と別れた後なのに、何故かこいつは俺の後をついてくる。

姫野先輩が殺された日……特異課を狙った襲撃により、ほぼ壊滅状態となった特異課は4課合同となり今日に至る。

それによって課を跨いで活動していた為、試用期間以来そこまで頻繁に顔を合わせる機会のなかったアマネとも、必然的に毎日のように顔を突き合わせるようになった。

シンプルに、最悪な気分だ。

姫野先輩に対する発言も不快極まりなかったが、それだけではなく、あの時言われた言葉……

アマネの本意、とは。

あの後、俺はぼんやりと思い出した。

手紙をビリビリと破る音。

紙切れが地面に舞い落ちる情景。

グシャ、グシャ、と音を立てて、踏み潰されていく。

その後の、美しく笑った、彼女の顔。

「ごめんねえ、この前のことまだ怒ってる〜?」

アマネの声にはっと我に返る。

いつの間か追いつかれたようで、目の前に立ち塞ぐようにしている。

「…魔人の言ったことに熱くなった俺が間違っていた。それだけのことだ」

言いながらいつもの癖で胸ポケットの煙草を探る。

しかし、アマネの顔を見て、ついその手を下ろした。

「ただ……お前に言われた通り、確かに俺は、アマネに関するこの記憶が薄れてるところはあるのかもしれない。……お前の言うことに従うのは癪だが、アマネを弔う為にも、思い出す努力はする」

「まるで、あの子が死んでるみたいない方をするなく、わたしの中で生きてるとは思わないわけ?」

「お前には最初に騙されているからな。根本的な部分で信用していない。だが……」

デンジや……サムライソード。

デンジだけなら信憑性は薄かったが、最近はず”そういう事があってもおかしくないのではないか”という可能性は、ちらついてきている。

「お前がアマネの記憶や意思を引き継いでるって言うのは、本当なんだろう。……お前が真似るアマネの姿は、本当にそっくりだ」

よくない考えだ。

そういう思考は、俺の目的や行動力を鈍せる足枷になる。

そんな気がしてならない。

それでも、俺の目の前のアマネは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「そっか……そっかあ。まあ、今はそれでいいよ!心が広いアマネさんは許してあげよう!」

そう言うと、スキップして前に行く。
プリーツスカートが、ひらひらと踊るように翻る。

眩しいな。

アマネは、陰があるけど歯を見せず、綺麗に笑う女だった。
美しかった。でも、

今日の前で、こちらを振り返り、顔をくしゃりとして笑う彼女は、眩しい。キラキラしている。

そんな事、思わなかった。たしかあの時は。

考えてはいけないことだ。

今の方が、昔より………なんてことは、考えてはいけないことなんだ。

片鱗

「いや〜よかったよかったあ！無事作戦が成功して！」
快活な笑い声が響く。

先のサムライソードとヘビ女の捕獲作戦……
サムライソードの捕獲は成功したものの、ヘビ女は自殺。
成功と言っているか分からないが、結果特異課は解体されることな
く、今回の事件は幕を閉じた。

幽霊の悪魔との闘い、そしてサムライソードへの”気楽な復讐”を
果たして、自分の気持ちともある程度決別できたような気もする。

「わたしたちのおかげで、暫くは特異課悪魔ズも安泰だねえ、ね！天使
クン」

不自然に笑うアマネを見て、近くにいた天使の悪魔が怪訝そうな顔
を向ける。

「いや。近くで見てたけどこの子、何もせずに逃げ回ってた気がする
んだけど……」

「何言ってるの〜?!天使クン！わたしちゃんと戦ってたよねえ?」

「おい、アマネ。どういうことだ」

鬱陶しそうにする天使の肩を揺すっている、アマネを睨む。

「……だって〜、わたしの誘惑の力は悪魔に対してしか効かないし……
てかそもそもあんなにうじゃうじゃいるのにこっちに向かって来ら
れても困るし……何よりあのどろどろしたので手が汚れるのが
……」

「汚れるのが、なんだって?」

アマネの背後に、大きい影。

先生が、ナイフを片手にアマネを見下ろしている。

「お前は修行が足りなかったみたいだな。ついてこい」

アマネの顔が、一気に青ざめていく。

「うわーん!! 助けてアキくん! 文字通り半殺しにされるよおわたし?!」

「大丈夫だ、半不死身だからお前」

先生にそう言われながら、首根っこを掴まれ引き摺られていくアマネを呆れながら見送る。

天使の悪魔と二人きりになると、途端にその場が静かになる。

天使の悪魔……俺の新しいバディ。

まさか悪魔とバディを組まされることになるとは、想像もしていなかった。

マキマさんの采配だ。

無論文句を言うことはかなわないが、悪魔という点を除いても全く上手くやれる気がしない。

兎に角やる気がなくて、扱い難いのだ。

「キミ、なんであの子にあんな懐かれてるの?」

唐突に天使が切り出す。

悪魔と馴れ合うつもりはなかったが……今のバディはコイツだ。

質問に返すぐらいの会話はしておくか。

「人間だったときのアマネが……昔の友人だ。暴力の魔人と同じで人の時の記憶を保持している。懐かれているというよりかは……その友人の記憶を利用して、俺のことをからかっただけだろ」

「ふーん……そう。キミ、悪魔のこと嫌いそうなのに大変だね」

天使は興味がなさそうな口調ながら、続ける。

「まあ、これは僕の余計な一言かもしれないけど……あの子、魔人にしては少しにおいがちがうんだよね」

「……は? それってどういう」

「悪魔でも、魔人でもないようなにおいがするってこと」

天使の落ち着いた口調とは逆に、俺の心臓の音が徐々に煩くなつていく。

「あのチェンソー君と、似たような何かを感じるんだよね」

「アマネ……………」

「……………はっ!!」

訓練場。

その中心で一人、大の字で倒れていたアマネ。

声をかけると、一瞬で飛び起き、構えの体勢をとる。

「やばい、また気絶してた……………! 岸辺え!! 次こそあんたを殺す!!!」

「……………先生はもう帰ってる」

「ん?! あれえ、アキくん? なんでここに」

俺を認識した途端、先程までの殺意に満ちた表情から一変、あどけない笑顔を向けてきた。

「恥ずかしいとこ見られちゃったなあ、今のわたしの事は忘れてもいいよー!」

「……………お前は」

人間の身体を乗っ取った魔人ではなく、アマネと”契約しているだけ”の悪魔なのか?

本当にアマネはお前の中で”生きている”のか?

『アマネが早川くんのこと、どう思っていたのか知りたくない……………?』

魔人になったアマネに初めて会った日、言われた言葉を反芻する。

……………いや、知ったところでどうする?

俺はあと、2年しか生きられないのに。

きつと、足枷になってしまう。

生に執着する理由ができてしまう。

俺は……戦わなければならぬのに。

「アキくん？」

アマネは、次の言葉をなかなか発さない俺を不思議そうに見上げる。

「……………いや、悪い。なんでもない」

冷静じゃなかった。

踵を返すと、アマネも俺についてくる。

「ふふ、わたしはアキくんがわたしの事、いっぱい考えてくれるようになったみたいで嬉しいよ」

アマネは、俺の心情を他所に、にまにまと笑っている。

「…何も言っていないだろ」

「顔を見れば分かるよ。……………うん、ありがとうね」

そう言っつて、悪戯っぽく目を細めて微笑んだ。

歪んでいく

銃の悪魔の場所が分かった。

近いうちに討伐遠征がある。

参加する為には更に悪魔を倒した実績が必要だ。

しかし、そんな俺のやる気とは逆に、天使の悪魔は全く働こうとしない。

正直、とても疲れる。

今日もくたくたに疲れた状態で帰路につく。

玄関のドアを開けると、デンジの話し声が聞こえてきた。

パワーは今、血抜きの為不在の筈だが……。

「デンジ、最近すごい機嫌いいね〜」

「ん〜…そうかあ??」

「うん、青春を謳歌してますって顔してる」

「青春……。確かにそうかもなア…青春、しちまったかもしれないねえな………!」

「いやあ、わたしは嬉しいよお。マキマなんかじゃなくて普通の女の子に恋してくれるようになって……」

「え、なんでそこまで知ってるの」

「あ、アキくんおかえり」

リビングのドアを開ける。

そこには、トランプやらジェンガやら菓子やらを広げたテーブルに對峙して座ったデンジと、アマネがいた。

「おい、なんでお前が家にいる」

「え〜、だってデンジが毎日アキくんの手料理食べてるって言うから

さあ。わたしも食べたいからついてきちゃった」

アマネはけろりと言う。

デンジを睨むと、

「まあまあ、いいじゃん！パワーいねえし、いつもと作る量は変わんねえだろ？」

よく分からないが、いつも以上にへらへらとしている。

「今日は疲れてる……。悪いが適当にすませてくれ」

「おいおい！そりゃないぜお前く!!」

「そうだよお、わたしめちやくちや楽しみにしてたのにく！あ、デンジまたババ引いた」

「うあああ!!マジかよ!!」

「弱すぎく！これどこにあるお菓子は全部わたしのもんだね」

「くっそおおおおく!!!」

煩い…………。

頭を抱えながら自室に行く。

ドアを閉めても向こうからギヤイギヤイ騒ぎ声が聞こえてくる。

「疲れた……」

ネクタイを緩めながら、ベッドに倒れ込む。

着替える元気もない。

そのまま瞼が重くなってきた、俺は眠りついた。

目が覚める。

あのまま寝てしまったようで、時計に目をやると、時間は深夜になっていた。

制服を着たまま寝た所為で身体が痛い。

水を飲もうとリビングに行くと、机の横でデンジがいびきをかきながら寝ている。

その奥のキッチンでは、アマネが後片付けをしていた。

「意外だ」

「失礼なあ、自分で出した物くらい片付けるよ。お腹は空いた？」

「ああ、まあ。少しな」

何か簡単に作ろうかと、冷蔵庫を開ける。

背中に視線を感じた。

「…………お前も食べるか？」

「やったあ」

アマネは嬉しそうに顔を綻ばせた。

冷蔵庫には余り物の野菜が何種類か残ってる。

そこまで食欲もないし、明日の朝飯分もまとめて味噌汁でも作ろう。

「白飯は？・食う？」

「食う」

これも明日分まとめて炊こう。そしたら先に米を研いで……

「手伝おうか」

「…………ほんとに意外だな」

「ふふ」

アマネは髪を一つに括りながら、得意気な顔をする。

「料理もね、教えてもらった記憶があるんだ。だからちよつとならできるよ」

そう言った通り、アマネはこちらの心配を他所に、手際よく野菜を切っていく。

アマネの母親は、彼女に無関心だった筈だ。

それこそ、父親に虐待されている娘を放っておけるくらいには、そんなアマネが料理を教えてもらった記憶がある。と言った事に、悪いが少し違和感を覚えたが、その横顔が少し寂しそうに見えて、何も聞くことができなかつた。

「いたっ」

アマネが小さく声を上げて、包丁をおく。

「どうした」

「やつちやつた。なんだかんだ久しぶりだったからねえ」

見ると、アマネの指から血が出ていた。

艶やかで、真っ赤な血。

普段俺らみたいなのは、見慣れている筈のそれ。

なのに、白い肌を滑り落ちていく、その光景から目を離せない。

「アキくん？」

アマネが呼びかけてくる。心配そうにしている声に聞こえた。

大丈夫だ、と言おうとして顔を上げる。息が止まつた。

俺を見据えるアマネは、妖しい微笑みを浮かべていた。

待ち望んだ獲物が目前に迫ってきた、捕食者のように。

榛色の瞳が、俺を捕らえる。

動けない。

血が溢れ出るその指で、頬を撫でて、俺の唇をなぞる。

血のぬるりとした感触が唇を伝う。

その指が、俺の歯をなぞり、舌に触れ、鉄の味がした。

ーーーーリリリリン……

突如、家の電話が鳴る。

アマネの動きが止まつた。

瞳から、ギラギラとした光が引いていき、焦りの色に変わっていく。

「やばい……やばいやばいやばい！」

さらには顔が青くなっていく。

俺は突然焦り出したアマネを不審に思いながらも、受話器を取る。

「…はい、もしもし」

『おう、アキ。岸边だ。今そっちに”美少女”はいるか?』

「はあ。……おい、アマネ。岸边隊長からだ」

「やつぱり……! 外出許可申請の時間過ぎてる!!」

『あと5分以内に施設に帰ってこなければお前を3回ほど殺す、そう伝えておいてくれ』

「だそうだ」

「5分?! いや無理だつてえ!! 走るの嫌いなのに!」

走っても間に合うような距離ではないと思うが……。

アマネは泣きそうな声を上げながら、バタバタと帰り支度をする。

「はあくご飯食べれなかったじゃん、もう。…せいじゃ! お邪魔しましたあく〜!」

「ちよつ、おい! ちよつと待て!」

急いで帰ろうとするアマネの腕を掴む。

「指……! 怪我、絆創膏ぐらいして行けよ」

「もう治ってるよ」

そう言つて、左手を見せてくる。

残っていたのは血の痕だけで、その傷口は消えていた。

「言ったでしょお。わたし、魔人なんだつて」

そう言い残し、走り去っていくアマネが背を向ける前に見せた顔は、やはり少し寂しそうに見えた。

ボタン、と玄関のドアが閉まると、途端に静まり返る室内。

先程の出来事が嘘のように思える中、口の中に広がる血の味が、まざまざとそれに現実味を帯びさせた。

誘惑

アマネは、半不死身だ。

しかし、魔人の中でもかなり強いアマネが、目の前で血を流す姿を見たことがなかった。

その日は、他の課から応援要請が入り、それにアマネが一足先に向かっていった。

敵は、銃の悪魔の肉片を飲んでいった。

俺が現場に来た時、アマネの腕は千切れ、腹部は深く抉られていた。

「うん、完全に油断した」

いつもの調子の声だった。

病院のベッドに横になってはいるが、腕は元通りになっている。

いつものアマネだった。

「なんか最近調子悪くてさ、力が出なくて。本調子じゃないんだよねえ。」

「ま、この通り身体は元に戻るからさほど問題ではないんだけどさ」
「そう言って気楽に笑うアマネだが、俺はベッドの横で立ち尽くしたまま、動けない。」

「情けなく、身体が僅かに震えている。」

「……大丈夫だよお、アキくん」

アマネが俺の手を握る。

俺の冷え切った手先よりも、その手は更に冷んやりとしている。

「……確認、してみる？」

そう言つて、アマネが病衣に手をかける。

着物のように衿が重なり合っただけの病衣は、サイドの蝶々結びになつている紐を解けば、簡単にはだけてしまった。

アマネは中には何も着ておらず、白い素肌が曝け出される。

「まずここね、腕。ちゃんとついてるでしょ」

病衣から袖を抜く。

上半身が裸になる。

小さい肩幅、小ぶりな乳房、薄い色の乳頭が露わになつた。

見てはいけない物を見てしまった気分になる。前もそうだった。でも、今は何故か目が離せない。

アマネが俺の手を取り、臍の辺りに誘導させる。

「ほら、お腹も。なぐんも残つてないよ」

肋骨が浮くほど細いが、柔らかくてしつとりとした感触がする。

女性の身体だった。

アマネが悪戯っぽく、期待しているような視線を送る。

息を呑む。

俺の手の震えが少しずつ止んでいき、

何故か、涙がつう、と頬を伝つた。

「ええ〜……なんで泣くのお」

「……いや、すまん。これは」

まさか、涙が出るとは思わなかつた。

ただ、俺はアマネの、白くて真つ新たな素肌を。

傷も、痣もない綺麗な身体を見て、心底安堵してしまつたのだ。

「もお、仕方ないなあ……」

アマネは苦笑いをし、けれど少し嬉しそうにして、俺の頭を抱き寄せた。

顔に素肌が触れる。

身体もひんやりと冷たくて、けれど暫くすると、触れているところがじんわりと温かくなっていた。

生きている、人間の身体だった。

俺は更にその熱を求めて、アマネの背中に手を回す。

暫くそうしていた。

そうしていたかった。

前に見た、彼女のギラギラと光る瞳への恐怖心は、触れたところの熱が高くなっていくにつれて、徐々に薄れていった。

蠢く何か

「今日はあ、デンジの失恋を慰める会アンド、パワー復活祝いパーティーを開催しまあ〜す!!」

「いえ〜い……………」

アマネの澆刺とした声。

覇気のないデンジの声。

部屋の隅からアマネを睨むパワー。

「……………なんでまたお前が俺ん家にいるんだ？」

「なんでウヌがいるんじゃ」

「大丈夫！今回はちゃんと許可を貰ってきたから割と長くいれるよ
お」

「お、アマネも監視なしでそこまで出来るようになったんだな……」

デンジが死んだ魚のような目をしながらも、アマネとハイタッチをする。

「そういう問題じゃねえ……」

「そうじゃ!!ワシも納得いかん！ワシがない間にこの家に来てたのも気に入らぬ！」

隠れながらもアマネに抗議するパワー。

アマネがそんなパワーをじっと見つめる。

びくつと身体を震わせるパワー。

「パワーは血の魔人だから、血が大好きなんだっけえ？」

すると、アマネが袖を捲り、腕を出す。

「よし、快気祝いだ！好きなだけ吸いなさい」

途端に顔を輝かせるパワー。

すぐに懐柔されやがった……………。

最近、天使と巡回に勤しんでいたりと、デンジが気落ちしている原因であるボムの事件もあった為、アマネと顔を合わせるのには数週間ぶりだった。

先日のことがあり、妙に顔を合わせるのが気まずかったが、向こうは見たところ、いつもと変わらない。

「ウマイ!!コイツの血、デンジの次ぐらいにウマイぞ!」

「ほどほどにお願いねえ」

「てかパーティーなのに飯がなくなね?」

「まあそれは……………」

一斉に三人が俺に顔を向ける。

「クソツ…結局俺が作るのか」

まあいい、どうせ毎日やる事だ。

ただ、癩に触るので手抜きにしてやろう。

冷蔵庫に適した余りものがないか探る。

「結局前は食べれなかったもんねえ」

パワーから解放されたアマネが髪を一つに括りながら、キッチンに来る。

「手伝おうか」

「いや……………」

以前の事を思い出し、目を伏せる。

左手の指にちらと盗み見る。

当たり前だが、傷は跡形もなく消えていた。

「そ、じゃあお任せします。」

デンジ、パワー!ゲームでもやろうか?折角なので勝った人は、ここにいる人に何でもお願いできる権利を与えることにします」

「ここにある食い物全部ワシのもの!!」

「俺の心…………ときめきを思い出させてくれえ……………」

「それじゃあわたしはアキくんとデートする権利ね!」

「あ?俺はゲームしてないから関係ないだろ」

「二人ともいいよね?」

馬鹿二人が頷く。

パワーに至っては意味分かってんのか？

「いいってき、アキくん」

アマネがにやりと笑ってこちらを見る。

決まった訳でもないのに、既に気が重い。

溜息だけ吐き、返事はしなかった。

「デンジい、いつまで落ち込んでる訳？またすぐ好きな女見つかるよ！君、ちよろいんだからあ！キャハハ!!」

「そうじゃデンジ。ワシの野菜やるから元気だせ」

食卓を囲み、すっかり打ち解けた様子のアマネとパワーが、デンジの肩を両側から叩く。

そんな様子を缶ビールを飲みながら眺めていた。

最近は何れてきたこの騒がしさも、以前だったら考えられなかった光景だ。

ボムとの戦闘で、また多くの同僚が亡くなった。

こんな平和な時間が違和感に思えるような、そんな日々の繰り返しだ。

「もう俺はときめいたりできないんだ……もう一生、誰かを好きになることはできないかもしれないんだア……」

「何言ってるのおあんた?!……ってか、その顔……ぶぶ、ヤバ!!よく見たらおもしろ!!キャハハハハ!!」

「……?なんかコイツのテンションおかしくないか?」

いつも煩い奴だが、今日はそれに拍車がかかっている。

「確かにウヌと同じ飲み物を飲んでからおかしいのう」

パワーは、俺が手に持つ缶ビールを指差す。

「あ?!いつの間に！お前未成年だろ!!」

「大丈夫でくす、実質20年以上生きてるんでえくす」

そう言っつて、なぜか変顔でダブルピースをする。

綺麗な顔が台無しだ。

「いや〜お酒、初めて飲んだけど、ふわふわあ、くらくらあ……面白いねえ……ぷふ、デンジ。なんかもつと変な顔になつてくよお……」

あひや………」

そして、そのまま目を回して倒れ込んだ。

「おい！大丈夫か?!」

「寝ておるな」

パワーと並んで顔を覗き込む。

「あっこいつ、酔っ払ってるくせに地味に一抜けしやがった！」

「なんじやと……?!つまりは……コイツが死んだから、ワシの勝ちつてことじやな」

「ハア?!どう見ても俺の方が手札少なえだろ！やっぱルールわかってねーじゃんお前！」

「煩い！……ここにある肉と菓子はワシの物なんじや!!」

またいつものような喧嘩がはじまる。

そんな騒がしさを物ともせず、アルコールが回って顔を赤くしたアマネは、ぐーすか寝ている。

こんな緩んだ、幸せそうな表情も初めて見るかもしれないな、とふと思った。

夜は更けていき。

夕飯の片付けも終わり、デンジもパワーも自室に行ってしまったが、アマネは酔って寝たまま一向に起きる気配がない。

「おい、起きろ」

「んあ………?アキくん」

アマネを叩き起こす。

涎を垂らして随分熟睡していたようだ。返事はあるが中々目が開かない。

「お前、外泊許可とか貰ってないだろ？」

「ん………?ああ………そっかここ、施設じゃないんだっけ………」

ゆつくりと起き上がるが、そこで動きが停止する。

「なに呑気にしてんだ、立て！」

「んんんん無理……………」

もう一度倒れようとするアマネの腕を掴む。

完全に脱力してやがる……………」

すると、アマネが両手をこちらに広げ、

「おんぶんぶん」

と甘えた声を出した。

「誰がするか。岸辺隊長の方には連絡入れといてやるから、あとは自分でなんとかしろ」

「ええ、なんでよう。アキくん……………」

アマネがゆつくり目を開く。

薄く開いた瞼から、榛色の瞳が覗く。

「ねえ、お願い……………」

まるで駄々を捏ねる子供だ。

俺は溜息を吐き、船を漕ぐアマネを抱き上げる。

軽い。身長は女性の中では低くない方だと思うが、それにしても軽すぎる。

折れそうな脚を慎重に持ちながら、靴を履かせる。

茶色いローファーが、小さい足にすぼりと嵌る。

完全に俺に体を預けているアマネを再度背負い直し、他の二人が起きないよう、玄関のドアを静かに閉めた。

夜は深く、周りの家の電気も殆ど消えている。

人通りも全くない静かな道に、俺のゆつくりとした足音だけが響いた。

「…………アキくん、煙草やめたんだね」

先程から規則的な寝息が聞こえてこないとは思っていた。

アマネがほそりと耳元で言う。

「起きてるなら下すぞ」

手を離そうとすると、拒否するように俺の首に腕を回し、しがみついていた。

「これが、いい。昔と同じにおいだ」

「おい、嗅ぐな。てか知らないだろ…昔の、においなんて」

俺はまるで、自分に言い聞かせるように言った。

「あのねえ、アキくん…：なんか最近ね、楽しいんだあ。アキくんと一緒にいれるし。あと、デンジは面白いし、パワーもあんまり懐かない猫みたいでなんかかわいし、ニヤーコはふわふわだし。岸边はうざいけどなんだかんだいい奴だと思っしき…：嫌いな奴もいるけど、それでも毎日辛いようなことはない」

小さく、夢現のままアマネは続ける。

「なーんか幸せ…：。やっぱ、生きててよかったあ」

そう言うと、また小さく寝息が聞こえてきた。

「生きてて、よかった、か…：…」

彼女の口から、そんな言葉が聞く日が来ると思っていなかった。

思い出の中のアマネは、あんなに人生を呪って、自分を憎んで、苦しそうに息をしていた。

こんなのは、ただの俺のエゴだ。

その一言で救われたような気になるのは、間違ってる。

けれど、心の奥底に溜まっていた鉛のようなものが、ふっと軽くなったような気がしてしまった。

乖離

目が覚める。

白い天井。

もう大分見慣れてきた、病院の天井だ。

意識が徐々に覚醒すれば、思い出してくる悍ましい体験。

地獄。

本来俺たちが行くことはない場所。

そして、闇の悪魔。

見慣れた白い天井が、急に疑わしくなる。

本当に生きてるのか、俺は。

あの状況で、生きて帰ることができたのか…。

「……………アキくん」

声がする。

視線を横に移すと、ベッドの横に、アマネが座っていた。

俺を見つめる瞳が揺れている。

そして、小さく微笑んで、

「よかった……………本当に、よかった」

震える声で、そう言った。

握られていた右手から、ひんやりとした感触が伝わる。

その右手を僅かに握り返すと、段々と身体の感覚と意識が結びついていく。

そこで、気づいた。

おかしい、左腕が動かない。

俺は左腕を失っていた。

「片腕だけでもくつついてよかったな。デビルハンターとして首の皮一枚繋がった」

「岸辺隊長……。貴方が見舞いに来てくれるなんて珍しいですね」

「馬鹿言え。アイツが行きたいって言って聞かねえから、一応同伴だ」
「入院している他の隊員の様子を見てくる」と言って出ていったアマネと、入れ替わる様に病室に入ってきた先生は、そうぼやいた。

地獄に送られた際、偶然デパート内にいなかった先生と吉田ヒロフミ、そしてアマネ。

その3人は運良く難を逃れたそうだが…

「こっちはお前らに比べたら楽なもんだったが、アマネの様子がおかしくなってるな。アキくんアキくん煩えから途中から気絶させた」
「なんか、すみません」

「普段から訳のわからん奴だが、あんなアマネを見るのは初めてだった。……お前ら何があったんだ」

「……………文字通りの地獄を見ました」

脳裏に焼き付いた光景。

思い出しただけで、情けなくも、背中に冷や汗が伝う。

それに、デンジとパワー……

二人が倒れ込む姿を見て、俺は何もできなかった。

頭の中が真っ白に染まって、思考が停止した。

また大事な人を目の前で失う恐怖で、身体が動かなかつたのだ。

「ところで、なんで俺らは助かったんでしょ。人間が…いや、大抵の悪魔じゃ到底敵うような相手じゃなかった」

「マキマだよ。アイツがお前らを助け出した」

「マキマさんが……」

また、俺はあの人に助けられたのか。

本当に敵わない。あの人ならやりかねないと疑わずに思えるのが

凄い所だ。

俺の憧れで、俺が目指している人で……

いや、またってなんだ？

俺は以前、マキマさんに何故助けられたんだろう。

「ギャアアア!!」

唐突に、病室の外から断末魔が聞こえてくる。

「闇の悪魔じゃア!!闇の悪魔が後ろからついて来ておるウ!!!」

「いや、君の馬鹿でかい声にキレてる看護師さんだよ」

「あー、最近ずつとこんな調子なんだよ、コイツ……」

病室のドアが開く。

先程出て行ったアマネが、デンジとパワーを引き連れて戻ってきた。

「お、目エ覚めてんじやん。大丈夫か？」

「うええ、ワシを殺しに来たんじや〜!アマネえ〜」

「みてみて〜アキくん。パワーがすごい懐いてくる!」

デンジもパワーも、動いているし、喋っている。

腕も、元通りになっている。

アマネもいつもと同じ調子だ。

「お前ら……病院なんだから静かにしろよ……」

俺もいつもと変わらない口調で叱るが、コイツらが元気に動いている、生きている……

それだけで、一気に肩の力が抜けた。

「今度北海道に帰るんだが、アマネも来るか？」

何でこんな事を言ったのか、よく分からなかった。

ただ何気なく口に出ていた。

早めに退院でき、仕事の復帰まで日にちが空いたため、墓参りに帰

省することにした。

何故かデンジとパワーもついてくることになったが…。

二人が付いてくるならアマネも来るだろう。てつきり喜んで即答すると思っていたのだ。

しかし、アマネの顔は引き攣っており、どう答えるか考えあぐねているようだった。

「…悪い。お前こそ、いい思い出がないよな」

無神経な事を言った。

自分の軽率な発言を反省する。

「いや、うん。ごめん…：大丈夫なんだけど…：わたしはやめとくよ。でも、誘ってくれたのはすつごく嬉しいよ！アキくんも変わってきたねえ」

「あの馬鹿二人の面倒を一人で見きれないから、頼んだだけだ」

「いや、どう考えてもわたしも二人に加担する側でしょ。素直じゃないなあ、もう」

細い腕に見合わない強い力で、背中を叩かれる。

鬱陶しい、言わなければよかったか…。

「いいね、うん。きつと楽しいだろうねえ。気をつけて行ってきてね」
そう言われ、送り出された。

…が、楽しい訳あるか。

公共の施設で騒ぐわ、パワーは船で吐くわ、供物を食うわ…。

どつと疲れた。

腐った供物を食べてまたも嘔吐しているパワーに呆れながら、墓地を後にしようとする。

人の少ない墓地で、老夫婦が向かいから歩いて来るのが視界に入っ

た。

「おいアキ〜！待てよ」

デンジが後ろから声をかけてくる。

それと同時に、向かいの老夫婦が此方を見てくる。

なんだ……………？

怪訝な表情でいると、その二人が近づいてきて、おそろおそろ俺に尋ねた。

「もしかして、早川アキさん、でしょうか……………？」

困った。

全く見当もつかない人たちだ。

昔住んでたときに、近所に住んでいた人だろうか……………？

「急にごめんなさい……………私たちの娘の墓地の近くに早川さんのお墓があるのを前から知っていて……………今、アキさんと名前をお聞きして、もしかしたらと思ひまして」

「えっと、すみません。どちら様でしょうか……………」

「私たち、茅森アマネの祖父母です。…アマネの事は覚えていらっしやいますか？」

その後、アマネの祖母を名乗る女性が、俺に語った事は、俺が知らないアマネの半生だった。

あの日。

俺の家族が銃の悪魔に殺された日、アマネの両親も同じように亡くなっていた。

そして、俺の前にいる老夫婦…アマネの母方の祖父母に、彼女は育てられることになったそうだ。

ただ、アマネは高校生の時に……………元交際相手から刺されて、重症を

負って脳死状態になってしまった。

その後、動ける筈のないアマネが急に行方不明になる。…この時に悪魔に身体を乗っ取られ、魔人になったのだろう。

二人は捜索願を出していたが、今から数ヶ月前に公安から連絡が入り、”アマネが魔人として処分された”事を告げられたようだ。

「あの子は、私たちの所に来た時、本当に表情の乏しい子でした。

娘とは縁を切っていたので、アマネとはその時初めて会ったのですが…あの子がどんな環境で育ってきたか、その顔を見ればある程度想像できました。

今更かもしれない。それでも、これからは沢山幸せな思いをして育ってほしい。

私たちはその一心で、あの子に愛情をかけて育てました。

病気の方も良い治療法が見つかって、あの子の笑顔も増えてきて……これからって時だったんです。

それなのに……あんな最期になるなんて…」

言い終えて、お婆さんは嗚咽をもらし、言葉を詰まらせた。

代わりに、お爺さんが話し出す。

「…あの子がこの故郷を離れる日、近くの公園のブランコに座って、梃子でも動こうとしなかつたんです」

俺らがよく過ごした、小さい公園。

その光景が目には浮かぶ。

「拳句泣いてしまって、こう言ってたんです。『アキくんに会いたいと。』

あの子が泣いたところを見たのも、その時だけでした。

僕らが思っているより、君はアマネの辛い人生の中で、心の支えになっっていたのかもしれない。

死ぬ前に、会うことができなかつたのが、本当に可哀想ですが…」

「結局、あの子の遺骨すら戻ってきませんでした。今度札幌の私たちの家に、線香でもあげに来てくれませんか？あの子、きっと大喜びする筈ですから」

そう言つて、住所と電話番号が書かれた紙を渡される。

「……………はい」

「それでは、僕たちはこれで。」

今日は早川君に会えて、…本当に会えてよかった」

お爺さんは、涙を堪えた目で、俺を見る。

その目をみて、俺の喉元まで出かけた言葉。

それを、苦渋の思いで呑み込んだ。

「……………よかったのかよ。アマネが実は生きてるってこと、言わなくて」

「公安の機密事項だ。……………言える訳、ないだろ」

デンジの言葉に、そう返すしかなかった。

二人の丸まった背中を見送りながら、アマネが前に寝惚けながら言っていたことを思い出す。

『やっぱ、生きててよかったあ』

アマネは、生前もそう思えるようになっていたのか。

『死にたくない』と思つたのだろうか。

あんなに、苦しそうに生きていたのに、そう思えるようになっていたのか。

それが、俺の存在のお陰だつていうのか？

俺は何もしていないのに。

ただ、アマネと一緒にいたくて、俺の為に過ごして。拳句、彼女から逃げたのに。

綺麗な思い出だけしか憶えていなかったのに。

アマネがどんな気持ちでいたか、ずっと解ることができていなかったのに。

訣別

「みんな、おかえり〜」

東京の最寄り駅につくと、改札の向こうから手を振るアマネが見えた。

「おつかれさま〜！どうだった？北海道」

「めちやくちや楽しかったぜ！アマネも来たら良かったのに」

「いや〜わたしは岸辺が家にいない日、ニヤッコの面倒見るように言われてたしさあ」

アマネはそう言葉を濁す。

「アキくんもおつかれ。二人と旅行なんて疲れたんじゃないの？」

「……ああ、散々だった」

アマネの祖父母の話聞いた後だ。

上手く顔を見て話せない。

何も知らない彼女は、いつも通りにこにこと笑っている。

「聞いてくれよ！パワーの奴、あっちでもこっちでもゲロ吐きまくって大変だったんだぜ」

「腹の中の物は出る上に旨い物もない……最悪じゃった……。デンジの血も飽きたしのう。またウヌの血を飲ませろ」

「お前…散々勝手に飲んでたくせに、そういうこと言うかあ？」

「そーだったのね〜。まあちよつとだったらいよいよ」

気を利かせたのか空気が読めないのか、デンジが話に割って入ってきて助かった。

駅の外に出ると、辺りはもう暗い。

人もまばらの道を、4人で歩き出す。

「あ、わたしは施設から直接来たから、ニヤッコはまだ岸辺ん家だけだ。わたしが迎えに行こうか？」

「いや、いい。岸辺隊長に話もある。俺が行く」

「そ？まあ、今日は遅いし明日にしなよ〜」

「うう、はやくニヤッコに会いたい」

「今晚だけ我慢だねえ」

アマネはいじけるパワーの頭を撫でる。

以前はあんなに威嚇していたのに、今となつてはすっかり懐いてしまった。

思えば、アマネも出会つた当初より随分丸くなつたというか…

人間らしくなつてきたように見えるな。

ただ、記憶の中のアマネとも違う。また別の誰かへと、変化しているような。

前を歩く三人を、数歩後ろから眺める。

その姿は、楽しそうで、平和で、穏やかで。

ずっとこんな時間が続いてほしい。

こいつらには、幸せに生きてほしい。

俺は後日、先生に『銃の悪魔討伐遠征に、4課は不参加にしてほしい』という意向を示した。

先生は「驚いた」と言いつつも、快諾してくれた。

これでいい。

これでよかつたんだ。

俺は今まで、復讐に心を支配され続けて、ここまで来た。それが間違いだったとは思わないが。

それでも、それ以上に大事なものができてしまった。

怖気付いてしまった。

壊したくないと思つた。

俺が死んだ後も、この平和な時間を壊したくない。

「なくに、ぼうつとしてるの?」

視界に広がっていた自宅の天井に、アマネが入り込む。

休日の昼下がり、リビングに寝転びながら思い耽っていたところだった。

「いや……」

「眉間に皺がよつてたよお。また難しいこと考えてたでしょ」

ふわ、と柔軟剤の香りが鼻を掠める。

時々俺の家に入り浸るようになったアマネは、最近何故か洗濯が”マイブーム”らしく、溜まった三人分の洗濯をすすんでやり出す。

施設でもアマネのように社会性の備わっている悪魔や魔人は、自分の世話は自分でするらしい。

干したり畳んだり、アイロンをかけたたり、シャツに糊付けしたりする一連の流れが好きらしいのだが、家事がそこまで苦痛にならない俺でもよく分からない。

そういった人間生活の営みが、悪魔たちにとっては珍しく面白いものなのだろうか。

今日はデンジとパワーはいない。

二人がいない日にアマネが来るのは、初めてじゃないだろうか。

二人きりになる機会は度々あったが、今となっては不快な感情はなく、寧ろ妙に落ち着いた空気が流れている。

アマネがベランダを開けると、爽やかな風が頬を撫でる。

髪を後ろに一つに括った彼女の髪が、光を受けてキラキラと輝いた。

綺麗だな、と思った。

公安制服を着ていないアマネは、いつもより大人びて見えた。

「俺、あと2年も生きられないんだ」

言うつもりなんてなかった。

けれど、その後ろ姿を見ると、どうしようもなく切なくなつて、

気づいたら口から発せられていた。

同情してほしかったのか。困らせたかったのか。

俺は、自分の死に方になんて興味がなかった筈だった。宿敵を殺すことができさえすれば。

でも今は、困った。

死にたくない。

昔、アマネと共に川に落ちたときの、水中での抗いような恐怖感を思い出した。

俺は、死にたくなかった。生きたかった。

家族を失ったときに、雪が降り頻る故郷のあの場所に、置いてきてしまった。すつぽりと抜け落ちてしまった感情だ。

あれからずっと、自分の命を軽んじていた。

今のアマネは、どんな顔をするんだろう。

今だったら、俺の命を慈しんでくれるのだろうか。

そんな事をわざわざ試さなくとも、分かっているのに。

アマネは振り返るでも、何かを言ってくることもなかった。

揺れるレースのカーテン越しに、震える肩が見える。

小さくしゃくり上げる声が、聞こえた。

俺の中には、罪悪感。

それを上回る、俺のすつぽりの抜けた部分が満たされるような、充足感があった。

風が強く吹き、カーテンが捲れる。

アマネの丸い曲線を描く頬に伝う涙が、光を受けキラキラと輝いている。

それがとても美しく、悲しい色をして見えた。

過去を偲ぶ

「アキくん、覚えてるよね」

アマネが俺の前に立ち塞ぐ。

俺は何を言ってるのか分からず、首を傾げる。

「デートだよ……こないだわたし、ゲームで勝ったでしょお」

俺は数秒、思考を巡らせる。

ああ、そういうえば以前家に来た時に、デンジとパワーとなんかやっていたな。

「泥酔してた割によく覚えてるな……」

そもそも俺は関係ないんだが……。

「まあ……いいよ。行くところはお前が決めるよ」

アマネは驚いたように目を丸くする。

その後、心底嬉しそうに、顔を綻ばせた。

俺の事なんかで、一喜一憂しているアマネを見ると、罪悪感と、その中に隠しきれない喜びの感情が渦巻く。

「うあああ〜!!ここが!あの若者の街!!」

アマネは目の前の光景に目を輝かせる。

場所は原宿。小さい駅に見合わない夥しい数の人の中を通り抜け着いたのが、これまた夥しい数の人でごった返す”竹下通り”という場所だ。

東京に来てもう長いが、観光地などに赴いたことはない。

巡回でたまに訪れるくらいだ。

「すごい人だね!札幌でもこんなに沢山人がいるの見たことないよ?!」

「北海道と一緒にすんなよ……」

既に人酔いしかけてぐったりしている俺の手を、冷んやりした手で握られる。

アマネは人だかりも奇抜な格好の若者たちにも恐る事もなく、人の間を縫うようにずんずんと歩いていく。

「すごいねえ。」タケノコゾク”とかテレビで見たことあるけど、もういないのかな？やっぱ制服着てる子はほとんどルーズソックスなんだねえ、かわいく」

わたしもあんな感じの方がいいかな？と聞かれたが、それこそ学生のような格好に見えるなど想像し、かぶりを振った。

「アキくん！あれ!!」

唐突に、アマネが一層興奮した様子で指をさす。

「プリクラ！雑誌で見た時から気になってたの!!」

俺は顔を顰める。

ビビットピンクに彩られた、アーケードゲームに似たような形の機械。

俺も何かで見たことある、プリント倶楽部とかいうやつだ。

その周囲には、学生服を着た女子たちがわらわらという。

その中に20代男の俺が入るのは、いかなものだろうか。

うん、嫌だ。

「今日絶対やりたかった事なんだよねえ、寧ろこれがメインと言っても過言じゃないくらい楽しみにしてたんだよねえ、わたし……」

「…俺はいい、ここで待ってるから一人で行ってこい」

「はあく?!一人でプリクラ撮ってどうすんの？いいからやろう！実際にやってみたら絶対楽しいって……!」

そういえば繋いだままだった、手を強く引かれる。

「ぜっつっつ………たいに嫌だ………!」

アマネの馬鹿力に必死で抵抗する。

そうやって押し問答をしている間にも、行き交う人に見られて恥ずかしい。

「そつか…そんなに嫌なんだ……………」

アマネの手の力が緩むんだ。

かと思えば、急に瞳に涙を浮かべ出し、ぎよつとする。

「じゃあ仕方ないね……………残念だけど、諦めるよ……………」

アマネが踵を返す。

その背中が小さく丸まっていて、心もとない。

俺は舌打ちをし、アマネの肩を掴んだ。

「キャハハ!!アキくんもデンジに負けず劣らずちよろいよね〜」

「クソツ、嘘泣きだったか……………」

結局、根負けしてしまった。

並んでいる間も、どれだけ周りの視線が痛かった事か。

プリントアウトされるのを待っているこの時間も、かなりの苦痛だ。

「あ、出てきた。ふふ、アキくん全然笑ってない」

漸く出てきた写真を覗き込む。

ファンシーな柄の枠の中、歯を見せ満面の笑みでピースするアマネの横で、俺は引き攣った顔をしていた。

「これをね、ハサミで半分こにするんだよ」

「いい、いらない。全部やる」

「え〜記念にとっておいてよお」

「遠慮しておく」

居心地が悪く、逃げる様にその場を去る。

「まあいいや。わたしがありがたく全部頂戴しま〜す」

駆け足で横に並んでくるアマネ。

歩いている最中も、それを見てにやにやとしている。

「ふふ、ほんとに嬉しい。…わたし今日のこと、一生忘れない」

歯を見せて朗らかに笑うその表情、その言葉。

それが、過去のアマネと重なる。

「……お前、それわざとやってんのか？」

「え？なにが」

俺の質問にその顔をきよとんとさせる。

何も企んでなさそうな、無垢な表情をしていた。

「いや、なんでもない……」

「4課は、銃の悪魔討伐遠征に、不参加にさせてもらうことにした」
「……………え」

途中休憩する為に入った喫茶店の中で、俺はそう告げた。

パフェを食べていたアマネの手から、スプーンが滑り落ちる。

カラン、と固い音が響いた。

「なんで。だって、アキくん。あんなに銃の悪魔を恨んでたのに。自分の手で殺したいって……」

「お客さま、よろしければ新しいスプーンをー……」

スプーンが床に落ちたことに気づいた店員が割って入った事により、アマネの声が遮られる。

その間、アマネは思考を巡らせるように目を右往左往させていたが、

「いや、…よかったあ！だって、銃の悪魔って強いんでしょ?!またアキくんが怪我しちやったり、……最悪死んじゃうかもしれない。そうしてくれるなら、わたしも嬉しい限りだよ。てかわたしもぶっちゃけ参加したくなかったしね！」

そう言って曖昧に笑った。

思いの外、時間はあつという間に過ぎていった。

家にはデンジとパワーが待っている。

晩飯を作らなければ、そろそろ帰ろうか。とぼんやり考えていた。

アマネも最初の方こそ元気だったが、やはり人混みに目を回しはじめ、俺たちは自然と人混みを避けて進んでいた。

賑やかな通りとは一変してアパートやマンションなども立ち並ぶような静かな道につく。

橋があった。コンクリート護岸に囲われた橋下には、水嵩のないドブ水がゆつくりと音を立てずに流れている。

確か渋谷川だったか。

同じ川でも故郷のものとは全然違うな、と記憶をたぐらせた。

「お前、前に」アマネを記憶の中で美化している”って、俺に言ったよな」

記憶をたぐれば、そんな事を思い出して、口に出した。

「確かにそうだったな。言われてから思い出したよ。自分勝手に我儘で、すぐキレるし、情緒不安定だし……滅茶苦茶な女だった」

「わくすごい言われ様だあ」

アマネが苦笑いを浮かべる。

「でも、それ以上に綺麗な奴だった。綺麗で……繊細で、ずっと辛そうだった。……茅森は逃げた俺のこと恨んでるかもしれない。それでも、俺は茅森と会えてよかったって思ってる」

アマネのへらへらとした表情が、形をひそめる。

「アキくんは今……わたしが、茅森アマネに見える？それとも誘惑の悪魔に見える？」

真剣に、どこか不安気な視線が突き刺さる。

アマネの中で、茅森アマネは生きている。

きつとそうだと思った。真似ているだけではない、背筋が凍るような冷たい表情や横暴さ、そしてよく笑うところは、”茅森”だった。けれど、どこか違う。何か違う。

話し方も、笑い方も、怒るときも、泣く姿も。

茅森が成長したからなのか、誘惑の悪魔が変化していったのかは分からない。

「お前は……」アマネ”でしかないよ」

それが俺が出せる答えだった。
相手が魔人でもなんでもいい。

俺はデンジやパワーのように、いつの間にか、目の前の彼女が大切な存在へとなっていた。

俺の言葉に、アマネは哀しそうな、嬉しそうな。どちらともとれない表情をして、微笑んだ。

橙色の夕陽に焼かれて溶けていってしまいそうな、儂さだった。

「わたしが……公安で、わたしがアキくと会ったときに言ったこと、覚えてる?’’アマネが早川くんのこと、どう思っていたのか知りたくない?’’って」

久しぶりに彼女の口から出た”早川くん”という呼ばれ方には不快感はなく、しかし妙な緊張感が走った。

「君の事、恨んでなんかないよ。寧ろ、アキくんに感謝してる。君はわたしが生きる目的そのものだったから」

アマネが真っ直ぐに俺の目を見据える。

水を抱えた榛色の瞳が蜂蜜色の光を捉え、キラキラと輝いている。

アマネは絶えず微笑んでいた。

その優しい表情は、全てを赦してくれるような、とても”悪魔”がする表情には見えなかった。

「わたしは君に会いに、ここまで来たんだよ。大好きな早川くんに会いにね」

————— 過去を偲ぶ 前編 完 —————

後編 プロローグ

銃の悪魔の被害は甚大だった。

ほんの一瞬の出来事だ。

教科書で見た、大地震に遭った土地の白黒写真を思い出した。

銃の悪魔が通過した場所だけが、綺麗に一筋、人間が積み上げた営みを、すべてふりだしに戻してしまった。

その中、わたしは生き残った。

家に居たくなって、雪の中、寒さに凍えそうになりながらもいつもの公園にいたら、すぐ近くでお祭り太鼓をずっと大きくしたような轟音が響いて、後ろを振り返れば元あつた景色は既に消え失せてた。

わたしの家はなくなっていた。そして、両親は死んだ。

神様はいるんだと思った。

いや、銃の悪魔様だ！

わたしは、親に飼ひ殺されるか、悪魔に殺されるか。最低の二択を強いられた人生だとばかり思っていた。

それが突如として、苦しい思いをして、走って遠くに逃げる必要もなく、わたしは呆気なく解放された。

はやくアキくんと言いたい。

はやくアキくん、会いたい。

アキくんとはもう会わないつもりでいた。

わたしはどうしようもなく苦しくて、寂しくて、何の罪もない普通

で優しい彼を巻き込もうとした。

けどわたし、こんな晴れやかな気持ちでいるの、生まれて初めてだ。今からなら、きつとまともな人間になれる。

アキくんとも、もつと普通で、平凡で、優しい時間を共有できる。そんな気がする。

民家の瓦礫、薙ぎ倒された木々、倒れている人、泣き叫ぶひと、人間の身体の一部。血。

それらの間を縫うように走り抜けるわたしの姿は、そんな状況では異常としか言い様がないほど、軽やかな足取りだった。

しかし、息もたえだえに辿り着いたそこには、アキくんの家は、なかった。

その後、わたしは一度もアキくんに会うことは叶わなかった。

わたしは札幌にいる祖父母の家に住むことになった。

古い平家で無駄に物が多く、常に線香のようなにおいが漂う家だったが、掃除が行き届いており、あの家に比べたら幾分も綺麗だった。食事も朝夕ちゃんとする。

虐待もされなかった。寧ろ可愛がられ、大切に育てられたと思う。

多分、これが普通の幸せなんだな、とわたしは夢も見ずに深い眠りから目が覚めた朝、そう思った。

中学に入れば、無愛想なわたしでも女の子から話しかけられる機会が増え、加えて何人もの男の子から告白された。

そのあたりから、自分の容姿に価値があることに気がついた。試しに付き合ってみたり、キスしたりセックスしてみたりした。

しかし、気持ち良くもなければ気持ち悪くもない。数人とそれをやった後、わたしはこの行為に何も感じ取る事ができないんだな、と

気づいた。

それが分かってからは、自分の身体を使ってお金を稼いだ。

祖父母はわたしの治療にお金をかけてくれた。

裕福な訳ではなかったと思う。

それでも、きつと年金を使ったり貯金を切り崩して、わたしの治療費に充てていた。

生活環境も前より良くなって、更には合う治療法も見つかって、中学を卒業する頃には健常者と変わらないぐらいの身体へと変わった。

ただなんとなく、無償で手に入れたそれらが怖くて。

はやくお金を貯めて祖父母にしっかりと全額返そう。そう思って、身体を売り続けた。

暴力も振るわれない、息も苦しくない。

学校の人も、祖父母も、みんな優しくしてくれる。

それなのに、ずっと頭から離れない。満たされない。

あの時のわたしは今よりずっと不幸で、思い出したくもないのに、それは頭の片隅にあって。

その中にいる、胸の奥がじわりと熱を帯びる記憶。

忘れかけても、こびりついて離れない。

ちよつとぶつきらぼうで、でもすぐに顔に出ちゃう。

普通で、優しくて、ちよつぱり寂しがり屋な男の子。

わたしの綺麗で、キラキラした、美しい思い出の中の男の子。

アキくん。わたし、やっぱりアキくんに会いたい。

わたし、アキくんに、生きていてもいいかもしれないって思えたこと、伝えたい。

そう思った矢先だった。

放課後、札幌駅。

帰ろうと、駅の改札に向かっていった。

人の多い時間だった。

人混みに紛れて、近づいてきた影。

身体全体に、ドスン、という衝撃。

初めて味わう感覚だから、すぐには分からなかった。

ただ、腹部に違和感を感じて、そこを見ると、

刺さっている包丁。

それを視認すれば、じわじわと広がっていく

痛み。制服の白いブラウスに滲み出す血。

人を掻き分け走り去っていく男。

わたしが地に倒れ込むと、周りから悲鳴が聞こえてくる。

わたしに声をかけてくれる人の声も聞こえた。

しかし、それもどんどん遠くなつて。

視界が、暗闇に覆われた。

「君、綺麗な顔してるねえ」

やがて、何も聞こえなくなつたと思つたら、耳のすぐ側で、はつきりと声がした。

目を開く。

少しくすんだ白い天井。身体が動かない。

動揺しているわたしをよそに、続ける。

「あゝ君、刺されたんだよお。なんか恨み買って男に刺されたみたいじゃない？やるねえ」

恨み……？

買った覚えはないが、振った男の誰かか、それともわたしを金で買った男の内の一人か。

今はそんなことはどうでもいい。

わたしに話しかけているのは誰なのか。

唯一動く目だけ忙しく動かすと、それはいた。

部屋の角。カーテンの隙間から僅かに差す月明かりすら吸収してしまうほどの、黒。おぞましい空気に包まれた、異形の何か。

「悪魔………？」

「そ、正解〜」

悪魔が、暗く深い、穴のようなものの奥底から、その姿に似合わない明るい声を発する。

不思議と、恐怖心は湧かなかった。

「……、どこ………？わたし、死んでる………？」

「うん、そうね〜。ま、正しくは脳死状態だから、身体は生きてるみたいだけどお。因みにここは病院〜」

「………そう〜」

わたし、死んだんだ。

生きようとした気力が湧いてきた途端に、死んじやったんだ。

「やっぱ神様って、いなかっただんな………」

「いないだろうねえ、わたしもそう思うよ！ま、”神の悪魔”ならいそうなのもするけど。考えただけでも恐ろしい〜」

悪魔の影が、くねくねと蜻蛉の様に揺れながら、部屋の角からわたしの眼前まで迫る。

「と、無駄話はそのそこに……。わたし、誘惑の悪魔っていうんだけど。君のこと、一目見た時からすつごく気に入っちゃって。肌も白くて髪の色も、瞳も綺麗な色」

悪魔の身体のようなところからぎよろりした目が出現し、わたしの顔を角度を変えながら、舐め回すように見てくる。

「なにより……その顔、とっても魅力的〜！超カワイイ!!わたし、かなり人間の容姿にシビアだけど、君ほど綺麗な子なんて見たことないよお」

「そりやどうも……」

「それで、提案なんだけど……」

君はもう脳死状態。今はわたしの力で意識があるだけ。君は、もうすぐ本当の意味で死ぬ事になる。

それって、すつごく勿体ないことじゃあない？こんなに美しい肉体が死んで腐っていくだけなんてえ」

「結論から話してもらってもいいかな、案外この状態キツいんだ」

わたしは鼻と目の先まで迫ってきた、誘惑の悪魔の瞳を見据える。

「ふくん、いいねえ。強気な人間の女って、可愛くてえ、可哀想でえ、わたし大好きなの。いいね、中身も気に入った!……と、また話が長くなつちや怒られちゃうねえ」

悪魔の瞳が、不敵に歪む。

「わたし、君の身体が欲しいんだけどお。あく、勿論拒否権はないよ。だって、君はもう死ぬだけなんだからあ!」

「そっか……でも、脳死って死んだうちに入るのかな。身体は生きてる訳だよ。というか、身体を乗っ取るつもりなら、態々こんなやり取りしなくてもいいはず」

わたしの言葉に、目前にいた悪魔が、するりと離れた。

そこで漸く、自分の身体が緊張で強張っていたことに気づいた。

「わたしに拒否権、あるみたいね?」

「……可愛くないところもあるんだね〜。まあいいや、そういう生意気なところも含めて気に入ったよ〜」

そう。君に拒否権はあるし、わたしが君の身体を貰うのにも、条件がある。それは”契約”だ」

「契約……?」

「うん。君が契約を提示する。その契約と引き換えに、君は身体を差し出す。そしてその契約は、絶対に守らないといけない」

「ふうん。いいね、それ」

そんな上手い話があるものなのか。
やっぱり神様は、いたのかもしれない。

「その話、乗った」

「そうこなくつちやあ！んで、契約はどうする？あんまハードじゃない奴だと嬉しいんだけどお」

「早川くんに会いたい」

「……………え？」

目を爛々に光らせて、誘惑の悪魔に告げる。

「早川アキくんに会いたいの！わたしが小さいときから好きな男の子なんだけど」

「え〜誰……。てか、そんなことでいいのお？ま、楽な要求に越したことはないからいいけど〜」

少し呆れた様子の悪魔だったが、さして悩んだ様子もなく、頷いた。「分かった！わたし、君の事結構気に入ったから、その早川アキ？くとやらの会うまで自我を残しといてあげる。」

勿論、君の身体はわたしの物になるから、わたしが主体で動く。悪魔だから、血や人の肉体だって食らうよ。それでもいいのお？」

悪魔が怪しく笑うが、希望に満ちたわたしにはそんな脅しは通用しない。

カーテンの隙間から漏れる月明かりが、気づかない内に朝陽へと変わっていたようで、異空間のようだった病室に現実味を帯びさせる。

それに伴って、悪魔の輪郭も心なしがぼやけて見えた。

「うん、いいよ。わたしがわたしでいれるなら、それでいい」

「言っとくけどわたしは悪魔。君が正気を保てる保証はないからねえ？」

「大丈夫。負ける気しないから」

わたしは目の前の異形の化物を、強く見据える。

すると、たじろいだように悪魔の影が揺れた。

「うわあ、なにこの人間、超強い……。ここまでくるとちよつと怖

いんですけどお……」

「勿論！だって、わたしはまだ生きられるし、アキくんにも会える……それって、すつごく幸せ。それだけで、気力が湧いてくる」

そうだ、わたしはまだ生きることが許されたんだ。

アキくんと会うことができるんだ。

高校生になった彼はどんな男の子になっているんだろう。

きつと、わたしに会ったら目を丸くして驚いて、そして少しはにかんで、それでも再会に喜びの感情を溢してくれんだろう。

わたしはそう信じて疑わなかった。

一度生死を彷徨ったからだろうか、わたしが元々独りよがりの思考の持ち主だからだろうか。

まるで言葉を覚えたての幼子のような、無責任で純粋な妄想だけが、わたしの脳内を胃もたれしそうな甘さで満たしていた。

最悪の始まり

「そもそも、”アキくん”って生きてるの？銃の悪魔に殺されたんじゃないの？」

「ううん、早川くんは死んでないよ。当時の死亡者・行方不明者リストを調べたけど、早川くん以外の家族の名前はあつたけど、彼の名前はなかった」

「ふうん。ま、それでも悪魔が蔓延るこの時代で、ちゃんと生きてるかどうかは怪しいところだけどね」

「生きてるよ、絶対」

アマネと契約した直後に交わした会話だ。

彼女の信じて疑うことのない、輪郭のはつきりとした声をよく覚えてる。

わたしがアマネの身体を貰ってから数年が経過していた。

魔人の特徴が容姿に出ているアマネは、もう故郷で暮らすことは叶わない。

わたしは身を隠しながら、アマネの目的である”早川アキくん”を捜すのに奔走していた。

そんな最中だった。

「君が搜索願を出されてる茅森アマネ……いや、誘惑の魔人だね。探すのに手間取ったよ。一般人に扮してよくここまで逃げられたね。頭部の特徴が少ないからかな……？」

「……誰、あんた」

突如現れた黒いスーツに身を包んだ人間たち。

それらは悪魔を使役し、わたしを組み伏せた。

その人間たちの中心から現れ、わたしに話しかけてきたのは、芯地

のしつかりした古めかしい形のチェスターロングコートがあまり似合わない、華奢な身体つきの赤髪の女。

ただし、周りののがたいの良い男よりも妙な気迫がある、妖しい瞳を持つ女だった。

「私はマキマ。公安のデビルハンター。今日は君に、ある提案をしにきたのだけれど」

「嫌だね。わたしは忙しいの！」

女の言葉を遮り、わたしを押しさえつけている悪魔を薙ぎ倒す。

転倒した悪魔の頭部を踵で思い切り踏み潰せば、血を噴き出し動かなくなった。

最悪だ。服を替えたばかりなのに、もう汚れた。

黒スーツの人間たちが動揺の色を見せつつも、また新たな悪魔を出現させ、襲い掛からせる。

次から次へと、面倒くさい。

悪魔の一部を千切り、使役していると思しき奴に投げると、呆気なくその身体が吹き飛び、頭を強打し動かなくなった。

それと同時に悪魔も消滅する。

それを見ても、尚果敢に飛びかかってくる悪魔たちを殴り蹴り、腑を引きずり出し、服が取り返しつかない程血で塗れたところで、何かに脚を掴まれ再び地面に転倒した。

脚を蹴り上げるが、”それ”には当たらない。

足元に目をやるが、確かに何かに掴まれている筈なのに、それを視認することができない。

「幽霊の悪魔だよ。君からは見えないし触れることもできないから、大人しくしててね」

女：、マキマはわたしの前に屈む。

端正な顔立ちだ。

ただ、わたしが好む”美しき”とは違う。

お上品に微笑んだ顔に似合わない、不気味な三重丸の瞳の奥に、おどろおどろしい、異様な気配を感じる。

警戒心に身体を強ばらせた直後。

「命令です。わたしに従うと言いなさい」

わたしにしか聞き取れないくらいの声だった。

マキマの目が怪しく光った。

瞬間、視界がぐにやりと揺れ、思考が妨げられる。

「……嫌だつて言ってるでしょ。しつこいんだけど」

口を無理やり開き、どうにか吐き捨てるが、言い終えた後の呼吸が荒い。

なんだ？今の。

身体に緊張が走った。脳みそが揺れるような余韻が残っている。

自然と身体が小刻みに震えた。

この女、想像以上にヤバいかもしれない。

そんなわたしを他所に、マキマは少し驚いたように目を丸くした後、またすぐに貼りついたような笑みに戻した。

「なるほど……。そういえば君、ちよつと変わったにおいをしているね」

「変わったにおい？わたしからしたら、あんたの目のほうがよっぽど珍妙だよ」

あまり目を合わせたくないが、気丈にマキマを睨む。

「てかわたし、あんたに構ってる暇ないんだよね。今人捜して忙しいの！これが終わったら」この子の身体を貰える”契約をしてるんだからあ!!どっか行った！シツシツ」

そう、わたしは早川アキを視認した瞬間、”アマネの身体を完全に自分の物”にすることが叶う。

アマネの自我は消え、わたしは晴れて美しい人間の肉体を得た、理想の誘惑の悪魔へと進化を遂げる。

「ちよつと、話が違う気がするんだけど」

わたしの思考を読み取ったのか、アマネがわたしの頭の中で焦りを見せる。

いや、違くない。

わたしは”早川アキに会うまで自我を残す”と言ったんだ。

それで契約は締結された。

アマネが泣こうが喚こうが、覆ることはない。

残念だったね、可哀想に。

まあ、再開の数十秒くらいまでは、アマネの自我を残してあげようかな。

わたしは美しいモノには優しいからね。

「そっか。今日持ってきた物は無駄にならなそうだね」

わたしが頭の中でアマネとの会話を繰り返し広げている間にマキマは立ち上がり、懐から何かを取り出すと、わたしの頭上にばらまいた。

それはひらひらと宙を彷徨い、次々と地面に落ちる。

写真だった。

それに写る、黒髪を一つに束ねた青年。随分と顔の整った男だ。

その横には、同じ男の別の写真が複数枚。そして、その中の一枚に写っていた、10代前半くらいの、帽子を目深に被りマフラーを巻いた、ショートカットの少年。

わたしの心臓が、ドクリと高鳴る。

わたしの意思ではない。

アマネによつて、鼓動が速くなっていくのを感じる。
なるほど、そういうことかと、写真の青年に再度目をやる。

アマネ。君が探してる、早川アキくん。
随分と厄介な奴に飼われてるみたいだよ……。

「やっぱり、ビンゴだったみたいだね。それで、どうする？君は私たちに着いてきてくれる？」

わたしの表情を見たマキマは、再度わたしに問いかけてくる。

「……別にアンタにわたしをどうこうできる力はない訳でしょ？ヒトに物を頼むときの態度がなってないかなあ？！」

「聞かないなら、君はこのまま殺されるだけだ。勿論、この写真の子ども」

マキマの目は笑っていなかった。

折角手に入れた美しい人間の身体なのに、それがこんなところで殺されるなんて、たまったもんじやない。

だが、わたしは誰かの下に付くのも耐え難い。

わたしは悪魔を誘惑し使役する、美しくて気高い存在なんだ！

しかしこの場から、いや、この女から逃げられる可能性は絶望的。
万が一成功したところで、早川アキを殺されたら、契約が破綻してしまふ。

下唇を噛み押し黙っていると、やがてマキマが溜息を吐く。

「言ったでしょう、最初に提案があると。」

私たちは、君にデビルハンターとして力を貸してほしいから、ここに来た。本当のところ、君を殺したくなんかないんだよ。……それか、なにか条件があるのなら聞くけど」

”契約”とは言わないのか。

こいつが人間じゃないからか？読めない。

本当に面倒なことになった。

舌を打つ。

「早川アキに手を出すな。……これが条件。呑んでくれるなら、わたしはあんたに着いていく」

「……いいでしょう。君が”耐え続ける”ことができる、その時まで」
拘束が緩み、マキマがこちらに手を差し出す。
わたしはその手を払い退け、彼女を一瞥した。

耐え続ける、か。先程の、この女の能力に。

わたしは早川アキにさえ会うことができればいいんだが。

その後、わたしは解放されることができのかが目先の問題だ。

それ以前に、この女がどれだけ信用できるのか……いや、期待はできない。

食えない奴なだけならまだ可愛いものだ。

ちよつと気を抜けば、こちらがとって食われてしまいそうだ。

それなのに、アマネの心臓は、期待に高鳴っている。

能天気すぎるよお、前途多難なのにさ。

しかも君、もうすぐ死ぬんだよ？

「大丈夫、わたし負けないから」

彼女は出会ったときと同じ、強気な態度でそう言う。

この子は、悪魔と交わす契約の重さを理解してないようだ。

ま、君のその凶太さは、悪魔として見習わないといけないかもしれないけどね。

共有

終わった、漸く終わった………！

漸く、本当の意味でこの肉体が手に入る。

と、思っていたのに。

「やっぱ、早川くんはわたしのこと覚えていてくれた……！思った通りの顔をしてくれた」

アマネの鼻声が頭の中で響く。

それに伴い、自分の意思とは関係なく鼻の奥がツンとして鬱陶しい。

身体もアマネの感情に左右されるなんて、おかしい。

早川アキと顔を突き合わせて数分経過。”何も変化がない”。

”早川くんに会った”契約を果たした筈なのに、アマネの自我が頭から消えない。

「言ったとおりでしょ。わたし、負けないって、分かってたもん」

アマネが得意気に言うが、負けないとかそういう問題じゃないだろう。

悪魔と人間の契約は、絶対だ。

いや、わたしたちの契約に対する認識の齟齬が生んだ結果なのか。

数秒、首を傾げ考え込んだが、まあいいかと再び歩き始める。

この子と過ごした時間は思ったより長くなった。

アマネは、人の血肉を口にしても動じない胆力がある癖に、わたしにとつたらどうでもよい事で、急にどん底まで落ちたように不安定になることがある。

突然泣き出したり、自分の腿を殴り出したり肌に爪を立てたりして、癩癩を起こすのだ。

わたしの痛覚は鈍くはあるが、自傷行為が気にならないという訳ではない。

それでもその時のアマネの感情は、わたしにとっては体感したことのない新鮮なもので、なんだか面白くて、その時だけはアマネの赴くままに身を任せていた。

それがこれからも味わうことができるのは、そこまで悪いことじゃない、そんな気がする。

それに、この子もたかが人間。表に出てくる力は持ってないし、ちよつと頭ん中が煩いだけで、この身体はわたしの物のようなものだ。

何より、早川アキとの再会で、アマネの心情が今までにないくらい大きく揺れ動いた。

早川アキも、アマネの記憶の中では、随分この子に肩入れしてたみたいだったし、加えてあの男、割合顔が良い。

どうせならこの子の身体を使って、揶揄って遊んでやろう。

そう考えると、これから愉しくなっていく予感がしてならない。

デビルハンターとして使役される生活は些か不満だが、それを上回る、胸躍らせる予感だ。

と、思っていたが。

「なんかアキくん、全然アマネに靡かないね……?」

「君が最初にふざけたことするからでしょ」

アマネがあまり覇気のない声ながら、ぴしやりと言う。

まあ、それはそうか。と納得する。

ただ、アマネの記憶の中の”アキくん”とは、随分雰囲気が違うよ
うだが。

見た目が成長したから、とはまた違う。

活気に満ちていた目は据わり、ころころと変化していた表情は、大
体は眉間に皺を寄せ、気難しそうに口を結んでいる。

それよりも気になるのは……………

考えている間に、執務室の前に辿り着く。

はあ、と一つ溜息を吐いた後、ドアノブを回す。

「ちゃんとノックしてから入らないと駄目だよ、アマネちゃん」

ドアを開けた先には、書類を広げたままのご立派なデスクに頬杖を
ついたマキマが、こちらに顔を向けて微笑んでいた。

既にデスクの上に置かれたペン。

ノックをしようがしまいが、わたしに気付いてる癖に、誰がそんな
ものするか。

「仕事のほうはどうか。上手くやれてる？」

「報告書を見れば分かるでしょ。そんなことより」

報告書をデスクに叩きつけるように置いてから、睨みつける。

「あんた、既に早川アキに手をだしてたね」

そう、アキさんと数日一緒に行動して、気づいてしまった。

彼がマキマと対面したときにに向けられる熱視線……………

マキマは、微笑んだまま首を傾げる。

「君は、早川君が殺されなければ、それでいいんじゃないの？」

「わたしの”条件”をそんなに軽く見られているっていうのが、むか
つくんだよねえ」

「ふふ、早川君が私に惚れていて、何でわたしには見向きもしないのっ
ていう、所謂、嫉妬…なのかな？」

「はあ〜っ！」

かっど頭に血が昇る。対して、マキマは「かわいいところがあるね」

と小馬鹿にしたように笑う。

「でも、随分な自信だね。早川君が君のこと…いや、茅森アマネさんを好いていたのは、十年以上も前の話でしょう？大人になった今、別の人を好きになっていても何もおかしくない」

「…でも、アマネはアキくんにとって特別な女だ、絶対に」

アマネとの再会に、アキくんが強く動揺したのは確かだ。

茅森、とわたし名前を呼んだときの、急に幼い子供に戻ったような表情が忘れられない。

「子供の脳はね、嫌な記憶を扉の向こうに隠しておく事ができちゃうんだよ」

「はっ？」

突然何の話を始めだすんだと訝しむが、構わず、マキマはわたしの背中越しの、執務室のドアを見つめながら続ける。

「早川君のご家族が銃の悪魔に殺されていることは、知っているよね？」

その言葉で、思い返されるアマネの記憶。

瓦礫の山と化していた、アキくんの家。

死亡者・行方不明者リストに載っていた、早川姓の三人の名前。

わたしもアマネも、”どうでもよく”思っていたことだった。

「さぞかしショックだったろうね。でも、早川君がデビルハンターとして今日まで生きてこられているのは、そのときの恨みが原動力になっているんだよ」

ドアに向けられていた円模様の瞳が、こちらに向きなおる。

「その前の幸せな記憶は、今の早川君にとっては覚悟を揺らす…、ドアの向こう側に閉じ込めておきたいような、邪魔な記憶なんじゃないかな」

人気の少ない階段を登り、その先にあるドアへ向かう。

ドアノブを捻りながら押すと、ドアが軋んだ音を立て開き、雨ざらしにされてところどころ塗装が剥げたままにされている屋上へと辿り着く。

室内にいて気づかなかった。先程まで雨が降っていたのか。湿った空気が身体に纏わりつく。

容赦なく迫害の視線を向けてくる人間が巢食うこの施設は、ひどく居心地が悪い。

馬鹿みたいに広いこの建物は、いくつかこういった、外の空気が吸える場所がある。

幸いここは奥まった場所にある為か、あまり人が寄り付かないので、わたしの休息スポットとして利用していた。

ひんやりとしている錆びた鉄柵に寄りかかりながら、目の前に広がる景色に目をやる。

日が傾きかけ、街明かりがちらちらと点り始める。

北海道から、随分遠くまで連れてこられたものだ。

車のヘッドライトに目を凝らしていると、屋上においても、排気ガスの鼻につんとくるにおいが鼻を掠めた気がした。ああ、やだやだ。唯一落ち着ける場所なのに。

「……早川くんは、今はもう、あの女の人のことが好きなのかな」

アマネが低い声で、溢す。

それは、悪魔のわたしでも背筋が凍るような冷たさを孕んでいた。

ヘドロのような物が腹の中心に渦巻くような感覚がする。

まあそうだろうね。マキマの言う通り、これだけ何年も会っていないければ、他に好きな女が出来ていても当然だろう。

と、普段なら揶揄ってやりたいところだが、どうにもこの気持ちの悪い感情に引き摺りこまれそうで、柄にもなくフォローをいれる。

「いや、多分違うねえ。アキくんはマキマのことを恋愛対象としては

見ていない。あの子がマキマに意識が大きく傾くのは、あの女と対面しているときだけだ」

「……なんでそんなことが分かるの」

不信任感を隠さないアマネに、得意気に鼻を鳴らす。

「悪魔っていうのは、一様に鼻が利くんだよ。わたしのようない悪魔は殊更ねえ。」

それに、アキくんだけじゃない。ここに来てから会った奴らは、異様にマキマのことを慕っていたでしょ？きつとこれは、あの女の悪魔の力だ」

嘘は言っていない。”手を出している”というのは、この事を言ったのだ。

アマネは何も答えなかったが、先程の腹の中が渦巻く感覚が徐々に引いていったのを感じ取り、息を吐いた。

十代の少女というのは、たかが色恋事で、ここまで必死になれるものなのだろうか。

たかが人間と思っていたが、身体を共有しているからだろうか。偶に、華奢な身体はどこからそんなエネルギーを溜め込んでいるんだと思う、黒い泥水の波のような感情に呑み込まれそうなきがある。

しかし、わたしとしてもあのマキマの言い分が、どうにも気に入らない。随分と舐められたものだ、と憤りを覚える。

アマネにつられてる訳じゃない。彼女とは別の、早川アキに対する執着がふつつつと沸いてくる。

「まあさ、まだ再会したばかりだし。気長にやろうじゃないの」とりあえず、いつまでも暗い気持ちでいられると、わたしの気分も悪くなってる。

だが、わたしが明るく言い放つものにも関わらず、アマネはまだ臍を曲げているのか無言でいる。

面倒臭い奴だな、と溜息をひとつ吐き、続けた。

「わたしが何者かお忘れ〜？誘惑の悪魔サマだよ。あんな小僧の一人や二人、簡単に落としてみせるさあ」

「そんなの、嫌」

アマネの声が遮る。

「わたしのことを、思い出して、ちゃんと好きでいてくれないや、嫌……。そんなの、早川くんじゃない」

……………面倒くさ。

という悪態は呑み込んでおいた。

雨が作った水溜りに、アマネの顔がうつる。

アマネの感情に呼応して浮かび上がる、打ちひしがれた切ない表情の、なんと美しいことか。

わたしはそれだけで、彼女の身勝手さを赦せてしまうのだ。

敗北

先日は、マキマに「仕事のほうは上手くやれてる？」などと聞かれたが。

無論。街中に現れる大抵の悪魔は、わたしより弱い。

能力で引きつけて、一発攻撃を入れれば、はい終わり。

誰かに指図され動かされるのは気に入らないが、仕事自体は簡単なものだった。

その上、少ないが金も貰えるし、まともな食事も提供される。

住居は、公安の保有する悪魔や魔人が隔離されている施設で、牢屋同然だが、野宿に比べればました。

皮肉にも、以前よりもよっぽどいい生活を送っていた。

「デンジと申しますれば！ヨロシヤス!!」

今日も今日とて、強い言葉でアキくんにあしらわれた後、突然現れた、小汚い印象の少年。

わたしを見て赤面すると、頭を勢いよく下げてお辞儀をした。金髪頭の中心にあるつむじが若々しい。

基本、人間の雄は好かない。美しい容貌の個体が少ないから。

ただ目の前の男は、見た目は兎も角、犬のように素直そうな目をしていた。

従順な奴は好きだ。誘惑しやすい。

それと、デンジからは人間とは違う、変わったにおいがしたのが気になった。

わたしに向けられた、「不思議なおいをしているね」というマキマの言葉を思い出す。

それは、アキくとデンジとわたしの三人で巡回に出た後、現れた悪魔を迎え討つデンジの姿を見て確信した。

デンジがシャツのボタンの間に手を差し込むと、何かを強く引く。

直後、血を噴き出しながら、デンジの両腕から突き出てきた刃が、悪魔の攻撃を弾き返した。

そうしている間にも、首から上が、オレンジ色の機械のような形へと変貌し、口元は大きく、鋭い歯が剥き出しになっていて、額からも腕同様、大きな刃が現れた。

シャツのボタンの間から垂れ下がるのは、恐らくスターターロップ。

「チエンソー………?」

呆気にとられていると、響く轟音。回転する刃。

チエンソーの悪魔だ……!

「おいどうした先輩?!俺に遅れをとるなんて、ほんとにどっかおかしいんじゃないのか?!」

しかし、それが大きな口を開き、アキくんに向けて張り上げる声は、先程のデンジの声そのものだった。

「わたしたちと同じような人ってことなのかな?」
珍しく、アマネがアキくん以外の人間に、良い方の興味を示している。

無論、わたしも興味が湧いた。

「ねえ、アキくん」

「仕事 중이다。無駄話はやめろ」

「デンジってさあ、何者?」

わたしが他人に興味を示したのが珍しいのか、アキくんが少し目を丸くしてこちらを見たが、「さあな」と一言返されただけだった。

「無駄話じゃないよお。わたしも特異4課の一員なんだから、仲間のことを知るのは、大事なことでしょ〜?」

わたしの言葉に、真面目なアキくんは暫し思案するように視線を動かしてから、口を開いた。

「……デンジは悪魔でも魔人でもない。人間だが、悪魔になる事ができる。お前と同じで、辞職や違反行動が許されない。もしそうなれば、悪魔として処分されるような扱いだ」

「ふくん。……それだけ?」

「あとの事は俺も知らない。一緒に生活して、非常識で馬鹿っていうのだけは知ってるが」

一緒に生活している、というのに言及したい気もするが、今は会話の流れの邪魔になるので、呑み込む。

「公安の人たちが言ってたんだけど、デンジが来てからマキマが東京に留まるようになったって本当?」

廊下で偶々聞いた噂話だが、マキマは元々全国をあちこち動き回っていて、ほとんど東京に滞在していることはなかったらしい。

あのマキマが、一人のなんてことない、しかもチンピラのような少年を気にかけているが、不思議だと。

「マキマにとって、デンジは特別ってこと〜?」

アキくんは答えないが、無言は肯定と受け取っていいものか。

マキマに”惚れていることになっている”アキくんにとって、デンジが特別かって聞くのは地雷だったか?

それにしても、ここまでつれない態度をとられると、アマネちゃん泣いちゃうなあ。

しかし、これは吉兆だ。

弱点がないと思われたマキマだが、もしかしたらこの男…デンジが

そうなのかもしれない。

そうと分かれば即行動！

わたしの力で、デンジを誘惑し、わたしの物にする。

場合によっては殺してしまおう。

もし違ったとしても、運良くマキマの弱みを握る事ができれば万々歳だ。

「デンジ、ちよつといい？」

「ハアワ!!!」

公安内[?]の自動販売機の前にいたデンジに声をかけると、以前と同じように、肩を跳ね上がらせて赤面した。

横にはロングヘアの女の子もいた。頭に二本の赤い角が生えている。

以前話だけは聞いたな。この子も4課に配属されている魔人だ。たしか…

「パワーだっけ？はじめまして〜」

「な、なんじゃウヌは！気安く呼び捨てるな、無礼者!!」

敵意剥き出しの、威勢のいい声で返してくるが、身体はデンジを盾にして隠れている。

この子は勘が鋭いのか、直感で悪魔としての力の序列を感じ取れるようだ。

「ごめんねえ、ちよつとデンジのこと、借りてもいいかな？」

「ハア？今デンジはワシと押し相撲をしようとしてたところじゃ。後にせい」

「そつかく。今ね、マキマに呼ばれてるんだけど…、君も一緒に来る？」

マキマの名前を出すと、パワーは顔を青くして、しずしずとデンジを差し出した。

「急になんスかね？マキマさん」

「ごめん、さっきの嘘」

「え？」

人気のない廊下まで来たところで、振り返る。

呆けた顔のデンジ。執務室と全くの逆方向を歩いていたのに、何の疑いも持たなかったようだ。

「デンジは、マキマの事が好きなの？」

「え、……ああ。まあ、スキ………？」

突然の質問に、照れたように頬を掻くデンジ。

「へえ、なんで？」

「なんでって。面が良くて、キレで、優しいから」

「それってさあ、本当かな？」

「へ？」

「本当に、マキマが優しい女だって、思ってる？」

デンジが何も分かっていない、間の抜けた表情で首を傾げる。

わたしは内心痺れを切らし、一気に距離を詰めた。

純粹そうな瞳とわたしの濁った瞳が、かち合う。

「だって、デンジが何か失敗したら、あの女はデンジを殺すつもりだよ」

「エ?!ま、あ……確かに、言われたかも」

「わたしもそう、魔人だからデンジと同じ。一生ここで飼われて、自由のない生活を強いられるの」

ここで、切なげに目を伏せてみる。

「わたしじゃ、ダメかな………？」

「ハ?……へエ?!?!」

「わたしなら、デンジの気持ち、誰よりも分かってあげれるよ。悪魔としての力も強い、この間見たでしょ?わたしとデンジで力を合わせれば、きつと公安から逃げ通すことができる」

デンジの身体に抱きつく。細い身体が、緊張で強張るのが分かつ

た。

「わたし、……デンジのこと、好きになっちゃったみたいなの」
シャツ越しに、デンジの身体に指を這わせる。脂肪のない、ゴツゴツとした感触がする。

デンジが悪魔なら、わたしの誘惑の力が効くはずだ。

再び目を見つめる。態とらしく潤ませた瞳を近づければ、デンジの顔が、みるみる赤く染まっていく。

「だから、わたしと……」

視界の隅で、何かが動いた。

反射的に、そちらに目を向ける。

鼠………？

この建物は、比較的新しいという訳ではないが、作りはしつかりしているし掃除も行き届いている。鼠が出るほどではなさそうだが。

黒々とした目が、一点にこちらを見つめ続けている。

なんだか、気味が悪い。

「え、エツト………あの、アマネ………」

狼狽えるデンジの声で我に返り、歪んだ表情を整える。

「まあ、考えといて。良い返事、待ってるからねえ」

軽く微笑んで、鼠の視界から逃げるように、その場を去った。

嫌な予感がした。

そして、そういうのは大体当たるものだ。

「アマネちゃんは試用期間が終わったら、4課ではなく、特異科全体で動いて貰うことにします」

また報告書を持っていかされた時、マキマにそう言われたわたしは、納得ができる筈もなく、マキマに詰め寄った。

「どういうこと？わたし、アキくんと同じ部隊じゃないと嫌だって、最初に話したよねえ？」

「状況が変わったんだ。君は悪魔を”惹き寄せる”力があるでしょ？デンジ君も、アマネちゃんみたいな悪魔の力ではないけれど、何故か色んな悪魔から狙われていて、結果”引き寄せて”しまっている。

二人が行動を共にする機会が増えると、悪魔が一箇所に固まるおそれがある。

それに、アマネちゃんは十分強いし、バディを固定しなくても……」
「そんな御託はどおくでもいいんだけど？だったらデンジを他の部隊に移せばいいでしょ」

「デンジ君のことは、早川君に手綱を握ってもらうのが一番良い。彼は優秀だからね」

納得できない。

アキくんと離れる時間が多ければ、こいつにどんな事を仕掛けられるか分かった物じゃない。

それに、わたしと彼には一緒にいる時間が必要なんだ。

アマネの事を思い出して貰わないと、困る。

……何がそんなに困るかは、よく分からないけど、わたしはあの鉛が腹の奥に溜まるような、黒いものが渦巻くような、あの感覚が非常に気持ち悪いんだ。

「……本当にそれだけが理由？」

どうにか食い下がろうとそう言い放せば、マキマの眉が僅かにだが動いた気がした。

「わたしがデンジの近くにいる事が、あんたにとって、何か不都合な事でもあるんじゃないの……？」

そう。現時点で、マキマの弱点として一番有用なのは、デンジ。

ここまでわたしたちを引き剥がそうとするには、なにか理由がある筈だ。

「……そうだね。確かに、アマネちゃんの言う通りだ」

マキマが、そう言うのと静かに立ち上がる。

咄嗟に身構えようとした時だった。

「ぱん」

マキマが、不可解な言葉を発した。

見ると、手の形を銃の形にして、こちらに向けている。

何をふざけているんだ？と訝しむと、自分の意思とは関係なく、ぐらつく上半身。

そのまま、なんの抵抗もできず床に倒れた。

転がったわたしの視界にうつるのは、断面から血を噴き出す、わたしの下半身。それも、数秒遅れて倒れる。

意味がわからなかった。

理解するより先に、強烈な痛みが襲う。

なんだ、これ。

攻撃されたことに全然気づかなかった。悪魔は？出現させていない。

こんな一瞬で？おかしい。わたしは強い悪魔だ。マキマに少しでも抵抗できる術はある筈だ。なのに、おかしい。

死ぬ？こんなところで？いや、マキマは元々信用ならない。いつ殺されてもおかしくなかった。

こんな所で終わるなんて、アキくん。アキくん。

痛みで、脳みその中でアマネの言葉と少しずつ入り混じりながら、それでも混乱する思考を必死に巡らしても、答えは見つかからない。

しかし、意識が遠のくことはなかった。

わたしの断面から肉片が伸びる。すると、側に倒れる下半身に結合し、こちらにずるずると近づいてきた。

また訳の分からない自体が目の前で起きていることに、ついていけずにいると、マキマが珍しく声を上げた。

「やっぱり……！君は半不死身じゃなく、不死身だったんだね」

「は………？」

「初めて会った時、不思議なおいだと思ったの。君は魔人じゃなくて、デンジ君と同じ、悪魔を身に宿した人間……いやちよつと違うかな？」

血溜まりの中、完全に元通りになったわたしを前に、マキマがかがみ込む。

身体は戻っても、血が不足しているのか動けない。

「だって君の意識は、誘惑の悪魔が優位だ。限りなく魔人に近いけど、またそれとは違う。」

君は悪魔の新しい可能性を宿した、稀有な存在なんだね……！」
常に表情の変化しない顔が、今は高揚している。

普段光の捕らえない不気味な瞳が、あどけない子供のようにに煌めいているのが、いやに奇妙で背筋が震えた。

「何故、アマネちゃんを早川君の部隊から引き剥がしたのか。それはね」

その煌めきが一瞬にして形を顰め、マキマの双眸が、揺らいだ。

いや、わたしの視界がぐにやり、と曲がった。

歯を食いしばって耐える。

マキマが満足そうに微笑んだ。

「君を、脅威に感じているからだよ」

「………何、あんたは別にアキくんのごとは実際どうでもいいんでしょ？わたしらのは放っておいて、デンノコ野郎のケツだけ追っててもらえないものかなあ？」

「デンジ君に、変な入れ知恵しようとしたでしょう」

マキマの声が、冷たく響く。

何故、知っている？その場にマキマは……いや、他の人間すらいなかった。

ふと、黒々とした動物の目を思い出す。
鼠。

もしかして、あれはマキマの……………

「デンジ君は、私の犬なの。私たちの邪魔をするなら、アマネちゃんを本気で殺しにかからなきゃならない」

普段通りの声のトーン、抑揚、表情だ。

なのに、威圧感で押し潰されそうになる。額に脂汗が滲む。

「そんな事にならないように気をつけなきゃね、お互い。前も言ったけど私、君を殺したくなんかないんだよ。嘘偽りない、私の本心だ」
手を差し出される。

既視感がある。差し出される手も、その目で見下ろされるのも。

「兎も角、今まで以上にアマネちゃんには期待しているよ。これからもよろしくね」

前と同じように、手を払おうとするが、今回はその手ががちりと掴まれたまま、なけなしの力を入れるが当然振り解けない。

マキマは、至極満足そうに笑みを浮かべ、わたしを見下ろしていた。

吊い

いらいらする。何も上手くないかない。

アキくんを含め、わたしの今後の動向をマキマから正式に伝えられた。

執務室を出ると、デンジとパワーがいた。

デンジは、この間の事があつてか、わたしを見た瞬間、視線を右往左往させ、挙動不審になる。

「あの、アマネ……。こないだの事なんだけどさ」

「ごめんデンジ。あれ、なかったことにして」

「え」

わたしは通り過ぎ様に吐き捨てる。

呆然とするデンジを置いて、ずかずかと廊下を突き進む。

腹の虫が治まらない。

アキくんがわたしを制止しようとしたのも、今は腹が立つ。

しかし、こういった時に、嫌なことは立て続けに起きるものだ。

角を曲がった拍子に、人とぶつかる。

結構な勢いでぶつかったが、こんな事で倒れるほどやわじやない。しかし、相手は「おっと」と、わたしの腕を掴んで支えた。

「ごめんね、大丈夫？」

頭上から声をかけられ、視線を上げる。

背が高い、女だった。

短く切り揃えた黒髪に、右眼に眼帯をしている。

「あれ、君。もしかして、新しく入った魔人ちゃん？」

ボーイッシュな見た目に反して、柔らかな話し方だ。

大体の公安の人間は、わたしに怯えるか蔑むか。しかし、この女は

まるでごく普通の人間に対するように、接してくる。

答えずにいると、女がにこりと笑いかけてきた。

「はは、噂通りすごくかわいいけど、すごく無愛想だ。アキ君にしか懐かないんだってね」

朗らかに”アキ君”と呼んだその一言に、眉根が寄る。

「誰、あんた」

「私は君と同じ、特異4課の姫野だよ。よろしくね。で、君はアキ君の何なの？」

姫野が、笑顔のまま詰め寄る。

「君が来てから、アキ君の様子がおかしいんだよね。ぼうつとしてる事が増えてる、今までこんな事はなかったのに。……君、アキ君になんかした？」

ぼうつとしてる事が増えた。そうか、そうだったんだ。

アキくんは、そんなにもアマネのことを考えてくれる時間が増えたのか。

この前も、煙草を奪ったわたしの事を強く叱りつけて、アマネの身体を気遣ってくれた。

彼の中で、アマネの存在がどんどん大きくなっていくのを確信した。

すると、途端に自信が漲ってくる。

「わたし？わたしは、アキくんの元カノで〜す！」

急に機嫌よく声を弾ませたわたしに姫野はたじろぐ。

「ハア?!ほんとか?」

「うっそお、初恋の想われ人で〜す」

「……もつとタチ悪いじゃん」

その時、僅かに姫野の表情が曇ったのを見逃さなかった。

察してしまった。

こいつはアキくんの事が、好きだ。

その後、合流したアキくと姫野のやり取りを見て、気の置けない間柄だというのはすぐに分かった。

同じピアス。同じ煙草のにおい。

アマネと離れていた数年間を、濃い密度で埋めるような、割って入れない二人の深い信頼関係が、その一瞬で見たとれた。

マキマといい、邪魔な女ばかりだ。

寧ろマキマより厄介かもしれない、この女。

アキくんがマキマに惚れているのは、あいつの能力によるものだ。しかし、例えばそれがなかったとしたら、きつと、アキくんはこの女と……。

「やめて、それ以上考えないで」

アマネの悲痛な声が、思考を妨げる。

いつの間にか、わたしは自室のベッドの上で膝を抱えていた。

暗い室内に鉄格子の影が、味気のない白いベッドリネンとわたしの身体に縞模様をつくる。

意識がはつきりとすれば、二の腕に鈍い痛みが走った。

爪先を見ると、血がついている。また肌に爪を立てていたのだ。

「嫌だ、わたしを忘れないで、早川くん。遠くへ行かないで……」

アマネの声に、徐々に脳が支配されていく。

まただ、また来た。

この身体はもう健康な筈なのに、どんどん気道が狭くなり、息苦しくなっていく。

呼吸が浅くなり、酸素が脳に充分に行き渡っていない感覚がする。

胸を掻きむしる。わたしが感じている痛みは遠ざかり、やがてアマネの痛みへ変わっていく。

”忘れないで”か。

アマネの中で渦巻く黒い物の正体が、分かった気がした。

それは、忘れられる事への恐怖だ。

確かに、忘れられるのは怖いよね。よくわかるよ、わたしも忘れられたくない。

ただ、わたしは誰に忘れられたくない？人間たちに？人間を食い脅かす存在であるわたしたち悪魔が、そんな理由で救いを求めるなんて、虫が良すぎて鼻で笑いたくなる。

わたしは人間も悪魔もどうでもいい。好きでも嫌いでもない。ただ、美しいものが好きなだけだ。

なのに、なんと間抜けで、浅はかな願いだろうと思いつつも、アマネの叫びは、情けなくも本能で共感してしまうのだ。

それからほどなくして、特異課全体が、何者かによつて銃で襲撃される事件が起きた。

特異課の人間の大半が殺された。

その中の一人に、姫野も含まれた。

呆気なく、邪魔な女が一人減った。

それを聞いたときの、喜びと来たら、なんと表現すれば良いか。

わたしは：いや、アマネは二回も銃の悪魔に助けられた！やはり銃の悪魔様様だ。

ここ暫く、ずっと苛立っていた所為で靄のかかった心が、すつと晴れ渡ったようだ。

見舞いの花束を片手に、病院の廊下を鼻歌混じりにスキップしていく。

床を踏むたびに、ローファの底がカツン、という小気味良い音を響かせる。軽やかにプリーツスカートの裾がはためく。腕を振るたびに手に持った花から、廊下にぱらぱらと花卉が落ちていく。

アキくんの病室の前に辿り着き、ドアを開ける。

驚いたように顔を向けたアキくんは、目が僅かに腫れて、鼻の頭が赤くなっていた。

アキくんはわたしの怪我の心配をしてくれたけど、そんな事より、姫野の死に打ちひしがれているようだった。

床に転がった煙草を見つめて、瞳を潤ませている。

先程までの晴れやかな気持ちだが、また曇りだす。

「あの”姫野センパイ”がいなくなったのが、そんなに悲しかったんだ……」

アマネの自我が、身体の底からふつふつと沸騰するように、湧き出てくる。

沸点に達したように、他の女を想ってそんな顔をするアキくんを見たくないと呼ぶアマネと、わたしの悪魔としての加虐心が嬌声を上げた。

「きやは！あゝ、せいせいした！」

あの女、人間の癖に純粋なアキくんには色々刷り込んでくれたみたいで、ほんとにうざかったんだよねえ〜！」

湧きあがった悦びは、内に留まらず、声となって溢れ出た。

「ほんと、死んでくれてよかった〜!!」

久方ぶりに、”本来の自分”が放出されたようだった。

悪魔のわたしも、アマネも。

アキくんの呆然とした顔が、笑いすぎて涙の滲む視界にぼんやりとうつる。

それが次第に、目がつり上がり眉間に皺がより、怒りの表情へと変わっていく。

「黙れ!!」

わたしの胸ぐらを掴んだアキくんの手は、怒りのあまり振るえていた。

先日の煙草のときだけじゃない。

アマネの幼少期の記憶の中でも、アキくんはアマネを怒鳴ったことがあった。

ただ、そのときはアマネの事を思って叱ってくれたなど、ぼんやりと思う。

今はどうだ。

他人を侮辱するわたしを、そんなのはアマネじゃないと否定の言葉をぶつけてくる。

わたしは、早川アキに憤りを覚えた。

こんなにも自分へ捧げられる、ひたむきな愛に気づかない。

幼い君の中途半端な優しさが、アマネの心を支配したのにも気づかないなんて。

アマネの綺麗で表面的な部分だけ都合良く取っておいて、本当のアマネの、黒い殻に守られた本当の姿など、すっかり忘れてしまっている。

贅沢で、滑稽で、なんと羨ましい人間。

「アキくんさあ、アマネの事、記憶の中で美化しすぎじゃない？」

可哀想なアマネ。大丈夫、わたしがどうかしてあげる。

「茅森アマネがどんな人間だったか……」

思い出したくなくても、駄目だよ。君の大大好きなアマネちゃん、怒っちゃうんだから……」

アキくんの耳元で囁く。

愛だとか、好きだとか、呪いに似た言葉だ。

しかし、営みを知らない悪魔にとって、それは縁遠く、それでいて甘美な響き。

早川アキが、欲しい。

そうすれば、わたしはまだ知り得ぬ欲を、埋められるかもしれない。

黒い膜に覆われた、底なし沼に似た空洞がついに埋まり、わたしは本当に美しい存在へ昇華できるかもしれない。

そんな可能性を、信じていた。

頭のネジ

特異課の人員不足による合併が決まってすぐ、その男とは出会った。

でかい図体に、覇気のない真っ黒な瞳。白髪頭は老けた印象を持たせるが、一枚板を入れたように真っ直ぐ伸びた背筋と服の上からでも分かる鍛えぬかれた身体が、なんだかちぐはぐだった。

なによりも、唇から頬にかけて裂けた傷跡が目立っていた。

「特異4課の隊長として、新しく就任した岸边だ」

執務室に一つしかない椅子、いつもの定位置に腰掛けたマキマの傍らに立つ、岸边という男は、無表情のまま自己紹介をした。

室内にはわたしとマキマ、岸边の三人という、異様な顔ぶれだ。

「……え、隊長サマが直々に、わたしに何の用？」

「隊長は本来バディは必要ないんだけど、岸边さんにアマネちゃんの事を話したら、是非バディにしたいって言ってくれて」

「はあ〜？」

「こんな薄汚い老け込んだ男が、わたしのバディだって？ありえない。」

「岸边さんは前々から、”壊れないおもちゃ”を上層部に所望してきましたからね。デンジさんとパワーちゃんの二人はもうバディを組んじゃっているし…。不死身のアマネちゃんが適任だと思って」

”壊れないおもちゃ”だと？

狂ってる。確かに目の前の大男は、何をしてくるか分からない奇妙な目つきをしている。

マキマはわたしがデンジを狙った腹いせに、こんな意味のわからない男にわたしを差し出そうとしているのか。

「なにが適任だ、クソ女!というか、わたしが不死身だつてことは他の奴らには伏せるつて話じゃなかったの?!」

わたしのよような、魔人…、いや。今となつては魔人かどうかも怪しい。

魔人は人間の死体に乗っ取った悪魔だ。人格は悪魔で、人体はただの容れ物。そして、半不死身。致命傷を負えば死ぬ。

対して、わたしは身体を真つ二つにされるよような、明らかに死ぬ傷を負わされても回復する。

人間の時の記憶を持つ魔人は何人かいるらしいが、わたしの場合はアマネの”自我”も残っている。

わたしのよような存在は、レアケースらしい。

ただ、そういった存在は他国から狙われる可能性がある。

わたしの場合、容姿や攻撃にイレギュラーな特徴は顕著に現れてない為、以降も”魔人”として扱われることとなった。

「岸边さんには、アマネちゃんのバディになつてもらうだけじゃなく、鍛え上げてもらう目的も兼ねているから。正体をちゃんと話しておいた方が、本気で指導してもらえるでしょう?」

「指導、人間がわたしに?…ハッ、そんな物必要ないでしょお、わたしは強いんだから!!」

鼻で笑う。馬鹿げている。人間に指導してもらつたところで、なんの役に立つというのだ。

指導どころか、こちらがちよつと小突いただけで殺してしまうのではないか。

「いいから黙つてついて来い。マキマ、もういいな?」

「はあ?ちよつ…」

岸边が、食い下がろうとするわたしの首根っこを掴むと、執務室を後にしようとする。

「はい。アマネちゃんをよろしくお願いします」

「離せジジイ！わたしは絶対嫌だからあ!!」

折角アキくんのバディが死んだんだ。

わたしがアキくんのバディになるべきだったのに。

しかしこの男、ありえない馬鹿力だ。いくら暴れようともびくともしない。

「少し黙れ」

その言葉の直後、ゴキ、と不快な音が鳴り、首筋に衝撃が走る。徐々に暗転していく視界。やがて、わたしは意識を手放した。

「こんなんで気絶するなんて、拍子抜けだな」

声がして、意識が覚醒する。

辺りを見渡せば、人の気配のない廃墟へ場所が変わっていた。

「あ……あんた、今つ、わたしの首の骨、へし折ったでしょお?!」

「お前はどうせ死なないからな。だから折った」

意味が分からない。理由になってないだろ。

わなわなと震えるわたしを気にせず、スキットルから酒をあおりだす。

「酔っ払ってんのか……？酔って殺しちゃいました〜ができちやう犯罪者を雇ってんのお？天下の公安サマはあ……」

「ああ、俺が酒で脳がイカれちまってるのは否定しねえ。ただ一つ、間違っている」

岸边はスキットルを持つ手で、人差し指をこちらに向ける。

「お前に人権はない。殺しても俺は罪に問われない。……ああ、そもそも死なないならその理屈も必要ないな」

「……結論、わたしをどうしたいの？いい歳こいて、”壊れないおもちゃ”でおままごとでもしたいわけえ？」

まだふらつく足で、立ち上がる。

足の裏に力を込め、戦闘体制をとった瞬間、目の前から岸辺が消える。

直後、腹に衝撃が走る。

ナイフが突き刺さっていた。それだけじゃない。背中から脇腹にかけていくつも刺し傷が残されており、そこから血が噴き出す。

膝から崩れ落ち、口からも血を吐き出した。

「俺の目的は、お前を次の作戦までにある程度”使える武器”に仕立て上げることだ」

岸辺はわたしの髪を掴み上を向かせると、懐から出した輸血パックの中身をわたしの口にぶち込んできた。

ぼやけた視界が再び鮮明になり、腹に突き刺さったナイフを引き抜き、岸辺に斬りかかる。が、手首を蹴り上げられ、呆気なくナイフは手から落ちた。

そのまま踵を脳天に落とされ、わたしは地面に倒れ込んだ。

「マキマが言った通りだな。悪魔の力に頼るばかりで、直情径行な攻撃。防御も何もあったもんじゃない」

背の中心を強く踏まれる。

それだけで、わたしはいくら手脚を動かそうとも、起き上がることができない。

肺が圧迫されて、呼吸が苦しい。

「サムライソードとヘビ女を捕らえる作戦……。失敗すれば、特異課は解体されるだろう。そうなれば、お前は公安によって殺される」

岸辺は、わたしを片脚だけで押さえつけたまま、また酒を煽りだす。

「それが嫌なら、最強のデビルハンターである俺を倒せるくらい、最強の悪魔になれ」

岸辺がスキットルのキャップを閉めるとき、脚の力が僅かに緩んだのを逃さなかった。

上体を捻り、岸辺の体勢を崩す。

そして奴の眼球目掛けて、指を突いた。
はずだったのに。

「は……………う？なんで」

突き立てた二本の指は、第2関節から先がなくなっていた。加えて、顎から脳天にかけてナイフが貫通している。

わたしは痙攣して仰向けに倒れた。

「あと、俺は先生と呼ばれると気持ちよくなれるから、先生と呼んでくれ」

霞む視界の中、見下ろしてくる岸边が、そんなことを言っていた気がした。

「誰が……………呼ぶか、クソジジイ……………」

血で塞がった気道を無理やり開くように、最後の力を振り絞って吐き捨てると、わたしはまたも、意識を手放した。

「最悪だよお、もうほんつとうにさいあく……………」

「なんかアマネ、ちよつと見ない間にキラキラオーラ？みたいなんが、なくなつたな……………」

「デンジは随分、男前になつたんじゃあないのお……………」

二人、げっそりした面持ちで、屋上のベンチに肩を並べてだらしなく座る。

デンジとはあの一件で気まずい関係になるかと思いきや、次に顔を合わせたときにはまるで何もなかったかのように、からりとした声で挨拶をされた。

「え、なんも気にしてないのお…？」

「いや、ひでえなどは思っただけど。よく考えたらアイツにべつたりのアマネが急に俺に好きだとか、意味わかんねえし。それに、俺にやまキマさんがいるしな！」

そう言つて鼻を鳴らしたデンジには、呆れを通り越して、妙な愛着

が湧いてきた。

そうして今、岸边という共通の敵を持ち、意気投合している。よく考えれば、不死身同士という稀有な存在だ。デンジはわたしのことを、ただのちよつと強い魔人ぐらいにしか思っていないが。

わたしたちが仲良くなるのは時間の問題だったのかもしれない。

「うわ、なんでいるの君たち」

背後から、少年のようなすこし高めの声がする。

「なんでって。ここ、元々わたしのお気に入りに入りスポットだったんだけど」

「いや、僕の方が君より先に知ってたから。……まあ、この建物の中で迫害される人外らが考えることは大体同じか。ここ、あんまり人が寄り付かないからね」

そういつてわたしたちの横を通り過ぎ、怠そうに鉄柵に凭れるのは、セミロングヘアに中性的な顔立ちをしており、白いおおきな翼、頭には天使の輪が浮いている、見た目通りの名前だが、”天使の悪魔”という奴だ。

初めて彼を見たときは、その美しさに驚いた。

彼を食べたい、体内に取り込みたいという、誘惑の悪魔としての本能が訴えかけてきたが、最近はややアイスやら、美味しいものを食べ過ぎた所為か味覚が鈍ってしまったようだ。

いま、悪魔や人間を食べたいかと聞かれると…、できれば食べたくない。焼いた鶏肉とかが良い。

それに、こいつに触れると寿命を吸い取られるらしい。口にしたらどうなることやら、と考えることでその本能を払拭した。

ただ、そんな邪な事を考えたのはほんの最初だけだった。今では同じ屋根の下で暮らす、数少ないまともに話せる人外同士として、少なからず親交はあるほうだ。向こうは毎度のこと鬱陶しそうにしてく

るが。

「そんなことより天使い！あんだ、アキくんの新しいバディになったみたいじゃん。わたしがイカれジジイとバディを組まされ毎日何回も殺されかけてって生活を送ってるのに、羨ましいい〜〜」

「いや……僕も組みたくて組んでる訳じゃないし。寧ろあの人、サボると煩いからだるいんだよね」

「あー、アイツいちいちうるせえよなあ！」

「二人はいいよね。片やバディ、片や同棲……」

口を尖らせるわたしを見て、デンジが何故か首を傾げる。

「お前、なんでアイツん事そんな好きなの？」

「え？それは、わたしのこの身体の持ち主が好きだったから……」

「でもそれって、その人間の記憶の中でそうだったってだけだろ。今のアマネには関係ないじゃん」

言われてみれば、何でだろう。

アマネはうるさいし、公安からは逃れられないし。

アキくんを揶揄ってやろうと思って、でも別に態々関わる必要もなくて。

てかそもそもわたし自体は、アキくんのことなんてどうでもいいんだって。

それでも、アキくんに思い出してほしくて。

アキくんが憎くて、アキくんが欲しい。

あれ、わたし、結局何がしたいんだ。

「お〜い、アマネ？」

返事のないわたしを不審に思ったデンジの声で、はっとする。

何でもいいからとにかく返さなければ。えっと、

「ん〜……。顔が、いいから」

わたしがあまりにも思い悩んだ風だから、どんな答えが返ってくる

だろうと期待でもしていたのか。

デンジはその一言を聞くと、顔を顰めた。

「ほお〜くん……」

「なに、その腑に落ちてなさそうな顔。あんたも前、似たようなこと言ってなかった〜?」

「言いたいことはよお〜く分かる。が、面が良い男はモテてようござんすなあと思つてよお!!」

デンジは吐き捨てるように言うと、背もたれに完全に力を預けきつて「今日の特訓もだりいな…」と愚痴を溢した。

「実際アマネはどうなの?」

自室の打ちっぱなしのコンクリート壁に貼り付けられただけの、簡素な鏡に映る鏡の前で、わたしは問う。

常にどこからか水の滴る音がするが、出所が分からない。

「ん?」

「さっきのこと。アキくんのどこが好きなのお?」

「……君は、わたしが態々言葉に出さなくても、何でも分かるんじやなかったの?」

そうだ。わたしはアマネの記憶を丸々そのまま自分の脳みそのように覚えているし、感じとったこと、思ったこと、考えていることが手に取るように分かる。

けれど、この事に関しては、分からない。

もしかしたら、分かっているのかもしれないが、わたしにはない感覚のあまり”理解できていない”だけなのかもしれない。

それほど人間の考えることとは、複雑怪奇なもののかと恐ろしい気もするが。

わたしがかぶりを振ると、アマネは珍しく明るい声で笑った。

「ふふ、じゃあ教えない」

「なにそれえ」

「君が知らないなら、これはわたしだけの特別な感情だ」

悔しい気もするが、アマネの朗らかな声に何故かわたしも嬉しくなって、まあいいかという気持ちになってくる。

「前にアマネ、わたしは負けないからって言ってたよねえ」

「うん」

「君はもう勝ってるよ、わたしに。認める」

わたしは、わたしが一番だった。

周りの奴らは、みんなわたしに従う。わたしはただ敬われて楽しむだけ。

でも、今のわたしは。アマネに対するわたしの気持ちは。

どうにか彼女を幸せにしてやりたい。助けてあげたい。

そんな気持ちで動いている。

そう思わせるアマネは、わたしに勝っている。

憧れ

退院して職場に復帰したアキくんの背中を見つけ、すぐさま駆け寄ると、鼻を掠めたにおいに足が止まった。

「においが、前と違う。」

「悪魔のにおいが。」

以前より、もつと強い悪魔のにおいが染み付いている。

呼び止めようと、喉元まで出かかった声を呑み込んだ。

わたしのなかに、今までにない焦りと不安が押し寄せてきた。

「早川アキの新しい契約悪魔？」

「そう、バデイの天使なら知ってるでしょ？」

おなじみの屋上でまたも鉢合わせた天使に訊ねる。

すると、天使は思考を巡らせるようにぼんやり宙を見上げた。

「ああ、なんて言ってたかな、……未来の悪魔？」

「未来の悪魔」

未来か……未来を怖がる人間は多い、か？

いや、多いだろう。歳を取ること、先の見えない不安。それに、
今悪魔の蔓延るこの世の中では、未来に恐怖を抱く人間は少なくない
かもしれない。

なにより、においが証明だ。

不穏なにおいがした。きっと強い悪魔だ。

「……代償は？」

「右目に住まわすこと。それでちよつと先の未来を見ることができ
るんだって。便利そうだよね」

それだけ？

強い悪魔なのに代償が軽すぎないか。

「ほんつとうにそれだけ?!もつとなんかあるんじゃないの?」

「ええ〜、うるさ。知らないよ……。ていうか本人に聞けばいいじゃん。……面倒事に巻き込まれるのは御免だよ」

詰め寄るわたしに後退りすると、天使はそのまま去っていた。近づきすぎたか。

触れると寿命を吸い取ってしまう天使は、一定の距離以上近づきたがらない。

「本人に聞けるんなら……。そりゃ苦労しないよ……。……」

わたしの独り言は誰に聞かれることもなく、日が暮れた紺色の空に吸い込まれていった。

息が整わない。

汗がとめどなく噴き出してきて、前髪を濡らすだけにとどまらず、床へ無数の染みをつくる。

「今日の動きはよかった、いまのを忘れるな」

今日は訓練場を使っている為、”汚してはならない”からナイフはなしだ。

それだけでも有難い、が今日も何回首の骨を折られたことだろうか。

ふと岸辺が腕時計に目をやる。

チャンスだ!

腕を支柱にして、岸辺の顎に向かって下から蹴りを入れようとする。

岸辺はこちらには目もくれず、右手でわたしの片脚を掴んだ。

天地が逆になった、と思ったら、スカートがひっくり返ってわたし

の視界を覆う。

「時間だ。仕事にいくぞ」

「おい離せ！パンツ見えるでしょ変態ジジイ!!」

もう片方の足で背中に蹴りを入れるが、岸辺はわたしの足首を持って担いだままびくともしない。

連れてこられたのは繁華街と住宅地の境目。

路地裏は人の声が遠くなり、ビルの影に覆われて昼間でもうす暗い。

「この地区は近日、十人以上の死傷者を出している悪魔が潜んでいる。被害者の目撃情報によると、影や暗がりから現れたことから、影の悪魔とみられ……」

「おいでえ〜〜!」

岸辺の説明を遮り声を上げると、後ろにのびる影がわたしの動きに反して揺らめいたのが見えた。

直後に顕現する悪魔。

すかさず回し蹴り。

悪魔が後ろにふつとび、建物にぶつかった。体勢を崩した悪魔に向かってとどめの一撃。

辺りは大量の血で溢れかえり、悪魔の動きはぴたりとやんだ。

「どうだあ、岸辺…これがわたしの実力だ!!」

「声がでかすぎだ」

「え?」

わたしに向かって、ナイフが飛んでくる。

こんなところでも特訓の続きか？

間一髪でよけると、背後から奇声があがった。

悪魔だ。だが、今倒した影の悪魔とは違う。

こいつ以外にも、雑魚悪魔が3：4匹、こちらに向かってくる。

「面倒ごと増やしやがって……………」

岸辺の低く呟いた一言で、背筋が震え上がった。

不味いことをしてしまった、ような気がする。

「避難誘導なし、建物の損壊。極め付けは無駄に悪魔を呼び寄せて被害は拡大。お前はデビルハンターになっていままでも何を学んできたんだ？」

「あだっつ!!?」

全ての悪魔を倒し終えた後、岸辺に脳天を思い切り叩かれる。

「なんでよ！悪魔を殺すのがデビルハンターの仕事でしょ?!何も間違ったことしてないじゃん!!」

「悪魔を殺す以前に、俺たちの仕事は人間様を死なせないようにすることだ。」

悪魔を殺したいだけなら、お前は契約悪魔として、使役されるだけのほうが性に合ってるかもな」

契約悪魔。

それは公安の地下奥深くにある、地下牢のような場所にいる、生捕りにされた悪魔たち。

実際どんな場所か訪れたことはない。ただ、どれだけ劣悪な環境かは想像に難くない。

それこそ家畜と変わらない。絶対に嫌だ…!

「それが嫌なら勝手な行動はやめるんだな」

こいつ、自分は頭のネジが飛んでるみたいなのを言いながら、存外まともなことを言うじゃないか…………。

「アマネさん、岸辺隊長どこにいるか知りませんか?！」

わたしが公安近くの食堂で昼飯を食べていると、一人の隊員が声をかけてきた。

「……知るわけないでしょ」

「今日の午後までに岸辺さんの押印貰わないと、僕が先輩にどやされるんですよ!!ここだったらいるとおもったのに!!」

「しるか。静かにしてよお、こっちは食事中なんだけど」

睨みつけてから食べかけのラーメンを再び啜る。

「アマネさんだったら、ここ以外にも岸辺さんの行き先に思い当たりありますよね……?だってバディなんでもんね……?!」

そういうと、隊員は手に持つ書類を震えながら机に置く。

「ごめんなさい僕これから巡回行かないとまた怒られてしまうんでえ!あとはよろしくおねがいしまああす!!」

「おい待てクソにんげん!!アマネ様に仕事押し付けるなんて、いい度胸してるじゃあないの!!!」

脱兎の如く逃げる隊員。雑魚の癖に無駄に逃げ足が速いな……………。

最近人間共にナメられている。

気の所為じゃない、理由は分かる。岸辺がバディについたからだ。

「凶暴な魔人もあの最強といわれるデビルハンターが手綱を握つてると分かれば安心」だと。

「あのやろう……近いうちに殺してやるう……!」

その前にこの書類を道端に捨ててやろうか。

いや、最終的にわたしにお咎めがいくのが目に見える。

うう、なんでわたしがこんなことを。

「いいじゃん、多分岸辺さんあそこの店にいるんじゃない?わたしも一回見てみたかったんだよね、ああいうお店。最近は一人行動もある程度許されるようになってきたし、どうせなら街散策も兼ねて行って

みようよ」

アマネがご機嫌にそう言う。

東京に来てまともに外を出歩けた試しがないからな。都会を少しでも堪能したいのだろう。

仕方ない……。

ただ癪なので、いつもの二倍は時間をかけてラーメンを食ってやろう。いや、餃子とチャーハンも追加してやる。

公安に飼われている人外は、単独での外出は時間に制限がある。

まあ岸边が勝手にふらふらしているのだから、多少時間過ぎてもお咎めなしだろう。

わたしは岸边とバディを組んだものの、岸边と一緒に仕事する機会は他のバディに比べると少ない。

隊長様クラスになれば、巡回などはなく強力な悪魔の討伐に駆り出されるか、作戦の現場指揮を執るか。

わたしは以前と同じように、他の課の応援などの仕事の主だった。

繁華街を通り抜け、人が少ない通りに入り、目的の看板を見つける。ポップでカラフルな字体が雨風と排気ガスにさらされて黒ずんでいる。看板の案内に従って地下階段をくだると、中の様子が全く窺えない扉。

臆することなく重い扉を引く。

まず目に入ったのは、昼間なのに全く光の入らない地下の空間には眩し過ぎるぐらいの、ギラギラとしたシャンデリア。

その次に、一斉にこちらに目を向ける、華やかなドレスに厚化粧をした女たち。

客を出迎えようと瞬時に作った笑顔が、わたしを見た瞬間訝しむように歪んだ。

「悪いけど、この店未成年は立ち入り禁止なのよね」

「どいて」

凄んできた女の肩を押して、中に踏み入る。

中は空気が籠っていて、煙草とカビのようなにおいがする。

赤いペロアの絨毯はところどころ汚れていて、壁はヤニで黄ばんでいた。

果たして奥の席に岸边はいて、女に囲まれながら飲んだくれていた。

「やっぱりいた!!」

「あ?……お前か」

岸边はウイスキーグラスを掲げてこちらを見やる。

机の上には大量の空きボトルがあるが、岸边の様子は普段とそう変わらない。

「え〜ウソ! 岸边さん、娘さんいたの? 似てなあ〜い」

「んな訳ないでしょ、こんな小汚いジジイの子供な訳あるかあ!!」

岸边の右横でグラスを傾けるケバい女の失言に反論すると、「やだ〜、反抗期かわいい」「これでもね、お父さん昔はすごくハンサムだったのよ」と、他の女たちも甲高い声で口々に話し出した。

話を通じないのか、この女どもは。

「お前、なんでここが分かった?」

岸边の質問に鼻を鳴らすと、ジャケットの胸ポケットから手に収まるほどのちいさな紙を取り出して見せる。

「あら、あたしの名刺」

岸辺の左側に座る女が言う。

そう、これはこの店の女の名刺。

以前、岸辺と組手をした際に紛れて盗ったものだ。

本当なら財布か公安手帳でも盗って、ゆすりたかったところだが。

「あんたがここに入り浸ってるっていうのは前から分かってたんだよ。あんたの部下たちに隠れ家をバラされたくないや、さっさと仕事に戻れ!!」

言い放ち、岸辺の前の机に、先程押しつけられた書類を叩きつけるように置く。

岸辺が自分の胸ポケットを探り、

「確かに俺のだな」

と独り言のように呟くと、急に立ち上がった。

図体のでかい岸辺が立ち上がると、一気にこの狭い店の体積が減ったような感覚になる。

「あれ、岸辺さん帰るのおく？また来てねえ」

女の甘ったるい声に返事もせず、岸辺が出入り口のドアを開ける。

勝った……!!

岸辺は今までわたしが名刺を盗った事に気づいてないようだった。

わたしは岸辺を初めて負かすことができた気がした。

勝ち誇った視線を岸辺の背中に送ると、わたしも店を出た。

「きつ、岸辺さん……!!」

岸辺の大股歩きに合わせるのが怠くて、数歩後ろをついて歩いていると、人混みの中から岸辺を呼び止める声が聞こえた。

岸辺と共に声のした方へ視線をやると、黒髪に、小柄な女性が息を

切らしながらこちらに駆け寄ってくる。

「……………ミナミ?」

「はいっ。……………今度は覚えていてくれたんですね」

子犬のような丸い目がキラキラと光っている。

顔が若く年齢が分からないが、落ち着いた服装からして成人はして
るように見えた。

「お前こそよく気づいたな。あの頃に比べて大分老けたと思うが
……………まあ、こんな傷がある奴はそういないか」

岸边が口元の傷をさすると、ミナミという女は曖昧に笑った。

「お隣は…部下の方ですか?」

誰が部下だ、わたしはこいつの下についてた覚えは一度もない。

わたしが睨みつけようとしたのを察したのか、岸边がじろりとこち
らに視線だけ動かし、慌ててそっぽを向く。

「こんなガキだが、一応俺のバディだ」

「え?それじゃあ、クアンシさんは……………」

ミナミの顔が曇る。

クアンシ? 岸边の前のバディか。

「ああ、……………死んだ訳じゃない、安心しろ。こう何年も経てば…色々あ
るもんだ」

「そう、ですか。生きてるのならよかった」

ミナミはあまり追求せず、しかし安心したように表情を緩めた。

「何より岸边さんが今もご健在で、デビルハンターを続けていらつ
しやるのが、嬉しいです。……………いや、嬉しいっておかしいですね。危
険な仕事なのに。逃げた私が言うなんて尚更……………」

「お前がいま元気でやれてるなら、それでいい。あの時の判断は懸命
だ」

岸边の言葉に、ミナミは左手の薬指に嵌った指輪を撫でながら、噛
み締めるように何度も頷く。

「お仕事中でしたよね、呼び止めてごめんなさい。……………今日はお会い
できて、本当によかったです」

ミナミは岸边に深くお辞儀をして、晴れやかな笑顔を向けた。目尻には笑い皺ができていて、見た目よりも歳が上なのかもしれないとその時に思った。

「……………誰、元カノ？」

「アホか。ただの元部下だ」

「ふくくん……………全然デビルハンターっぽくない。公安で働いてたとは思えない人だねえ」

4課にも”ぽくない”奴がいる。

一つ縛りに顔にほくろのある、小柄な女の子。彼女の場合、見た目に反して意外と動けるようだが。

「あいつは続けていたらすぐに死んでいた。辞めて正解だ」

岸边がそう溢したときの横顔を見てしまった。

何を考えているか分からない目が、遠く昔を懐かしむように、柔らかに細めていた。

ただそれは一瞬で、まばたきをすればいつも通りの岸边に戻っていて、見間違いかとも思った。

わたしはここ暫く、この男と行動していて気づいてしまったことが色々ある。

岸边はどうしようもないアル中だが、根本的な部分で狂えていない。状況判断も正確だ。

すぐサボるしふらつといなくなるが、隊長としての任は全うしている。

意外なほど部下から信頼され、尊敬もされている。

そして何より、人間の命を重く捉えている。

自室のフレームにせんべい布団が敷かれただけの、固いベッドに身体を預けながら、口を開く。

「アマネ、岸辺と会うとき嬉しそうだよねえ」

「えっ。……ばれた？」

気づいていた。

わたしが憂鬱な気分であまり会に行かなくていいのに対して、アマネの心は少し湧き立っているのを。

ただ、それが恋愛的好意じゃないのは分かった。その気持ちは、ずっとひたむきにアキくんに向いて、一度たりともぶれることはない。

「何がいいんだか、あんなおっさんの……」

「わたしも、本当は大人の男の人って嫌いなんだ。どいつもこいつも、気持ち悪い目で見てるし、気持ち悪い手つきで触ってくる。」

でも、あの人からはそういうのを感じないの。わたしのことなんも思っただけなの、心地いい」

アマネはさして恥ずかしがる様子もなく、そう言った。

確かに岸辺は女好きとは言っていたが、わたしに対して下心のようなものも見せないし、特訓以外では一定の距離を保つし変に触れてくることもない。

アマネは父親から性的被害を受けていた。

それによって壊れた倫理観で、いろんな男と無感情に性行為をしていたようだったが、いまはわたしもアマネだから分かる。ずっと根深く残る、男性に対する嫌悪感は消えていない。

「なんも思っただけなのがいいんだけど……」

アマネがそこまで言って、少しの間口籠る。

「わたしが人間だったら、あの視線を向けられたのかなって思うと、ちよっとさみしい」

アマネの言葉と共に、岸辺の柔らかな眼差しが瞼の裏に蘇る。

「ふくん、そういうものなんだね」

わたしはあやふやに返す。

これもわたしは”理解する”ことができなかった。

最近、アマネが分からないことが多い。

反して、アマネはどんどん穏やかになっていく。

寂しいような、でもぬるま湯に足を浸しているような心地良さは、
全てを「まあいいか」で流せてしまうほど、感覚を鈍らせる。

わたしは今日も「まあいいか」と思い、目を瞑った。

映画

サムライソードとヘビ女捕獲作戦当日。

わたしは他の悪魔と魔人に混ざり、ゾンビで溢れかえるビルの中に投入された。

臭い！汚い！！気持ち悪い！！

わたしは武器を持たない為、素手で戦わなければならない。
そんなの無理だ！絶対触りたくない。

ああ、こんなときのために武器を携帯しておくんだった。重いし邪魔だからと今まで避けていた。

他の悪魔連中が戦っている間を縫って、こそこそ逃げ隠れながらいると、奥に扉が見え即座に逃げ込む。

敵に注意しながら進むと、通路を曲がる寸前に声がした。

隠れながらそちらを見れば、アキくんが無数の脚を持つ、目と口が縫い付けられた巨大な悪魔の前に膝をついていた。

デビルハンターは常に危険に晒されている職業だ。

自分が死なないから、どこか油断していた。

まずい、助けなきや……！！

徐に飛び出そうとした寸前、アキくんは立ち上がる。

動かない悪魔。アキくんは悪魔の背にのぼる。

そして、そのまま悪魔の首を切り落とした。

その時のアキくんの顔は、わたしからはつきりと見えた。悪魔と共に何かを断ち切り、覚悟を決めたような表情。

アキくんの鼻筋ってあんなに通ってたっけ。あんな切長な目をしていたっけ。あんなにはつきりとした輪郭をしていたっけ。

状況に相応しくない、そんなどうでもいいような疑問ばかりが頭を埋め尽くした。

急に、記憶の中の幼いアキくんが霞む。

駆け寄ろうとした足がすくんだ。

サムライソードの一件も片付き、わたしはサボりがばれて岸边に数回殺され。

それでもいい事はあった。

アキくんからは、姫野の件で流石に嫌われたかと思っていたが、それでも思い出す努力はすると言ってくれたし、前よりもアマネを見る目がほんの少しだけ優しくなった。

根っこの部分がほんといいい子なんだろう、彼は。それが生き憎そうにも見えるが。

アマネが癩癩を起こす回数は、日に日に減っていった。

いつもの屋上で昼飯の菓子パンを食べていると、いつになくご機嫌顔のデンジが鼻歌なんか歌いながら、こちらをちらちら窺ってくる。何か聞いてこいと言わんばかりに。

「……なんかいいことでもあった〜?」

「それがよお」

食い気味にデンジが話し出す。

「こないだ、映画観に行ったんだ。マキマさんと」

「あ、そう」

嫌いな奴の名前が飛び出し、一気に聞く気が失せるが、デンジはお構いなしで続ける。

「映画つてのはなんていうか、いいもんだよな！その、上手く言えねーけど、知らねえ奴の人生が垣間見えるっつーか」

「知らない。わたし映画観たことないから」

素っ気なく返すが、本当のことだ。

わたしは勿論、アマネの中でも、映画を観たという記憶がない。

映画というものに対するざっくりとした知識はあるものの、映画館がどんな所かと聞かれたら、からしき想像がつかない。

「え、お前映画観たことないの……？」

デンジは口には手を当てて、大袈裟にリアクションをしてくる。

あんたもついこの間、初めて観たばかりだろ。

「意外だなー。アマネはオジョーサマだから、こういう文化的なモンは一通り体験してるんだと思ってた」

「なに、オジョーサマって。普通に貧乏だったよお」

思わず笑いを溢しながら言うと、今度は本当に驚いたように目を丸くする。

「まじ?!あー、お嬢様は俺の勝手なイメージだけど」

「まあ貧乏人なのはこの身体の持ち主であって、わたしは誘惑の悪魔サマだからね？見た目だけじゃなく、わたしの美しい所作から育ちの良さが滲み出てるんだろうねえ」

こんなことを言っているが実際アマネの姿は、立てば芍薬座れば牡丹という言葉そのものだった。

育ちの悪さも貧乏臭さも、アマネの圧倒的な美しさの前では全てが霞むのだろう。

「でも、映画はいいぞ。お前も観に行ってみろよ。感動するから」

デンジはわたしの自画自賛を無視して、悪気のなさそうな笑顔を向けてくる。

「ふくん、映画ねえ……」

寡欲なデンジがそこまで熱を上げるくらい、いいものなのだろう

か、映画というのは。

少し興味が湧いてきた。次の休みに観に行ってみようか。デンジに馬鹿にされたのが癪だったとかではない、決して。

適当に近所の映画館に足を運んだが、大きく『CINEMA』と書かれた看板以外、外装は他の商業ビルと大して変わらないと感じた。アクリル板越しのくぐもった声で「学生は割引になりますよ」と言ってきた店員を無視し、一般料金を払い中に入ると、中は少々独特な雰囲気醸し出していた。

薄暗いロビーの中、壁には様々な映画のポスターが貼られている。横には目が痛いほどのネオンサインが掲げられたカウンターがあり、食欲をそそられるキャラメルやバターの香りが漂ってくる。ポップコーン？食べたことないな。

顔を忙しなく動かしながら、他の客の後をついていくと、奥の通路の手前でまた別の店員が立っていた。促されるままチケットを渡すと、切り取り線に沿ってもぎり、片割れを再び返された。

場内に足を踏み入れると、眼前に巨大なスクリーンが出現した。

壁にはスピーカー、客席は微妙に傾斜になっていて、そこにえんじ色の椅子がずらりと並んでいる。

とりあえず上映開始時間の近い映画を選んだが、前知識も何もない。

こんなでも楽しめるのだろうか。少々不安になりながらも、人の入りの少ない場内の、端の席に座る。

他の座席も大して埋まらないまま開始時刻となり、ライトがゆっくりと絞られていく。

暗幕が開き、天井のライトの代わりにスクリーンが明るく照らし出された。

どういう仕組みになっているのかと視線を動かせば、頭上に光の筋

が伸びているに気がつく。

どうやら真後ろの壁から出ている光が、スクリーンに映像を映し出しているらしい。

揺らめく光の筋に埃が反射して煌めいているのが、美しかった。

しかし、映像を観なくては。視線を正面に戻す。

序盤の30分ほどは酷くつまらなく感じた。ところが中盤から、一体全体どういう事だろう。

面白い……………!

こんなエンターテイメントが世の中に存在していたとは!

あつという間の二時間弱だった。

「何観たんかって? あー……………あの日は朝から晩まで、上映してた映画全部観たよ」

つまり、一日中ほぼ座りっぱなしで映像を見続けるってこと?

あの時は、デンジの言葉に正気を疑ったが。なんだ、余裕で一日過ごせそうだ。

エンディングロールを見送った後、すぐに席を立ち、早足でチケットカウンターへ再度向かう。

一日に上映している全ての作品のチケットを買うと店員に告げると、驚いた顔をされた。

よくある事ではないのだろうか。

次の映画は、アクションか。

単調なストーリーだが、立派なスピーカーのお陰で迫力がある。うん、悪くない。

その次のシアターは、先程より狭かったが、こぢんまりしたスクリーンに、カラフルな色彩のアニメーションがしつくりきていた。

その次は、恋愛映画…。共感はないが、人間が思い描くハッピー

エンドはこんなに単純な結末なんだと思うと、微笑ましい。

次の映画では、ポップコーンを買ってみよう。……うん、食べながらだとあまり集中できないな。終わってから食べよう。

なんだ、どうした。面白いじゃないか。

人間は浅ましく下らない生き物だと見下していたが、映画を作り出したことに関しては素晴らしいと感嘆せざるを得ない。

夕方には全てを見終わってしまい、少し物足りなさを感じた。

「もう他の映画はやっていないの？」

カウンターへ行き、店員に訊ねる。

朝からいる女と同じだ。

「はい、今だともうお客さまがご覧になられた映画で全てですね……。ただ、近隣の映画館だとまた別の映画を上映していますよ」

「それはどこにあるの？」

「えつと…、今簡単に地図を描きますね。少々お待ちください」

店員は困惑しながらも、嫌な顔は僅かにも見せず、少し肉付きのよい柔らかな手で紙にペンを走らせた。

「この映画館は最近出来たばかりで全体的にきれいです。でも、映画がお好きならここがおすすですね。小さくて設備も古いんですけど、ニツチな映画を上映していることが多くて面白いです」

描いた地図に指をさしながら、随分と丁寧に教えてくれる。

一通り説明し終わると、店員がおずおずと顔を上げた。

「先程は、学生さんだと決めつけてしまつて…。不快な思いをさせてしまつて、申し訳ございませんでした」

すっかり忘れていて、言われた直後はつい頭を捻ってしまった。

チケットを買ったときのことを言っているのか。

「映画、楽しんできてください」

わたしが何と返そうか考えあぐねていると、店員はそう言つて、柔らかな笑顔を向けてきた。

わたしは自分が酷く幼い生き物に思えてきて赤面し、頭を一回下げるとすぐにその場を立ち去った。

地図に描いてある絵や文字は、先程の店員の手と似たような丸っこい形をしていた。

ハシゴでもしてみようかとも思ったが、すっかり集中力が途切れてしまい、結局あの店員がおすすめしていた映画館に行くことにした。

確かに先程のところよりもこぢんまりしていて、中も古めかしく、売店からはポップコーンのおいもしなければ、ネオンサインもない。端のほうにヒビが入りセロテープの跡がついたガラスケースの中に、少量のパンレットが置かれているだけだ。

店員も先程の人間と比べると無愛想。

ここのカウンターはアクリル板で隔たれていないのに、ぼそぼそとした声はほとんど聞き取れなかった。

人気のないしん、とした狭いロビーの一角に、休憩スペースのようなものがある。

その机の上に置かれたノートには、来館した客たちが描いたと思しき、上映してほしい映画のリクエストや映画の感想などがびっしり書き込まれていた。

この空間で、そのノートだけがやけに饒舌で賑やかだった。

狭い場内、小さいスクリーン、木製の舞台上の両端にスピーカー、ビロードの暗幕、規則的に並んだ椅子。

「体育館みたい」

映画を興味なさげに観ていたアマネが、急にぼそりとつぶやいた。やはり先程の映画館と比べるとしよばい。ただ、この古めかしさが妙な懐かしさを誘う。

劣化で表面がごわついたペロアの椅子に腰かけた。

この映画は、なんだか小難しい内容らしい。

待機中に、ロビーに置いてあるチラシを一通り手に取って見たが、ラックに一番余っていた。

人の入りも、今日観た中で一番少ない。

しかし、最後の最後でやっと詰まらない映画をお目にかかるのか、と逆に期待が高まる。

果たしてその映画は単調で、言ってる内容もわたしの中にある知識ではうまく理解できず、退屈な時間が続いた。

ぼんやりとストーリーを追っていたら、いつの間にかクライマックスを迎え、ラストでは二人の人間が抱きしめ合うシーンがあった。

その直後、スクリーンの映像がぐにやりと歪んだ。頬に何かが伝う感触。

指でそれに触れる。指が濡れた。

涙だ。話についていくのに集中していたから、触れるまで分からなかった。なんの前触れもなく、突然目から零れ落ちてきた。二粒、三粒、次々と零れてくる。

ずつつまらなさそうにしていたアマネが、ついに感動する映画に出会えたらしい。

やれやれ、と背凭れに背を預けると、

「どうして泣いているの？」

アマネはいつもと変わらない、からりとした声でわたしに聞いてきた。

労わるでもなく、狼狽えるでもない。教師に質問をする子供のよう
に、純真な疑問。

「……は？」

「君が泣くところなんて、はじめて見た。どうかした？」

アマネが泣いてるんじゃないのか。

わたしが泣いてるのか。

何故？

映画を観て。確かに映画という存在自体にはいたく感動した。だが、感涙するとはまた違う。

わたしは、このシーンの何が琴線に触れて、何故こんなにも止めどなく涙を流しているのだろう。

「おー、アマネ。昨日映画観に行ったんだろ？どうだった？」

翌日、出勤すると早速デンジに声を掛けられた。

「……すごく良かった」

「だろ？!てか、お前すごい目え腫れてない？」

人が素直に感想を言っているのに、触れてほしくない所を突いてくる。本当に空気が読めないな、こいつは。

「でも分かる、俺も泣いた」

「え、そうなの。どの映画？」

意外だ。デンジは表情が豊かではあるが、泣いてるところは見たことがない。

「最後に観たヤツなんだけどき…ラストで野郎同士で抱きしめ合う、くっさどうでもいいシーンなのに、なんか、泣いちゃって」

デンジが照れ臭そうに鼻頭をかく。

「……ボロい映画館でやってた映画？」

「そうそう、そこー！」

驚いた。わたしと同じ映画…同じシーンだ。

「マキマさんも、同じ所で泣いてたんだ」

開きかけた口を、気づかれぬように静かに結んだ。

「なんか、すげーよな……！それ以外の映画は全部退屈で、マキマさんもつまらないみたいなこと言ってる。でも、その映画のそのシーンで、二人とも泣いたんだ。すげー良いシーンだったって。二人で感動できただ」

ちらと盗み見たデンジの顔は、照れ臭そうな中に、嬉しさの隠しきれない表情をしていた。

「んで、アマネはどの映画で泣いたんだ？」

「……………その映画以外、全部」

「まじ?!……………なんかお前、趣味悪いのな」

折角空気を読んで、”デンジのマキマと二人だけの思い出”に水を差さないであげているのに、酷い言われ様だが、デンジの失言には目を瞑ってあげよう。

わたしもマキマと同じシーンで泣いたことを認めたくなくて、嘘を吐いた訳ではない、決して。

思惑

本部からは少し離れたところにある、あまり活気のない街。
退魔2課の任務に同行したら、ふいにデンジのにおいがした。
ここは彼のパトロールの管轄外。

こんなところで何をしているんだ？あの子。

少しばかり気になり、隊列から外れてにおいの跡を追う。

デンジのにおいが濃くなつていくのと共に、不快な臭いが重なつていく。

「なにこれ、焦げくさあ……………」

死肉が焼けるような、不快なおいだ。

やがて辿り着いたのは、今にも潰れそうな寂れた喫茶店。

窓からデンジの金髪頭の後頭部と、横に黒髪をひとつに括つた…デンジと同一年くらいの女の子が見える。

横顔しか分からないが、目鼻立ちがはつきりとしていて、日本人離れした綺麗な女の子だ。

対するデンジも横顔しか窺えないが…、表情を崩して、耳まで赤くしている。

「あらあら、デンジだったらやるじゃあん」

ただ、相手が悪すぎるけど。

あの女の子、かわいいけど不吉すぎるにおいがする。

おそらくサムライソードと同じような類いだが、それよりももっと歪な感じがする。

わたしが今出て行ったところで勝てるか分からない。一旦この事

は持ち帰ろう。

「そんなことする必要なくない？」

突如アマネが口にした言葉に、引き返そうとした足が止まる。

「は？アマネもわたしなら分かるでしょお。あいつがヤバそうな奴つてのは……」

「君こそ何言ってるの。ここで過ごして、デンジの心臓が色んな奴に狙われてるってことが分かったでしょ？やっぱりあの子はマキマにとってとりわけ貴重な存在なんだよ。今はまたとないチャンスじゃないの？多分あの女の子がデンジを殺すか、マキマから引き剥がしてくれる筈」

アマネが意気揚々と言う。

「それは…、その可能性はあるかもしれないけど」

わたしは一度デンジをマキマの手から奪うのに失敗しているし、わたしの力でそれを再度実行するのは不可能だろう。

わたしは躊躇った。

わたしはデンジと親しくなりすぎていた。

彼に危険が及ぶと分かっている、見殺しにするなんてできない。

「ねえ、本当にどうしちやったの。君の元来の目的を思い出しなよ。わたしの身体が欲しいんでしょ？」

アマネの冷たい声は、まるで脳みそに氷の杭を打ち込まれるようだ。

「君との契約が果たされないのは、きっとマキマがアキくんの心を支配してる所為だよ。そうとしか考えられない。わたしたちはまだ”本当のアキくん”に会えてないの」

目の前に、いる筈のないアマネの榛色をした視線が鋭くわたしを射抜いているような気分になる。

「なに、言ってるの」

「前にアキくんがわたしの胸ぐらを掴んだでしょう？よく考えたけど、アキくんがわたしにあんな態度をとるなんてありえない。あの女がアキくんをおかしくしてるんだよ、そうに違いない」

「それは、アキくんがわたしの事を魔人だと思ってるからでしょ。冷静に考えたらわかる……」

「冷静になんてなつてられないよ……!」

わたしの言葉を遮り、アマネが声を上げる。

感情的なアマネは、久々に見る気がした。

「わたし、こんなあやふやな状態でいつ消えるか分からないし、こんな危険な仕事で早川くんもいつ死ぬか分からない。それに前、早川くんはもつと強い悪魔と契約したって話、天使の悪魔としてたよね？彼は代償はあれだけって言ったけど、周りの話を聞く限りだと、強い悪魔と契約するのは碌なことにならないらしいじゃん」

わたしはアマネと感情を共有しているのに、分かっていたいなかった。

わたしに身体が乗っ取られても、負けなからと強気で能天気で。

何よりもアキくんに執着している。

しかし、彼女は実際は焦っていた。

「君も……わたしだから分かると思うけど、最近変だと思わない？」

「……変って、何が」

「前はわたし、自分の意識の輪郭がはっきりしている感覚があったの。でも一日ずつ……君との境目が分からなくなってくる。君が考えていることなのか、わたしが考えていることなのか分からなくなってくる。前までは君の考えている事感じている事が手に取るように分かったのに、最近は分からないときもある」

アマネの言うことは、わたしも少し前から実感していた。

アマネの癩癩が起きないのも、アマネの心が穏やかになってきていると思ひ込んでいた。思ひ込みたかった。

わたしはぬるま湯に浸かったような、平穏な日々が心地よかった。

「君は前にわたしが負けなからって言った言葉を認めてくれたけど……」

わたしもう、自我がなくなつたつていいよ。でもその代わり、本当の早川くんに会わせて。だって君は、わたしの幸せを思ってくれているんだよね？」

地底から這い出たような冷たい手が、脹脛を、腿を、背中を伝って這い上がっていくような感覚に身震いをする。

「わたし、君のこと”信じてる”から」

「おい特異課の！そこで何をしている!!」

男の怒声に意識がぐつと引き戻される。

今回共に行動している退魔課の男だ。隊列から外れたわたしを捜しにきたのだろう。

すると、アマネはいつものように意識をわたしの中に深く潜らせた。

「……はいはい、いま行きますよお〜つと」

お叱りはあるだろうが、正直助かった。

緊張で汗ばんだ身体が冷えていく。

喫茶店の窓越しのデンジを横目に、強張った足を無理やり動かしてその場を去った。

仕事を終え、いつもの屋上でぼーつとしていると、後ろからギヤイギヤイ騒ぎ声が聞こえてきた。

「チェンソー様！チェンソー様ア!!」

「だあから野郎がくつつくなつてんだろーが、気持ち悪い!!」

またデンジとパワーが戯れあつてるのかと思つたが、よく聞けばもう片方も男の声だ。

それに今、パワーは血抜きで不在だった筈だ。そうでなくとも、どうやら私はパワーに嫌われているようで、デンジがいても彼女はここに寄りつこうとはしないが。

声がする方に目をやれば、上裸で頭部が鮫のかぶりものをしたような形の男がデンジに付き纏っていた。

サメの魔人、名前はビームだったか。

「なんでデンジとビームう？珍しい組み合わせじゃん」

「しらねえよ！パワーがいねえから一時的にバディにさせられてんだよ……」

「ふうん。しかしまあ、今日も元気そうだねえ、ビーム」

わたしがビームに笑顔を向けると、無言で地面に潜っていつてしまった。

デンジ以外にはそっけないのね。

「コイツ、マジのマジでアホだぜ？アマネと同じ魔人なのにこうも差がでるもんかア？」

デンジはビームの愚痴を溢してはいるが、顔はいつもよりご機嫌だ。

そんな表情を見ると、先程アマネに言われた事が頭によぎり、胸が痛む。

それにしても、ビームは先程の女のおいに気づいてないのだろうか。

あの女がにおいを”隠す”のが上手いのか。そうなると結構やっかいだ……。

正直、こればかりはマキマが”気づいてくれれば”と思ってしまう。

「おーいアマネ？」

また思考を巡らしぼーっとしていたらしい、デンジの声で我に帰る。

「ごめん、聞いてなかった」

「相変わらず地味にひでえよなあ。まあいいや！アイツ、今日は肉

じやがつつつてたし、さつきと帰ろ」

のびをしながら立ち上がったデンジのシャツの裾を、思わず掴む。

「え、もしかしてご飯、アキくんが作ってるの……?」

「そうだけど」

なにそれ、聞いてない。

「うらやましい」

わたしとアマネの声が被った。

「……お、お前も食べに来る?」

聞かずとも、わたしの気迫に圧されたのかデンジがそう勧めてくる。

「いいの?!」

「あー、まあいまパワーいねえし、ちょうど一人分余ると思うから大丈夫っしょ」

デンジがいい加減に返す。

わたしの内側から、やったあ〜!!と声が湧き上がってくる。

そんなことでさっきの女の子のことやデンジへの罪悪感を払拭できてしまうんだから、わたしもビームに負けず劣らずの馬鹿なのかもしれない。

デンジに付いて辿り着いたマンションは、築年数はそれなりに経つてそうだが、共用部分は綺麗に掃除が行き届いていた。

駐輪場に子ども用自転車が複数置いてあることから、家族住まいの多い、割としっかりしたマンションのようだ。

真ん中くらいの階にアキくんたちの部屋はあり、デンジが慣れた手つきで鍵を開ける。

ドアを開けた瞬間、室内にこもっていた熱された空気が身体に纏わりついてきた。

でも不思議と嫌な感じはしない。

懐かしいような、でもちよつと違う。

アキくんのおいでもあるけど、やっぱり三人で住んでいるからか、もっと色んなにおいがする。

あたたかいにおいだ。

「いい部屋だね」

「まあ…俺もなんだかんだ気に入ってた。見晴らしいし、夜は結構静かだし」

玄関からも見える大きいベランダの窓からは、夕陽が室内に差し込んでいた。

惹き寄せられるように、わたしは窓を開け、ベランダに出た。

今度はこもった空気をかき混ぜるように外気が流れ込んでくる。

本部とはそう離れてはいない立地だが、ある程度住宅街に入ってしまったところにあるここは、デンジのいう通り辺りは静かだ。

周りの家よりも頭ひとつ分高く、わりと遠くまで見渡せる。

東京の空気は汚いとかよく聞くが、わたしはあまりそうは思わない。

確かに、人混みの中での酸素が足りないような感覚や、車が吐く排気ガスの臭いは嫌いだ。

しかし、このベランダだったりいつも行く屋上だったり、そういったところの空気は割と好きだ。

都会の空気の上澄みを吸っているようで、なかなか悪くない。

北海道の空気は確かに綺麗だったのかもしれないけど、アマネの家の中に蔓延る空気や、吸い込むと肺が痛くなるくらいの冬の冷たい空気が良いかと言われれば、そうでもない気がする。

いや、アマネが故郷にいい思い出が少ないからそう思うだけなのか。

「アイツまだ帰ってきてねえや。そーいや最近帰ってくんの遅いんだよなあ」

「なんで？」

「もうじき銃の悪魔討伐遠征があるらしいからよ、なんかいやにはりきつちやって」

デンジがキッチン上の戸棚を探り、菓子をいくつか出してきた。

「まあ、菓子でも食いながらのんびりしようぜ」

そう言いながら、ローテーブルの前に敷かれた座布団に腰掛けて、流れるような動作でテレビを点ける。

「ご飯食べなくなるよ、なんて心配はデンジに必要なことは分かってきつた事だから口に出さない。」

「あ、そういえば前にパワーとゲーム買ったんだっ！アイツ馬鹿だしすぐズルするから全然面白くなかったんだけど。ちよつと待ってな！」

言いながら、デンジは奥の部屋に消えて行った。

急に室内が静かになって、テレビの音量を上げてみる。

バラエティ番組を観るのは初めてだ。

わたしに設けられている自室にテレビはないし、共用スペースに置いてあるのは常にニュースが流れている。

画面の中で中心に立つ男が「らしい」事を言うと、態とらしい観客の笑い声がどつと沸いた。

「ほら見ろよー！トランプとジエンガとくく…UNOとかあるぜ！」

ほどなくして戻ってきたデンジは両手に玩具を抱え、肘でテーブルの上の菓子をどかした後に雑にそれらを置いた。

懐かしい気もするが、実際アマネはこんなゲームをやる相手もいなかったから馴染みはない。

「UNOって二人でやるものだっけえ？」

「え、一応ここに」2くくって書いてあるからできんじやねえの？て

か説明書漢字多すぎて読めねえ」

デンジが見せてきた説明書には、小学生低学年で習うような簡単な漢字には、ふりがながふられていなかった。

「……デンジって今何歳だっけ？これ読めないってやばくない？」

「しようがねえだろー、俺学校行ったことねえし。ギムキョーイク？すらも習ってねえよ」

デンジはUNOの説明書を読むのを諦め、ジェンガの箱を開ける。ひっくり返しながら口をテーブルに押し当て、慎重そうに箱を抜くと、カラフルなブロックの塔が完成した。

「……そういえばデンジがデビルハンターになった理由とか聞いたことなかったね」

勝手に先にブロックを引き抜かれ、選択権を与えられることなく自動的に後攻になるが、最早何も言うまい。

トランプは幼い頃レクか何かでやった覚えがうっすらあるが、ジェンガは初めてだ。

「俺……俺は死んだ親父の代わりに借金返済する為に内臓売ったりポチタと……あ、ポチタってのは悪魔で、昔から一緒に暮らしてて……今は俺の心臓になってくれてるんだけど。こいつとデビルハンターとして金稼いで。でも金稼いでも返済で生活費は消えてくし、勿論学校も行けねえし、すっげー貧乏な暮らししてた。でもなんやかんやあってマキマさんが俺のこと拾ってくれて、公安で働くことになって、こうやってぐーたら菓子食いながらゲームができる生活が送れるって訳だなく」

デンジがまたブロックを引き抜き、慎重に上に重ねる。

デンジはなんてことないように話していたが、わたしは内心驚いていた。

いつも呑気でへらへらしていて、何も考えてなさそうなデンジが、そんな過酷な日常を送っていたとは想像もしていなかった。

そしてわたし以上に驚き、同情していたのはアマネだ。

感覚が鈍いが、そんな気がした。

「ちよつと前までじゃ考えられなかった暮らしだ。マキマさんに感謝だなあ」

デンジは次のブロックを引き抜くと、まるでそれを宝石のように夕陽にあてる。

デンジは本当に宝物を得た無垢な少年のようで、マキマに何の疑惑も持たない好意を向けている。

そんな彼をみていると、マキマに対するどろりとした敵意を、澄んだ水で薄められそうになる。

わたしは咄嗟に思考を止めた。

「そうだねえ、前の暮らしのままじゃ、こんな美少女と二人っきりで遊べるっていう機会なんてなかっただろうねえ。マキマに感謝だねえ」

わたしがいい位置のブロックをとった所為で、塔がふらつく。

「あ？あーそうだなー」

デンジは手を震わせながら、どうブロックを引き抜こうか試行錯誤しており、わたしの言葉には生返事だ。

この超絶美少女を目の前にして、随分と余裕そうじゃないか。

ブロックとブロックの隙間から、別に好みでも何でもないデンジの顔を見つめてみる。

「……………あんだよ」

しかし、視線に気づいたデンジは訝しむだけだ。

「いんや？あんなにうぶだったデンジが、随分こなれちゃったものだなど思ってる」

「うるせーな。二度同じヤツに騙されるほどデンジ君は馬鹿じゃありませんえーん」

態とくつつくようにデンジの横に移動するが、身体を仰け反らせるようにして避けられた。

そのときデンジの肘がテーブルに当たり、不安定になっていた塔が豪快な音を立てて崩れた。

「ああああ!!」

「あくあ、これから面白くなるところだったのに」

呆れ顔でデンジを見やれば何か言い返してくると思ったが、急に珍妙な面持ちになり、

「まあいいぜ、俺には心があるからな…。こんな事などでは腹を立てない、美しく優しい心が……」

などと言い出した。

マキマに感謝だなんだと言っておきながら完全に浮かれ切っているなど思いつつ、トランプに手を伸ばす。

「デンジ、最近すごい機嫌いいよねえ」

トランプに触る事自体が大分久しぶりな気がする。慣れない手つきでシャッフルする。

「ん〜…そうかあ?」

「うん、青春を謳歌してますって顔してる」

すると、デンジは二秒ほど固まったあと、顔に花を咲かせるように、とそんな爽やかなものではなかった。なんだかいやらしい笑顔を浮かべた。

「青春……。確かにそうかもなア…青春、しちまったかもしれないな………!」

青春という言葉を噛み締めるようにデンジは何度も頷く。

わたしがトランプを仕分ける様子を見て「俺ババ抜きなら得意。この菓子ぜんぶ賭けてもいいぜ」と言ってきた。

やっぱりデンジはあの女の子に惚れているのか。

言うべきか、……放っておくか。

アマネの邪魔は入らない。

……なら、言うべきだ。

「…………いやあ、わたしは嬉しいよお。マキマなんかじゃなくて普通の女の子に恋してくれるようになって」

「え、なんでそこまで知ってるの」

不信任を隠さないデンジの目を見つめ、テーブルに頬杖をつく。

「でもねその女、やめといた方がいいよ」

そう言おうと口を開きかけた。

ガチャリ、とドアが開く音がした。

アキくんだ。

タイミングが良かったのか悪かったのか。

わたしの考えは読める筈だ。なのに、アマネは尚黙っている。

それが故意的なのか、出てこれないのか。

「アキくんおかえり」

「おい、なんでお前が家にいる」

いつものように悪態を吐いてくるが、声に元気がない。随分とお疲れのようだ。

「えー、だってデンジが毎日アキくんの手料理食べてるっていうからさあ。わたしも食べたいからついてきちゃった」

わたしの言葉にアキくんはため息を吐き、デンジを睨む。

「今日は疲れてる……。悪いが適当にすませてくれ」

「おいおい！そりゃないぜお前〜!!」

「そうだよお、わたしめちやくちや楽しみにしてたのに〜!」

わたしたちのブーイングを物ともせず、アキくんはリビング横の引き戸を開け、中に閉じこもってしまった。

デンジが弱すぎていつの間にか勝っていたババ抜きで得た戦利品を食べながら、ぴったりと閉められた引き戸を見つめる。

銃の悪魔討伐か……。自分の事ばかりで大体のデビルハンターの最終目的がそこにあることをすっかり忘れていた。

わたしは銃の悪魔の肉片探しに尽力していなかったし、肉片すら目にした事ないくらいだ。そんなに事が進んでいたとは。

アキくんは、何故そんなにも復讐心に駆られているんだろう。

だって彼の両親は、アキくんのこと放っておくような人だったんでしよう。

「人間はみんな大層な目標みたいなのがないと生きていけないものなのかしらね〜」

「なー！俺もそれ思ってた」

デンジはテーブルの上に散らばったままのブロックを手で弄びながら、わたしの言葉に同意した。

「デンジはなんでこの生活、頑張ってるの？」

頑張るも何も、わたしもデンジも文字通りここに永久就職だから、目標使命やる気云々があるうがなからうが、働き続けなきゃいけないのだが。

「え〜それはア、ウマイ飯食えるし布団で寝れるし……」

デンジはそこまで言うとう首を捻り、目を瞑り、数秒の間唸った。

「……………あと、今の俺ならセツ…………、彼女が出来るかもしれないしな！」

「ふ、」

わたしは大声をあげて笑った。

なんて馬鹿で、単純で。でもそんな言葉はごちゃごちゃした今のわたしの頭の中を痛快に笑い飛ばさせてくれる。

やっぱりわたしは、デンジを見殺しにできなさそうだ。

それから空腹にだらだらと菓子を入れ、テレビをぼーっと眺め、飽きたらUNOの説明書を読みながらやってみて、思った通り盛り上がりず。

「なーんか根がはるなあ、こーこー」

わたしは床に大の字に寝転がりながらぼやく。

もう夕陽は遠くのビルに隠れ、暗くなりはじめていた。

「施設のほうはどーなの？」

「えー、そりゃまあ、ここと比べたら最悪だよお。狭いし寒いし、窓もないし」

それでも今まではさほど気にはならなかったのだが。

「お前も先生んとこ住めば？」

「あんなクソジジイと一緒に住んでられるか」

マキマから提案されたことはあるが、わたしは勿論、岸边も拒否した。

「あー、帰るのめんどくさ……」

「いんじゃないね、帰んなくても。俺らの家だし…、なんとかかなんたら……」

いい加減なことを言った後、デンジもテーブルの反対側に寝転がり、大欠伸をした。

欠伸はなんでうつるんだろう。

わたしも小さく欠伸をすると、それが眠気を誘って、徐々に意識が心地よく揺らいで消えていった。

瞬きをすると、部屋が真っ暗だった。

意識がぼんやりとする中、デンジのいびきが煩い。

体感的に、まだそんなに時間は経ってないだろう。

テーブルの上が菓子やら玩具やらで散らかったままだ。

「お菓子は残したらすぐ袋の口を閉めないで湿気るよ。こっちはお皿に移してラップかけて」

「自分で使ったのなら、きちんと自分で片付けなさい。それができな

いなら、もうこれは使わせないからな」

厳しい言葉。でもそこに冷たさはない。
両親じゃない、少ししやがれた優しい声。

そうだ、アマネの祖父母の声だ。

アマネのことをあたたかく、時に厳しく育ててくれた二人。

キッチンの蛍光灯をつけ、言われたことを思い出しながら後片付けをしていく。

すぐに探し当てることができたラップを見て、キッチンの収納とは大体どこの家も似ている作りなのだなと思った。

引き戸の奥から小さく物音がした。

すると、いつもきちつと一つに纏めた髪をぼさぼさにしたアキくんが、まだ眠そうにしながらのそりと出てきた。

制服を着たままで寝ていたのか、シャツやスラックスに皺がついている。

キッチンに立つわたしを見て、目を丸くした。

「意外だ」

「失礼なあ、自分で出した物くらい片付けるよ」

アキくんは、蛇口を捻りコップに水を入れ、それを一気に飲んだ後、わたしの横を通り抜け冷蔵庫を開ける。

中には野菜やら調味料やらが入っていて、作り置きはないようだ。戸棚を漁ったときに見たが、レトルトや即席麺などはなかった。

毎度作ってるのだろうか、と目の前の背中を感心しながら見てしま

う。

「…………お前も食べるか？」

「やったあ」

催促の視線を送ったと思われたようだが、有り難く乗っかる。

白飯は？と聞かれたので食べるかと答える。

そんなやり取りが懐かしさを誘う。

アキくんとこの幼い頃の思い出ではなく、祖父母と過ごした頃の懐かしさだ。

分かった。この家に入った時の懐かしいと感じたのは、アキくんのおいにしてしてじゃなく、家族のおいだ。

アマネの中にもそういう記憶があつたんだな。

アキくんへの執着や、両親への恐怖、嫌悪ばかりが脳を支配してて、何故か平凡で平和な日常は隅においやられていた。

「手伝おうか」

ひとつ、ふたつ記憶が浮かび上がり、その糸を手繰ればするすると様々な記憶を連れてきてくれる。

わたしは自然と髪を一つに括り、アキくんの横に立った。

「……ほんとに意外だな」

アキくんもボサボサになっていた髪を括り直しながら、またそんな事を言う。

流して手を洗いながら、ふふと得意気に笑ってはみるものの、わたし自身、自分の発言や行動が意外だった。

「料理もね、教えてもらった記憶があるんだ。だからちよつとならできるよ」

包丁を右手で持ち、まな板の上に乗った野菜を押さえる手は猫の手。

祖母から教えてもらったことだ。

知らない事なのに、やったこともないのに、まるで身体に馴染んでいるように手が動き、均等に野菜が切られていく。

最初の方は、横からはらはらと落ち着きなさそうな視線を感じたが、わたしが二種類の野菜を切り終えボウルに入れる頃、漸くアキくんは自分の作業に集中しだした。

教えてもらったことはそんなに多くなかった気がする。
でも、野菜を切ったり米を研いだり、湯が沸騰しないように見守ったり。

そういうことをひとつずつ教えてもらって、ひとつずつ任せてもらえて、最後には必ず「ありがとう」と笑顔を向けられた。

嬉しかったな、懐かしいな。

「帰りたいな……」

アマネが小さくそうこぼした気がした。

その瞬間、指先に小さな痛みが走った。

そこに目をやると、斜めに線が入っていて、じわじわと血が湧き上がってくる。

「どうした」

米を研いでいたアキくんが手を止めてわたしの方を見る。

「やっちゃった。なんだかんだ久しぶりだったからねえ」

ぼーっとしてたら包丁で切った、なんて言ったら怒られそうだ。

アキくんにとって”茅森アマネの身体”は大切だから。

思ったより傷が深かったらしく、血はどんどん溢れ出し、指を伝い水掻きに溜まっていく。

なんとなくその様子を数秒みつめていたら、アキくんの目もわたしと同じように流れ行く血の行方を追っていた。

いつもとは様子の違う彼に、ふいに不安にかられる。

「アキくん？」

わたしが彼の名前を呼んだとき。

”入れ替わった”感覚がした。

顔を上げたアキくと目が合う。

初めは驚き、その後を追うように懐古、そして僅かに期待の色が滲んだ瞳。

アマネの口元が、嗜虐的な笑みを描く。

血が溢れ出る指で、さらりとしたこめかみから頬まで撫でる。顎の近くにいくと、僅かに伸びた髭の感触がした。

お呪いのように、なぞったところに赤い線が引かれていく。

そのまま形の良い上唇をなぞり、固い前歯に当たる。

アキくんは抵抗せず、固まったままアマネの目から視線を外さない。いや、外せないのかもしれない。

そのまま割り入るように指を啞内に入れる。

頬の粘膜の柔らかさやざらりとした舌の感触。

耳鳴りがするぐらい静かだった空間に、徐々にわたしの荒くなつていく呼吸と、アキくんの苦しげな呼吸が、先程まで穏やかだった筈の家の中の空気を掻き乱し、鼓動が耳鳴りの音に覆いかぶさるよう大きく煩く鳴り響いた。

――リリリリン……

突如、部屋の電話が鳴った。

呼吸の音が、鼓動が、耳鳴りがそれぞれの後を追うように消えていく。

わたしの中の、凜猛な生き物のようなものが風船の空気が抜けていくように、萎んでいった。

意識が戻されれば何か忘れてるような気がして、真っ暗になった窓の外を見て、その後部屋に置いてある時計の針が指す数字を見て

……、一気に血の気が引いた。

「やばい……やばいやばいやばいー！」

突如声を上げたわたしに、漸く我に返ったように肩を震わしたアキくんは、急かすように鳴り続ける電話の受話器をとりに行った。

相手は予想がつく。

「……おい、アマネ。岸辺隊長からだ」

「やっぱり……！外出許可申請の時間過ぎてる!!」

時計が示す時間は、既に日付が変わっていた。

先程そんな寝ていたとは。遅めの時間に申請していたからと、油断していた。

こんなに熟睡するのは初めてのこともかもしれない。今までにないくらい気が緩んでいたのだ。おそろしや、早川家。

『あと5分以内に施設に帰ってこなければお前を3回ほど殺す、そう伝えておいてくれ』

「だそうだ」

受話器のスピーカーをこちらに向けられ、聞こえてきたのは死刑宣告。

これはわたしが戻らない所為で残業させられ、かなり不機嫌な声だ。

「5分以内や無理だってえ!!走るの嫌いなのにい！」

床に置いて皺の寄ったジャケットを羽織り、同じく床に放ったネクタイを拾いポケットに突っ込み、脱力し切った末何故か脱ぎ捨てたハイソックスを急いで履く。

途中でデンジの足を踏んでしまったが、「う」とくぐもった声をひとつもらしただけで起きる気配は微塵もなさそうだ。

「はあくぐ飯食べれなかったじゃん……」

蛍光灯に照らされたキッチンに置かれたままの切りかけの野菜と、まだスイッチすら入れられていない炊飯器に後ろ髪を引かれるが、そんなことを考えている場合じゃない。

「せいじゃー！お邪魔しましたあ〜！」

「ちよつ、おい！ちよつと待て！」

ローファを無理やり踵に嵌めようと足踏みしながら玄関口で叫ぶと、慌てたようにアキくんが後を追いかけて、わたしの腕を掴んだ。

「指……！怪我、絆創膏ぐらいして行けよ」

本当に心配してくれている顔をしている。

いい子だな、アキくんは。本当に。

「もう治ってるよ」

わたしは左手を見せる。

完全に塞がった傷口。わたしの手首まで伸びた血の筋と、アキくんの顔にこびりついた血の痕だけが、嘘のような先程の出来事を物語っている。

「言ったでしょお。わたし、魔人なんだって」

あんなことをされても、こんなわたしを見ても、なお”茅森アマネの身体”の心配をする優しい彼に、分からせるように言った。

それだけじゃない。いや、もつとそれ以上に、自分に分からせるように言った。

返す言葉を待つ前に、逃げるように玄関のドアを閉めた。

ああ、走らなきゃ、全力疾走。そのぐらいが丁度いいか。

頬に当たる風が熱を冷ましてくれるかもしれない。いや、夏の夜の

空気は纏わりつくだけでただただ鬱陶しいだけだ。

わたしが、アマネの指がアキくんの唾内にさし入れたとき。
アマネがひどく高揚したのが分かった。

対して、わたしはその内臓のような感触に悪寒すらした。

悪魔はわたしの方なのに、可笑しな話だ、本当に。

「可笑しな話だよ。ねえ、アマネ……」

息が切れて、立ち止まる。

人気のない道を照らすのは自動販売機の強い光。

ここにいるのはわたしと、わたしからのびる影だけ。

「君は何がしたいの、一体……」

アマネから返事はない。

わたしが口に出した言葉は独り言にしかならかった。

「お疲れ様。 昨晩は岸边さんにこっぴどく怒られたみたいだね」

翌日。朝っぱらから一番嫌いなヤツの前にいる。

しかし、今日はこの女に呼び出されて嫌々執務室に来たわけではない。

「で、話って何？アマネちゃんから話したいことがあるだなんて、珍しいね」

先程から書類の整理をしているようだが、わたしが口を開くのを躊躇っている様子を見ると、その手を止めてわたしの顔をじっと見てきた。

急かすようなことは言わないが、無言の圧力がわたしを襲う。

「……最近のデンジ、なんだけど」

この期に及んで言い淀む。

でも、アマネが横槍を入れてくる様子はない。

意を決して続ける。

「仲良さそうにしてる女の子がいるんだけど……人間じゃ、ない。サムライソードと同じ類だと思う。火薬のような……焦げたにおいがする。デンジもビームも多分気づいてない。分からないけど、銃の悪魔が関わってるかもね」

視線をあちらこちらに彷徨かせながら、吐露した。

マキマはいつものように微笑みながら傾聴し、話が終わったことを察すると腕を組み直した。

「報告ありがとうございます。でも、どうしたの？」

急に従順になって、とでも言いだけだ。

「別に……、あんたに従う意思があつて報告した訳じゃないから。デンジが心配なだけだし、正直わたしだけで対処できる問題だと思えないから言った。それだけ」

マキマが顔を傾ける。

「アマネちゃんは、早川君じゃなくてデンジ君のことが好きになっちゃったの？」

「んな訳ないでしょ、あんた馬鹿なの？」

「じゃあ質問を変えるね。君はチェンソーの悪魔のことが気に入ったの？それとも、人間のデンジ君のことが気に入ったの？」

妙な質問だ。

反して、マキマはふざけているようには見えない。

「わたしは……、デンジは似たような境遇で親近感は覚えるけど、別に悪魔じゃなかったとしてもそう感じるだろうし。……だから、デンジがただの人間だったとしても、接し方は変わらないと思う」

マキマは数秒わたしの顔を見つめたが、ふいに目を伏せた。

「そう。…………それは残念」

「え？なに」

声が小さすぎて聞き取れなかった。

「アマネちゃんがデンジ君と仲良くしてくれているみたいで、よかつたなって。前みたいいな事になるのは御免だからね」

ここに来たばかりの頃にマキマに身体を真つ二つにされたことを思い出し、思わず後退りをする。

「それで、折角報告してくれたところで悪いんだけど……。彼女の存在はもう把握してるんだよね」

「はあ？！うそでしょお」

今までのわたしが頭を悩ませた時間はなんだったんだ。思わぬ取り越し苦労に肩の力が抜ける。

そういえばこの女、前に鼠を使役してた。

今回もそのようにして情報を掴んだのだろう。

「彼女はボム。ソ連からの刺客だね。アマネちゃんの予想通り、銃の悪魔と繋がっている」

「じゃあなんでさっさと殺さないの？」

マキマの考えが読めない。

わたしの質問に、マキマは表情を変えずに続ける。

「デンジ君と仲良くしてほしいから」

「…………は？仲間にするってことお？それは無理があるんじゃないや…………」
頓珍漢なことを言っているのに、悪寒がする。

読めないが、よからぬ事を考えているということだけは分かる。

「…………あんだ、何考えてるの？」

マキマの表情は、崩れることはない。

常に柔らかい笑みをたたえている。

「アマネちゃんは今回の事に”何も手出ししないで”。デンジ君なら
きっと大丈夫。心配いらないよ」

蛙の子は ※倫理的観点で、一部描写が不快に思われる方がいらつしやるかもしれませんが。ご了承の上お読みください。

最近のアキくんは拍車をかけて忙しそうで、あの夜以来、同じ職場に勤めているというのに驚くほど顔を合わせない。

デンジも例のボムガールのいる喫茶店で昼食を済ませているようで、屋上に来なくなった。

たまに屋上に来ていた天使も勿論アキくんと一緒に行動しているからいる訳もなく、周りが慌ただしく動いているのにわたしだけ暇を持って余しているようだ。

「お前もおそらくだが、銃の悪魔討伐遠征に参加することになってい
る」

「ええ〜〜……」

至極当然のように言われた言葉に肩を落とす。

いつもは職場でしか会わない岸边だが、今日はこの男の家に連れてこられている。

何故なら、先日外出申請の時間を過ぎたペナルティとして、休日にも関わらず家事を押し付けられているのだ。

祖父母のことを思い出し、わたしがこういった家事が苦手ではなく寧ろ好んでやれる方だと気がついた。

だからといって、特訓を追加されることに比べたら幾分もまじだが、何故わたしがこの男の身辺の世話をしなくてはならないのかという不服な気持ちに変わりはないが。

「銃の悪魔って、最も恐れられている悪魔なんですよ？わたし、普通に

嫌なんだけど…」

「人間は討伐実績次第にはなるだろうが、人外のお前らは有無を言わずず連れてかれるだろうな」

「ほんと畜生みたいな扱いだよねえ」

ベランダに干してある洗濯物を回収しながら言う。

隊長クラスになればどれだけの家に住んでいるのかと思っただが、実際は寂れた住宅地の奥にあるボロアパートのワンルームだった。

長く住んでいるのか、壁や天井がヤニで黄ばんでいる。

置いてある物も必要最低限といった感じで、テレビすらない。

なんと寂しい中年男だろうと鼻で笑ってやったが、岸边は気にせず煙草を吸っている。

「遠征はまだ先の話だが…、その前に明日少し遠出の任務が入った。お前にも同行してもらおう」

「遠出？」

洗濯籠を持って部屋の中に入り、畳に座って膝の上でタオルを畳んでいく。

家の中には一人がけのソファ一つしかなく、わたしは床に座るしかない。

今日はデニムパンツを履いていてよかった。傷んだ畳はささくれていて、スカートだったら素肌に当たって座っていられなかっただろう。

「栃木で大型の悪魔による被害が拡大しているらしい。県内の民間では手に負えなかったそうだ」

「そっちの方って埼玉支部の管轄みたいなこと聞いたんだけど。なんでわたしたちが行かないといけないわけ？」

「最近ではデンジを狙い、都内に強力な悪魔が集まる傾向にある。腕が立つ奴は本部に集められる所為で、支部が手薄な状態だ。下手な奴を行かせて犬死にさせるより、俺が行った方が早い」

「なにそれ、もっと人員強化した方がいいんじゃないの？」

「鍛える前にほとんど死ぬからな」

その言葉でわたしの口から文句は途絶えた。

特異課にいると感覚が鈍るが、大半のデビルハンターである人間は悪魔と契約してるとはいえ、打ちどころや刺しどころが悪ければ一発で死ぬような脆い生き物だ。

わたしは悪魔や人間関係なく、弱い物は淘汰され、それが普通なのだと考えて生きていたが、最近はどうも人間側に肩入れしてしまう。マキマから釘を刺されたとはいえ、ボムガールの件であり東京から離れたくはないが、

岸边に来いと言われれば、平のデビルハンターよりもよっぽど立場が弱いわたしに拒否権などない。

車に乗って二時間程。

到着したのは初めて足を踏み入れる土地、栃木。

とは言っても、わたしは北海道と東京という極端な場所にしか訪れたことがないが。

高速道路を走る最中、連なる山々やぽつぽつと点在する民家を見て、田舎の風景とはどこも似たようなものなのだなと思っただが、目的地に近づくと、ホテルや旅館が立ち並び景色へと変わった。

「普段なら賑やかそうなところだねえ」

しかし、先程見かけた規制線から、ここも今は立ち入り禁止区域にされているようだ。

夏休みの人も多く、かき入れどきだろうに。

「現場はもう少し先だ」

そこから数分も経たず、コンクリートで舗装されていない道に入り、車がかたがたと揺れ始める。

窓を開けて顔を乗り出すと、道路の横は崖になっていて、崖下には川が流れていた。

景色も、煌びやかな装飾の施された宿泊施設とは一変、今にも崩れ落ちそうな廃ホテルが溪谷沿いにひしめいている不気味なものへと

変わった。

岸辺が車を停めたのは、廃墟群の中でも一際大きいホテルの前だ。外壁は黒ずみ、ところどころ鉄骨がみえている箇所がある。火事に遭ったのだろうか。

「こういった人が寄り付かない、薄気味悪いところは悪魔にとって恰好の巣になる」

言いながら、岸辺は臆することなくホテルの中に踏み入る。

ひと昔前は、こういった場所が心霊スポットと言われて騒がれていたんだろうなと思いつつ、わたしも後に続く。

幽霊よりも、今にも建物が崩れないかが心配だ。

ロビーを抜けると、客室のある階へと繋がる螺旋階段が見える。

依然として悪魔の姿は見えず、気配も強くない。

「建物の劣化が激しい。下手に動き回らない方がいいな。……アマネ」

「はいはい、言われなくても分かってる」

一度拓けたロビーに戻る。そのほうが闘いやすい。

「おいで」

吹き抜けになっているロビーに、わたしの声が響く。

すぐ横に流れる川の轟音で徐々に掻き消されていく声に反し、先程まで微かにしか感じ取れなかったにおいが、急に色濃くなった。

「……岸辺、くるよ」

岸辺は返事の代わりに足を止める。

エレベーターがあったであろう空洞から、小さい影が動いたのが見えた。

岸辺がナイフを投げる。

それは見事に影の頭部と思しき場所に命中した。

「ア……………アア……………」

それは呻き声を上げながら、よろよろとこちらに歩を進め、やがて暗がりから姿を現した。

「……………赤ん坊？」

現れたのは、漸く立って歩けるようになったぐらいの年頃の、小さな赤子だった。

額に刺さったナイフからは血が溢れ出し、やがて地面に倒れた。

「……………チツ、胸糞悪イ」

「結構数いるよ、これ」

しかし、一体一体に強い力は感じない。

人の形に近いっていうことは…、人間に友好的な悪魔ということか？

「余計なことは考えるなよ。犠牲者数からして友好的とは言えない。俺らがやる事はひとつだ」

「そんなこと分かってるツ……………よー」

上から降ってきた赤子の悪魔を蹴飛ばす。

壁に当たってぐしやり、と音がした。

悪魔のわたしでもあまり良い気分はしない。

殺してもまたどこからともなく湧いてくる。

はいはいしてくるもの、おぼつかない足どりで向かってくるもの、ぐずってその場から動かないもの、笑顔でこちらに駆け寄って来るもの。

それらが無慈悲に殺していく。

こんなのを人間にさせたら気が触れるだろう。

岸辺を盗み見るが、いつもと様子は変わらない。

しかし、内心どう思っているか……。

「はあ、きりがない……！」

頬に飛び散った血を拭うと、どこかから助けを呼ぶ声が微かに聞こえた。

「岸边！人間の声!!」

「行方不明の民間の奴か……？方向は」

「こっち！」

先程の螺旋階段の方へ向かう。

今にも崩れそうな階段を、なるべく着地数を減らしながら昇り、客室のあるフロアへ行く。

下を見ると、赤子の悪魔が階段を昇る事ができず立ち往生していた。

こちらに向けて手を上げて、助けを求めているように見える。

本当にただの赤子みたいだ。

「た……けて、誰か……！」

声が近くなってきた。

廊下の方へ歩を進める。

声の在処はひとつの客室からだった。

わたしは顎をしゃくり、岸边に示す。

岸边は頷くと数歩下がり、勢いをつけてドアを蹴飛ばした。

わー、物凄い馬鹿力。と今更感心することはない。

果たして、中には人がいたが。

「たひゆけて……、あすけて……！」

声の主は、無数の赤子の悪魔に囲われ、身体中を喰われていた。

「痛い……いひやい……！」

わたしたちに気がついた一匹の赤子がこちらを向く。

「ああぶ、だあ……………」

血がべつとりとついた口を横に開き、あどけない笑顔に向けてきた。

ぞつと背筋が粟立つ。

次の瞬間、横から風を切るような音が聞こえ、その赤子の首にナイフが刺さった。

赤子の笑顔は消え、恨むように空虚を睨むと静かに倒れた。

「アマネ、さっさと動け」

岸边が男に群がる赤子を蹴り飛ばしながら、わたしを冷たく睨む。

わたしは奥歯を噛み締め、先程の赤子の首に刺さったナイフを引き抜き、群がる奴らの首を掻き切っては投げ捨てていく。

食事に夢中な赤子たちは、わたしたちを一切気にしていない。

一方的な虐殺に思えるこの行為が、胃の中をむかむかとさせる。

貼りついていた全ての悪魔を殺したが、男の身体は至る所が食い散らかされ、脚は骨が剥き出しになり、腹部も大きく抉れていた。

そんな状態だが意識は微かにあるようで、苦しげな呼吸を繰り返している。

「…………助かるかな？」

「どうだろうな」

後ろからガチャ、とドアノブが回される音がした。

悪魔の気配はなかった。

岸边もわたしも咄嗟に構える。

開いたのはユニットバスの扉。

中からは、派手な恰好の女が出てきた。脚を怪我している。

「あ……………け、ケン君……………」

脚を引き摺りながら、倒れている男に向かう。

「ごめ……あたし、一人だけ、隠れて……こんな……」

「おい、あんたら民間のデビルハンター……、ではなさそうだな」

民間のデビルハンターは私服で一般人と見た目は変わらないが、彼らは武器を持っていないし、雰囲気からして違って見えた。

「何でこんな所にいる。ここは今、立入禁止区域だ。規制線が見えなかったのか」

「あ、あたしたち……、肝試しに来てて……四人で。こ、こんなことになるなんて……ごめんなさい、ごめんなさい」

女は頭を垂れながら泣き出した。

このご時世に肝試しなんてやりたがる馬鹿がまだいたとは。

呆れて声も出ない。

「他の二人は」

「先に捕まって……悪魔たちに連れ去られた……」

岸辺の質問に、女はしゃくりあげながらも答える。

どうしたものと頭を捻らせていると、入り口のドアが、小さく叩かれる音がした。

「あ……ああ、ぶう」

「だあ、あぶ」

「ええええん……」

先程の赤子の悪魔が集まってきたようだ。

「あの……あたしがこんなお願いするの間違ってるのかもだけど、あとの二人のこと、助けてください……！一人が、あたしの彼氏……彼氏なんです！こんなお別れなんて、絶対嫌……。お願いします、お願いします……！」

女は泣きながら、切に懇願してくる。

自業自得だろうと一蹴してやりたいところだが……。

岸辺をちらと見る。そんな風には言えないよな。

あまり考える時間はない、今出せる答えはひとつだけだ。

「岸辺、この二人を連れてここから出て。わたしは残って行方不明者を捜す」

「え……」

女が、期待に顔を上げる。

アイコンやらマスカラが取れて、目の下が真っ黒だ。

「車、あんたしか運転できないでしょ。さつき通った観光地まで下りたら電話が使える所もある筈。この人間の救護と応援を呼んで」

「……報告されている被害状況からして、ここに居るのはこの赤ん坊の悪魔だけじゃない。おそらく強力な悪魔が潜んでいるぞ」

「なに、心配してくれてるの〜?」

岸辺の表情はいつもと変わらない。

ちえ、と顔を逸らす。

「生憎、あんたと違ってわたしは死ぬことがないからねえ。それにここなら”餌”が腐るほどある。血が足りなくなることはないでしょ。」

言いながら、赤子の悪魔の死骸に目をやる。

「それに、わたしが言わなかったところであんたはそう指示を出したでしょ。今考えられる最善の策は、これしかない」

岸辺はわたしの言葉を聞き終えると、無言で男女二人を担ぎだした。

男は痛みに声を漏らし、女の方は困惑している。

「お利口さんな犬としては、百点満点の回答だな」

「はっ、そりやどくもお」

壊れないおもちゃから犬へ昇格か。至極光栄なこと。

口を尖らしたわたしを一瞥すると、岸辺は部屋の窓を開け何の躊躇いもなく飛び降りた。

ここ二階なんですけど。という心配は、この化け物ジジイには必要ない。

女の悲鳴が聞こえる。窓の下を見れば、人間二人を担いでも難なく着地した岸辺の姿が見えた。

呑気にその後ろ姿を見送ってる場合ではない。

ドアがミシミシと音を立てはじめている。そろそろ限界のようだ。

「ようし、いっちょ頑張りますかあ……！」

独り言でも口に出せば、不思議とやる気が湧いてくる。

わたしはジャケットの袖を捲り、ナイフを持ち直して気合いを入れた。

どのくらい経過しただろうか。

グリーンの絨毯が敷かれていた廊下は、悪魔の血で真っ赤に染め上がっている。

本当に、いくら倒してもきりがない。

ただひとつ分かったことがある。

この悪魔たちは、一方向からしか出現してこない。

つまり、その先を辿れば……

「大元の悪魔がいるってことかな」

わたしの能力で誘き寄せたいところだが、一人のときに雑魚悪魔が集まってきても困る。

今更ながらわたしの能力って精度悪いなあ。

力もそれなりにあるつもりでいたけど、特訓で岸辺に一回も勝てた試しがないし。

わたしって自分の能力を大分傲ってたのかもしれない。

しかし、いくら似たような能力とはいえ、マキマの力を防いでいるのは何故だろう。

公安にいればいるほど、マキマという存在がいかに強大であるかを感じ知る。

悪魔を倒しながら奴らが来る方向を辿っていたら、最上階まで辿り着いてしまった。

目的の悪魔がいる場所は、一目でわかった。

「なに、これ……………」

”大広間”と書かれた札が掲げられた大きな襖は、街灯に群がる蛾のように、赤子の悪魔で埋め尽くされていた。

その奥から、母乳の甘ったるいにおいを腐らせたような強烈な臭いがする。

民間で手に負えないどころの話じゃない。公安のデビルハンターですら人を選ばなければ、即死レベルだ。

応援を待つか？いや、時間が掛かりすぎると行方不明者の生存率が下がる。ここで足踏みしている場合じゃない。

固唾を呑む。

襖に群がる悪魔たちは相手にしてられない。

渾身の力を込めて襖ごと蹴り飛ばす。

先程とは比にならない臭いがし、思わず息を止める。

奥に蠢く何かは、拍子抜けするほど想像より大きくはなかった。

「あ…ア……………私が必死で産んだ、かわいい赤ちゃんたち……………」

美しい声だ。
一瞬気を抜いてしまった。

脇腹を何かに殴られ、そのまま吹き飛び壁に激突する。
内臓が潰れた感覚がして、口から血を吐く。

「なんてことするのオ……ひどい………！」

その美しい声は、怒気に満ちていた。

しかし、その声の主の姿形はまごう事なき悪魔だった。

カマキリのように小さな頭、それに合わないふくよかな図体、先程わたしを殴り飛ばしたと思しき腕のような触手が千手観音のように生え、身体には胸から腹の部分にかけていくつもの乳房が垂れ下がっている。

大きさは二メートルほどで他の悪魔と比べると小型だが、妙な迫力があつた。

「しかも、オンナ……、人間のオンナは必要ないの………」

「はあ………？」

わたしは血の混じった唾を吐きながら立ち上がる。

悪魔の後ろの方に並ぶ何かが見界に入った。

悪魔から伸びる管のような物と、下半身を結合された人間の男たち。おそらく行方不明者たちだ。

「男がいれば、私は何度だって子供を産める………！そうして、子供たちに囲まれて、いっぱい愛してあげるの！沢山食べて、寝て、おつきくなるうねエ」

悪魔は無数に生えた腕の数本を使い、己に寄ってきた赤子を愛おしそうに抱き上げた。

「うぐっ………」

穏やかに我が子を見つめていた顔が急に歪み、呻き声を上げる。何が起きているのか理解できないが、臨戦体勢をとる。

「づう………づあああつ」

悪魔は苦悶の表情で身を振り出した。

触手に包まれた赤子が締め上げられ、やがて空気を入れ過ぎた風船のように爆ぜた。

悪魔が脚を開く。股の間に穴があいている。

そこから丸い何かが液体と共にゆっくりと出ようとしていた。

赤子の頭だ。

「ふーっ、ふーっ、………いいいい」

悪魔は這いつくばって、声を上げる。

きつと今が攻撃の好機だ。

しかし、悪魔の出産という凄絶な光景を前に、足がぴくりとも動かない。

ものの数分で、羊水と共に赤子が滑るようになってきた。

目も開いてない産まれたてのそれは、僅かな沈黙の後、大きな産声を上げた。

「あ……ああ……、私のかわいい赤ちゃん………。無事に産まれてきてくれて、ありがとうねえ」

悪魔は小さな顔についた豆粒ほどの目から涙を流し、産まれたての赤子に纏わりついた胎盤を舐めとりはじめた。

いきんだときに捻り潰した、もう一人の我が子には目もくれずに。

悪魔は皆、名前を持って生まれてくる。わたしもそうだ。

おそろくこいつは、”母の悪魔”。

「人間が思い描く”母への恐怖”ってこんな歪なの？はは、こっわく……」

思わず笑い声が漏れる。

軽口でも叩いていないとおかしくなりそうなほどの狂気が、目の前で練り広げられている。

とにかく奴は今、産まれたばかりの我が子を気にかけて、こちらに攻撃してくる様子はない。

倒す、まではいかなくとも、後ろの人間を解放するだけでも何か変わるかもしれない。

強く床を蹴り飛び掛かる。

「邪魔しないで!!」

悪魔の叫び声が鼓膜に響いて痛い。

産後の雌という生き物は、一様に気が立っていて恐ろしいものなのだ。

そんな奴に攻撃なんかしたくない。戦いたくなんかない。でも、やるしかない。

こちらに伸びてくる触手をよけ、それに飛び乗る。

あまり認めたくないが、岸边との特訓の成果が確実に出ている。

身体の使い方が自分の物になっている感覚だ。

触手の上を駆け抜け悪魔の頸を蹴り飛ばし、そのまま落下の勢いを使って、尻尾のように生えた管をナイフで切り裂いた。

「ギヤアアアア!!」

管にも痛覚があったのか、悪魔が叫び声をあげる。

男たちは、管から解放されてもすぐに意識が戻りそうな気配はない。

先程のケンと呼ばれていた男のように身体を食いちぎられた痕がある者は、出血が酷い。

中には局部が酷く腫れがっている者もいる。

素人目で見ても酷い状態だが、助かるだろうか。

先程の女が、恋人の安否を思い泣く姿が脳裏に浮かぶ。

今はそれよりも目の前の敵に集中だ。

悪魔は咽び泣いていた。

「どうして……こんなこと……オ……、これじゃ、赤ちゃん、作れないじゃない……」

切られた管の断面を見て、泣いている。

大事な生殖器官だったのだろうか。

その泣き声は実に哀しげで、妙に同情を誘う。

緊張感を持つと自分に言い聞かせるように、ナイフの柄で太腿を一度殴る。

「なんで……ママにこんなことオ、できるの……？ねえ……！」

「……さあ、わたしは母親つてもものがないから、さっぱり想像がつかないね」

「ねえ、……なんで、イイ子にできないのオ？」

悪魔がしゃくり上げながら、ゆらゆらと立ち上がる。

何か、様子がおかしい。

「……ねえ、お母さん言ったよね。いい子にしないと、悪魔に食べられちゃうよ」

声が、違う。

その瞬間、耳鳴りがした。

頭が痛い。何か、汚濁したものが津波のように、内側からわたしの意識に向かって押し寄せてくる。

記憶だ。

アマネの記憶。わたしがまだ知らない、アマネが遠く、遠くに追いやった記憶。

「なに、……なににした？あんた……！」

「なあんだ、貴方、母親いるんじゃない」

悪魔の小さい口が左右に大きく引き伸ばされ、歪な笑みを作る。

記憶を読んだ？アマネの……。

先程の余韻で気持ち悪い。足がふらつく。

触手が飛ぶような速さでこちらに向かってくる。避けなければ。

しかし、無理に動かそうとした脚の膝がぐりと折れる。

避け切れない。ナイフでいなせるか。

脇腹に痛みが走る。

貫通は防げたが、それでもかなり抉り取られた。

出血が酷い。

わたしは床に転がっていた赤子の頭と首を掴み捻り切ると、首の断面から直接血液を飲んだ。

「ああー私の赤ちゃん!!」

暫く人間の血すらも飲んでいなかったから、悪魔の血なんてドブ水のように不味く感じる。

具合が悪くなりそうな味に反して、腹部の傷はみるみるうちに回復していく。

良薬は口に苦しというが、滅多に飲む物ではないな。

死んでた個体を選んだとはいえ、目の前で赤子に惨い事をされた。

また激昂させてしまうかと思っていたら、悪魔の顔からは怒りの色

が消え、わたしを唾然とみている。

「傷が…治っている……………」

服が破れ、剥き出しにされた肌は傷一つ残っていない。それを角度を変えて何度も凝視する。

「なんて……………ことなのオ……………」

悪魔が頭を抱え出す。

今度は何の前触れだ？後退りをする。

「こんな、普通だったら死ぬような傷でも回復するなんてエ……………！貴方こそ、私が望んでいた理想の子供……………」

「は……………」

「私の子供たちは可愛いけれど、弱い……………すぐ死んでしまう……………。でもそれじゃ意味ないのオ。大きくなって、強くなって、人間を沢山たーつくさん殺してくれなきや意味がないのオ!!!」

地響きを起こす程の咆哮。

劣化した床がミシミシと嫌な音を立て、鉄骨にぶら下がった天井が揺れる。

「欲しい……………、欲しい欲しい欲しい!!」

悪魔から無数の触手が飛んでくる。

速い分には見える。しかし、手数が多すぎる。

「私の子供になりましたよオ!!なってエー…なりなきあアイ!!!」

「つ……………、誰が、なるかあ、カマキリ女あ……………！お前みたいなブサイクな母親死んでもごめんだね!!」

悪態を吐きながらも、息は切れ始めてきている。

一方悪魔の攻撃は衰えるどころか威力を増すばかり。

しかも攻撃が段々と乱雑になっていき、触手が建物のいたるところにぶつかっている。

触手がぶらさがっていた天井板に当たった。

「やば、落ちてくるー！」

天井板が落ちてくるのに気を取られていて、下が疎かになってい

た。

ひび割れた床から触手が飛び出し、わたしの身体の中心を貫いた。

口から大量の血が出る。

「やったあ、捕まえたく〜ア」

悪魔はわたしを串刺しにしたまま、顔の近くに持ってくる。

酷い臭いだ。血も大量に流れ落ちていき、どんどん気分が悪くなつていく。

悪魔はわたしの顔を暫くいろんな角度から観察した後、横にいた自分の赤子を自らの手で潰した。

先程まで可愛がっていた我が子を呆気なく殺した。

理解のできない行動というのは、恐ろしい。

捕らえられた自分がこれから何をされるのか、全く想像もつかないのが恐ろしかった。

「今日から私がア、貴方のママ、いいえ…お母さんだからねエ。貴方のステキな母親よりも、うんと可愛がってあげる。沢山食べて、大きくならうねエ……」

赤子を何度も潰し、細かいミンチ状にすると、それを触手の先にある人間の手と酷似した器官で掬い上げる。

それを、わたしの口の中にぶち込んだ。

突然のことに驚く隙も与えられず、喉の奥に押し込まれたそれを飲み込んでしまった。

肉がぬるりと食道を通り、内臓に蓄積されれば、貫通したままの部分が再生しようと収縮しはじめた。

「いつ………いたいつ、い、っひ」

普通に回復するときと比にならない激痛が身体を襲う。

「すごおい、本当に回復してる。もつとたくさん食べなきゃねエ〜」

「いつ……………うううぐう」

また次の肉が口に運ばれる。

赤子の悪魔の肉。

人間の赤子、そのもののような。

耐えられず嘔吐する。

悪魔の顔に笑顔が消えた。

「なんで…………ツ、ちゃんと食べないのよオー!!!」

わたしを串刺しにした腕を思い切り振りかぶり、地面に叩きつけた。

脆い床はいとも容易く貫通して、わたしは何階か下のフロアまで落ちていった。

背中が痛い？いや腹が痛い？

全部痛い。感覚がよく分からない。

串刺しにされて身体を中心にできた穴が、それでもじわじわと塞がろうとしている。

「ほらア、食べて、いい子だから。大きくなれないよオ……………」

上から悪魔の顔が近づいてくる。

カマキリのような顔が、別の女性の顔に見えてきた。

アマネに似ている顔だ。榛色の瞳をしてして、栗色の髪の色。しかし、アマネと比べるとやや面長で出っ歯だ。それでも十分綺麗な女だった。

「ほら、口を開けて。好き嫌いしちゃ駄目よ」

「嫌だ…………、わたし、それ嫌い」

謔言のように口から溢すと、頬を叩かれた。

「これを食べないと、強くなれないの。悪魔に食べられちゃうよ？折

角綺麗で可愛く産んであげたんだから、強くならなくちゃ。ほら、口を開けて！」

無理やり顎を掴まれる。

生っ白い手に持たれた匙の上には、赤黒い肉。

それを口に運ばれる。

食べないと、怒られる。

食べないと、失望される。

食べなきゃ、食べなきゃ。

どろりとした感触が舌を伝い、喉へ流れ込む。飲み下す。生々しい肉の食感、どこの臓器だろうか、苦い。生臭い。

もう食べられない、食べたくない。

わたしは耐えられず顔を背け、地を這いどうにか逃げようとした。

「どこにいくの?」

腕を掴まれた。そして、何度も床や壁に叩きつけられる。

「まだご馳走様してないでしょ?!悪い子!!悪い子オ!!ワルイコ!!!」

肩の関節が外れ、その次に皮膚が千切れる感覚がした。

右肩から離された胴体が吹っ飛ぶ。

飛ばされた先にあつた剥き出しの鉄骨に刺さって、治りかけた腹の穴がまた拡がった。

ああ、不死身ってなんて便利な身体なんだと思ってたけど、こんな辛いこともあるんだなあ。

痛みがとめどなく続く。

どこかでぷつりと痛覚が切れてしまえば楽なのに。

鉄骨からずり、と身体を引き抜き、あてもなく歩き出す。

しかし、すぐに足がふらついて倒れ込んだ。

辛い、痛い、帰りたい。

どこに帰りたい？死にたい？帰るところは何処？アマネ、教えて。
わたしは……

「よくやった。もういい」

聞き慣れた、低い声がした。

地面に伏せたままのわたしにコートがかけられる。
コートの心地よい重み。煙草とアルコールのにおい。

直後、母の悪魔の断末魔が聞こえた。

「アマネさん！すぐに救護を……」

よく見知った顔の隊員がかけ寄ってくる。

「いい……、わたしは後で、いいから……。奥に民間人、恐らく重傷。
そっちを優先して……！！」

そいつはわたしの顔を心配そうに窺い、躊躇った様子だったが、わたしが首で促すと素直に従い走っていった。

その後ろ姿を見て、漸く緊張の糸が切れる。

母の悪魔が倒れ、床が揺れる。

岸辺がやったのだろうか。やっぱり全然敵わないな。

その後すぐに悪魔の死骸の確認作業に入り、捕われていた男たちが次々と運び出されていく。

そんな光景を痛みに耐えながら見ていると、段々と意識が途切れ途切れになり、視界や周りの音がぼやけていく。

意識を完全に手放す直前、アキくんの声が聞こえた気がした。

すすきや、三つ葉や、シロツメクサ、たんぽぽ、ぺんぺん草なんかもある。

それらで地面が埋めつくされている場所に立っていた。

ここは何処だろう。

でも知っている場所だ。これは夢で、夢は見たことない場所でも既視感を覚えさせる。

生い茂る草を踏みしめながら歩くと、どんどん視界が狭くなってきた。やがて辺りが黒く塗り潰したような暗闇へと変わっていった。

引き返したいけれど、振り返ることさえ叶わない。

踏み締める草の感触が変わらない事だけが、心細い身体を前に進めさせる。

やがて目の前に現れたのはひとつの扉。

木枠が傷んでひび割れた、古めかしい磨りガラスの引き戸。

そうだ、これは立て付けが悪くて、こつを掴まないとなかなか開かないのだ。

でも、なんでそんなことを知っているんだろう。

わたしはその扉を開けることを躊躇った。

アマネの声は聞こえないが、彼女は酷く恐がっていたから。

飛び起きる。

呼吸が荒い。目の前の白いシーツに、額から流れ落ちた汗がぼたぼたと垂れ、染みを作る。

大丈夫、いまは現実。夢から醒めたばかりだ、落ち着け。

自分自身を宥め、徐々に心拍数が整ってくる。

大きく息を吐けば、汗で濡れた服が背中にべったりと貼り付いていることに気づき、急に寒気が襲ってきた。

右腕が視界に入る。

手を握る動作をしたりして、正常に動くか確認する。

臍のあたりも触る。いつもの柔らかく吸い付くような、アマネの皮膚の感触だ。

左肘の内側に、小さな正方形の絆創膏が貼られている。輸血を既に終えたあのようなのだ。

どのくらい意識を失っていたのだろう。

ベッドを仕切るカーテンの外は暗いが、夕方なのか夜なのか明け方近くなのか。

近くに時計がない為分からない。

「やだ…、シヨウ君！死なないでえ……」

女の悲痛な声が聞こえてきた。

聞き覚えのある声だった。少し甲高い声。

カーテンの隙間から覗くと、廃ホテルの中で会った派手な女がベッドの前で膝をつきながら泣き喚いている。

ベッドに横たわっているのは男。

管に繋がれていた男の一人だ。

そういえば彼女は、彼氏が悪魔に連れ去られたと言っていた。

助けられなかった。

その横でも、女、初老の男女、そして子供が二人、ベッドを囲んで泣いている。

「彼はデビルハンターとして、立派に役目を全うしました……。同僚として、誇りに思います」

傍らに立っていた男が声を震わせながらそう言うと、ベッドで横たわっている男を囲む、家族と思しき人たちが声をあげていつそう泣いた。

わたしはカーテンを閉じ、耳を塞いだ。

聞きたくない、今は、何も聞きたくない。

身体が全て元通りになったというのに、全身が重たい。

口に入れられた肉の食感を思い出すだけで、胃液が迫り上がってくる。

上体を起こしているだけで辛く、再度横になったときだった。

わたしの仕切りカーテンに影がうつる。

看護師が様子でも見に来たのだろうか。

「……誰？」

なかなか入る様子がないので声をかける。

すると、静かにカーテンが開けられた。

「あれ、……アキくん」

ドアから顔を覗かせたのは、予想もしていなかった人物だった。

未だに強張る顔を無理やり動かして笑顔をつくる。

「どうしたの？東京から来るの、大変だったでしょ。向こうにいないで大丈夫そうなの？」

「……東京は昨日、銃の悪魔の仲間の襲撃があったが大丈夫だ。先程本部に電話をかけたが、天使が片をつけたと報告があった」

銃の悪魔の仲間、ボムガールの事だろうか。

向こうは向こうでそんな事になっていたとは。

ただマキマの言った通り”大丈夫”だったようで何よりだが、マキマはそれほどデンジの実力を買っているのだろうか。

「そっか、それはよかった。今回は怪我してないの？大丈夫？」
アキくんの腕に触れようとしたら、手を引かれ避けられた。
アキくんは、ベッドに横たわっているわたしなんかよりも、よっぽど青ざめていて、強く握りしめている拳は小刻みに震えていた。

「そんなことより、自分の心配しろよ……！お前、あんな状態になつて……」

……見られちゃつてたか。

意識が落ちる前に聞こえた声は気の所為ではなかったようだ。

あんなに惨い状態のアマネを見て、さぞかしショックを受けただろうな。

「うん、完全に油断した」

布団から腕を出し、感覚を確かめるように握ったり開いたりを繰り返す。

「なんか最近調子悪くてさ、力が出なくて。本調子じゃないんだよねえ。ま、この通り身体は元に戻るからさほど問題ではないんだけどさ」

わたしはなんてことないように笑ってみせるが、アキくんの顔は晴れない。

「……大丈夫だよお、アキくん」

彼の手をとり、両手で握る。

また避けられると思つたが、よかつた。

触れた彼の手は、冷えきつてまだ震えていた。

「……確認、してみる？」

わたしはそんなことを口走っていた。

わたしは今どうしようもなく、わたしの瞳や身体から目を逸らし続ける、彼の視線を捕らえたかった。

病衣の結び目を解き、前をはだけさせる。

裸は、ただの皮だ。

美しいその皮に拘るわたしがそんな言い方をするのは妙だが、皮を見せても羞恥心はない。

しかし、アキくんにとってはそれを見ることは、きつと意味のあることだ。

血の通ったアマネの身体に触れ、確かめることが重要なことだ。再びアキくんの手を取り、わたしの身体にその手を這わせる。

浮き出た肋骨を撫でさせ、傷跡ひとつ残ることのなかった白く柔い腹部に誘導する。

置いてきたアマネへの恐怖心も、向き合えなかった後悔も、欲も、全てぶつけられたい。

そうさせてほしい、そうすればアキくんもわたしも、きつと苦しい今よりずっと楽になる。

楽になりたい。

アキくんの掌は徐々に熱を帯びてきた。

行き場を失った熱は、やがて彼の目から零れ落ちた。

アキくんは、泣いていた。

「ええ〜……なんで泣くのお」

「……いや、すまん。これは」

アキくんは顔を逸らし、手の甲で顔を隠し、それでも洩れるしゃくり上げる声と、彼の顎から、指の隙間から温い水がぽたぽたと止めどなく溢れていた。

人間は弱い。

刺しどころが悪いとすぐ死ぬし、血が足りなくなっても死ぬ。当たりどころが悪ければ血が出なくとも死んでしまう。

この病室のベッドにある数人の死体のように。

それを悔やみ涙する、生きてる人間も一様に皆弱い。

アキくんだって同じだ。

他の人間と同じ身体の作りで、ちよつとしたことですぐ死んでしまふ、ただの人間だ。

なのに、不死身であるわたしの無傷の身体を見て、触って出した答えが、涙だ。

「もお、仕方ないなあ……」

わたしは自然と笑みが溢れて、アキくんの頭を抱き寄せた。

抵抗しない彼は尚も泣き続け、やがてわたしの背中に腕を回した。

「アキくんのどんなところが好きなのお？」

以前わたしがアマネに問いかけた言葉だ。

わたしはこのときアマネが思い浮かべた言葉を感じ取ることができなかつた。

そんなわたしに、

「君が知らないなら、これはわたしだけの特別な感情だ」

とアマネは笑った。

今なら分かる気がする。

アキくんは優しく、人を想って泣ける子だ。

そんな彼が、愛おしい。

アマネの”愛おしい”は、わたしの考える”愛おしい”とは、色も形も違うのかもしれない。

でもきつと声に出して表すのなら、アマネもわたしと同じ言葉だという自信がある。

わたしはアキくんの髪を撫でながら、

「いとおしい」

と、声に出さずに唇でその言葉をなぞってみた。

その言葉はおまじないのように、わたしの中にぽっかり空いた底なし沼の空洞を、綺麗な水で満たしていく。

そうなれば、触れている肌が温もりを持って、泣き声が響く病室の中でも冷たい檻に閉じ込められない。

わたしは安心しきって彼の髪に顔を埋め、目を閉じた。

アイス四本

東京に帰って、ボムが街に及ぼした被害は相当甚大だったことを知った。

それに加え、デンジの心のダメージも甚大だったようだ。

わたしもここ数日で妙に気落ちしてしまったし、そんなときは……

「デンジの失恋を慰める会アンド、パワー復活祝いパーティを開催しまあ〜す!!」

「いえ〜い……」

デンジの気のない返事。

アキくんの呆れ顔。

パワーの刺々しい視線。

デンジはまあ、置いといて。いつもの早川家だ。

東京に帰ってきた実感が湧く。

パワーには依然威嚇されてはいたが、血をあげると言ったらすぐに寄ってきた。

警戒心が強いけど、食欲に勝てない。猫みたいだ。

この家には本物の猫もいるが、ニャーコの方は元野良にしてはなつこい。ふわふわで温かいのでつい触ってしまう。

アキくんは、病院での出来事はまるでなかったことかのようにいつも通りで、少しほっとした。

にしても、今日は漸くアキくんの手料理が食べれる！楽しみで仕方がない。

「あれ？」

目を覚ますと、木目調の天井。煙草のにおいと、ほのかな藺草のにおい。

せんべい布団は、自室のベッドのものと似てはいるが、畳の時点で自室ではない場所だ。

いや、このささくれた畳の感触。

この場所を知っている。

「目え覚ましたか」

低い声。

後ろを振り返ると、一人がけのソファに座った岸辺がわたしを見下ろしていた。

「……………誘拐？あつ」

煙草の空き箱が飛んできて額に当たる。ボックスは地味に痛い。

「え、どういうこと？わたしさつきまで早川家にいた筈なんだけど。なんで急に岸辺の家にな？落差が酷すぎて訳がわからないんだけど……………?!」

「訳がわからないはこっちの台詞だ。昨日アキから酔っ払ったお前を押し付けられたんだよ」

「酔っ払った？酒を飲んだってこと？記憶にないんだけど。」

薄らぼんやりとした昨晚の記憶を辿る。

アキくんがカレーを作り終えたところから遡ってみようか。

食卓にコップやらお皿を並べるのを手伝って、座ったアキくんの横を当然のように陣取って、それから……

デンジとパワーとゲームをして、勝ちを確信して余裕をこいてい

たら、横でアキくんが缶から直接ゴクゴクと喉を鳴らしながら飲んで
いた飲み物があまりにも美味しそうだったから、わたしもひと口
…………と。

「あゝ、あれがお酒かあ」

道理で独特な味だと思った。ジュースにしては甘味もないし。
どうやらアマネの身体はアルコール耐性が全くないらしい。

身体が十六歳だから？いや、体質の問題であって年齢はあまり関係
ないのだろうか。

「酒に呑まれる奴は飲むな。酔っていても頭を動かさなければ意味が
ない」

「別にあんたに倣って飲んだ訳じゃないから。二度と飲まないよ、あ
んなの」

それにしても、惜しいことをした。

昨日の事を断片的に、いやほとんどと言っても過言ではないと思
い出せない。

折角作ってもらったカレーの味も、残念極まりないことに思い出せ
ない。

ただ、ゲームに勝ってアキくんとのデート権を得られたことだけ鮮
明に覚えているのは、我ながら凄まじい執念だ。

でもそれ以外にも楽しい事が沢山あった筈。がつくりと肩を落
とす。

「落ち込んでいる所悪いが、話がある」

「いま頭痛いんだけど。後でもいい？」
わたしはそのそりと起き上がると、流しに干してあったコップを勝手
にとり、水をなみなみと入れ一気に飲み干した。

「…………いや、ここじゃない方がいいか。外出るぞ」

頭痛いって言うてんのに、相変わらず容赦がない。
「はあ、分かったよ。とりあえずシャワー浴びさせて」

全て岸辺のペースで動いてたまるものか。

何か文句を言ってくるかと思ったが、わたしが返事を待たずに服を脱ぎはじめたのを見て、溜息を吐きながら上げかけた腰を再度落としていた。

狭くて暗い地下飲食街。

年季の入った看板やポスター、壁には無数の落書きがされている。それを抜けた先にある、看板も何もない、空き部屋。

中には、殺風景で埃っぽい空間に、一角にはブラウン管テレビ、もう一角には古ぼけたスチールの事務机、その上に電気スタンド、クッションに穴が開いたこれまた年季が入ってそうな回転椅子が置いてあるだけだった。

「で、こんな小汚い場所までわざわざ歩かせて、話つてなに？」

世の中のジジイの方々は、風呂には石鹸しか置かないものなのだろうか。

ドライヤーすらもないものなのだろうか。

石鹸でギシギシになった生乾きの髪を手櫛で整えながら、不機嫌を隠さずに岸辺に問いかける。

岸辺が唯一の光源である電気スタンドのスイッチを入れると、数回明滅した後、煌々と光り出した。それでも蛍光灯が切れかけているのか、僅かに光が揺れていて目がちかちかとする。

「ここなら、マキマに話を聞かれる事もない。奴は下等生物の耳を借りる」

思いもよらない発言に、少々驚いた。

「……岸辺も気づいてたんだ。周りの人間たちは誰も知らないと思ってた」

流石、公安一のデビルハンターと云われるのは伊達じやなかったというのか。

あの黒々とした鼠の目を思い出すと、不快な気分になる。

話が長くなりそうな気配を察知し、我先にと奥の回転椅子を陣取った。

オレンジ色をしたスポンジがクッションから飛び出ている。見るからにボロいなりをしており、軽すぎるくらいのアマネの体重ですら支えるのが大変だとも言うように、ギイイと大きな悲鳴を上げた。

岸辺が懐から何かを取り出す。

石のような物だが、何か、火薬のようなにおいがする。

「それ…、ボムと一緒のにおい」

「何故ボムのおいを知っている。俺たちは別任務だっただろう」

「まずい、口が滑ったか？」

ボムの件はマキマにしか言ってないない。

「ボムがまだ人間のふりをしてデンジと接触しているとき、偶々見かけた。そのときに……」

「何故報告しなかった」

「……マキマに今回の件で手出しをするなど釘を刺されてたんだよ。あんたに報告しなかったのは、……悪いとは思ってる。

けど、こっちも常にマキマに耳をそばだてられていると考えると、下手に何でもかんでも話すことはできないんだよね」

わたしは岸辺の刺すような目つきにたじろぐ。

僅かに身じろぎしただけで、椅子がギイ、と大袈裟に鳴いた。

「これは銃の悪魔の肉片だ。お前はこれを見ること自体が初めてだろうが、この肉片は公安だけが持つことが許されている」

これが銃の肉片……。やはり火薬のような臭いは、銃の悪魔のにおいだったのか。

ボムが銃の悪魔だという予想は、間違いではなかった。

けれど、なんでそんな事が分かったのだろうか。

わたしは銃の悪魔を見たことも会ったことも、銃の肉片を飲んだ悪魔も、母の悪魔以外に会ったことがない。

「お前は銃の悪魔の仲間なのか？」

「違う！アマネは故郷をめちやくちやにされた記憶はあるけど、会ったこともない!!」

「じゃあ、これはどういう見だ」

そう言いながら、岸辺は紐に繋がれた銃の悪魔の肉片をわたしに近づけた。

すると磁石に反応するかのようになり、重力に逆らってぴんと紐が張り、肉片がわたしの方へ向かって浮いた。

「これは銃の肉片の性質だな。肉片同士はくっつく。先日の栃木での母の悪魔との戦闘後、奴から銃の悪魔の肉片を押収した。その時も、肉片はお前へ向かって動き出していた」

何の事だかさっぱり分からなかった。

ただわたしは「いま、命の危機」に晒されているのは分かる。

裏切り者として殺される危機。

「わ…わたし、本当に知らない!」

「ということは、生前の茅森アマネが銃の悪魔と契約していたということか……」

「そんな記憶もない。アマネが、そんな事を言っていたこともない」

岸辺が話を理解できていないようで、眉根を寄せる。

そうか、わたしの中でアマネが生きている事を岸辺は知らないのだ。

「わたしの中に、人間のアマネの自我は残っているの。声だけでなく、考えている事も共有できた。…最近、全然聞こえなくなっちゃったけど。…でも、茅森アマネは生きているの!」

普通なら馬鹿にされるような事だろう。

悪魔の戯言だと思われるのが関の山だ。

実際、アキくんにも信じてもらえていない。

「俄に信じ難いことだな。暴力の悪魔のように、身体の持ち主の記憶を引き継ぐケースは稀にだが散見するが、共存しているのは聞いた事がない」

やはり予想通りの反応だ。

しかし岸边は嘲笑するでもなく、無精髭をさすりながら思案するよ
うな表情を見せている。

まだ話を続けてもいいと察する。

「わたしは、……アキくんと会ったらこの身体が手に入る筈だった。
そういう契約だったから。けど……」

上手く伝えられないことが歯痒い。

しきりに目を泳がすわたしは、岸边から見たら信用に足る者には見
えないだろう。

「お前は、マキマの事をどう思ってる？」

「……………はっ。」

突拍子もない事を言い出すな、何なんだ。

ただ、先程の岸边の口ぶりからして、彼が”マキマ親衛隊”ではな
いことは窺える。

マキマに気づかれないようにわたしを殺すという考えもできる事
には出来るが、動機が不明瞭だ。

先程言われた通り、確かにここに動物たちの気配はしない。

正直に言ってしまうおうか。

「出来ることなら、今すぐにでも殺してやりたいくらいだよ。……」

出来ることなら”、ね”

「そうか」

岸边は煙草を取り出し、火をつける。空気が籠ってるから正直やめ
てほしい。

「やはりお前は、他の悪魔や魔人たちと違って、マキマを敬うでも恐れ

るでもないんだな」

「ああ……、そういうこと」

岸边の言う通り、公安に所属している悪魔たちは、マキマを心酔しているか恐れているかの二択。

人間たちも、個人差はあれど大体はマキマのことを慕っている。

少なくともわたしみたいに敵意を剥き出しにしている奴は一人もいないだろう。

癪ではあるが、わたしもマキマに恐怖の感情がないわけではない。

だが、幸い岸边が疑問に思うくらいには表面上に出ていなかったのだろう。

「岸边も既に分かりきつてることだけど、わたしの力は”誘惑”。心を迷わせて、誘い込むこと。悪魔の気を此方に向けること。マキマも、恐らくわたしと似たような悪魔の力を持っている。だから知らないけど、わたしはマキマの力を防ぐことができているみたいだね」

恐らく、だ。

単なる力の優劣で、あの個性豊かな人外たちを付き従えられるとは思わない。

マキマがわたしを捕らえたときにかけてようとした、悪魔の力。

あの女に初めて会った時の、円模様の瞳の鈍い光。

脳みそが揺れて、思考を投げ出し他者に委ねたくさせるような。

思い出しても、胃がむかむかとする。

「なるほどな。道理で……」

岸边がさして驚きもしない様子で、またも顎の無精髭をさする。

相変わず何を考えているか分からない目が、わたしじゃないどこかに焦点を当てていた。

「マキマの力はわたしと違って、人間にも効くようだけど……岸边は大丈夫なの？」

「俺は、マキマは殺すべきだと考えている」

また何の脈絡もなく、この男は。

しかし、わたし以外にもマキマに殺意を向けている人物がこんなにも身近にいたとは。

少しの期待を込めて、黙って話の続きを促す。

「しかし、……何でだろうな。心の何処かで、マキマへの情が邪魔をする。マキマを殺すという考えに抵抗がある。……殺すには、同じ時間を過ごしすぎてしまった」

「そんな長い期間、マキマと仕事を共にしていたの？」

何気ない質問をしたつもりだったが、珍しく岸边が目を見開き、そのまま硬直した。

「……犬やおもちゃ。どんな物にも情が湧くのは齡の所為だと思っていたが……。お前と話して合点がいった」

話が早くて助かる。わたしは続けた。

「アキくんも……その能力で、マキマに好意を向けていると、わたしは考えてる。アマネはアキくんの解放を望んでいる。だからわたしは、マキマを殺したい」

わたしは普段岸边に向けることのない、真面目な面持ちで告げた。

「アキくんが、あの女のことを『命の恩人だ』と言っていたんだって」
デンジから聞いた話だ。

アキくんは、マキマのことが好きかを言及したら、そう答えたと言
う。

「アキくんがマキマに命を助けられたような出来事って、あった？それがきっかけで、アキくんがマキマを好きになるような変化があったことを、何か覚えている？」

岸边は首を捻る。

「弟子とは言え、あいつの周りで起きた事を全て把握している訳じゃない、確信はないが。あいつがマキマに命を助けられたっていう具体的な状況”は見てもないし、誰からも聞いたことがない」

そして、こちらに顔を向けた。

「アマネ……いや、”誘惑の悪魔”」

焦点の合っているか分からない真っ黒な瞳がこの時ばかりは真っ直ぐわたしを捕らえていた。

「お前と契約を結びたい。そして、マキマが俺にかけて能力を防ぐ、力が欲しい」

声のトーンも表情も、普段と何一つ変わらないが、至極真剣なことは分かる。

今日は珍しい岸边が色々で見れるな。なんて呑気な事を考えながらも、わたしは驚いていた。

「……わたしのこと、信じてくれるの？」

「信じる？」

「だってさつきまで、わたしが銃の悪魔の仲間だって疑ってたじゃん」

「仲間なのか？」

「違う！……でも、あんたの疑いを完璧に晴らすような決定的な証拠はない」

顔を伏せる。

岸边とバディになってから暫く経つ。

本人には口が裂けても言えないが、そこそこ信頼しているし、心を許していた。

出来ることなら、こいつに殺されるようなことにはなりたくない。

「俺とお前の目的は同じだ。今はそれで充分だ。それに、銃の悪魔と関わりがあるのは公安側は放って置かないだろうが、俺には関係ねえ。それにお前は俺からしたら圧倒的に弱い。恐れる理由は何ひとつない」

質問の答えにはなっていないが。

こいつにとってわたしは飽くまで”悪魔”だ。

アマネが、”わたしにも向けてほしい”と欲していたものは、残念

ながら向けられることはないだろうな。

溜息を吐き椅子に深く座り直す。

さらに悪魔らしく脚を組んで、傲然と構えてみせた。

「……それで、本当にマキマが殺せるの?」

「さあな。確率は上がるんじゃないか」

「そもそも、あんたはマキマの契約している悪魔を知っているの?」

「俺も結局のところ”一端”のデビルハンターだ。マキマが契約している悪魔を知ることができない。それでも少しの勝算が見出せるなら、俺は俺の持っている物を全て差し出すことになったとしても奴を殺す。悪魔を殺すのがデビルハンターの仕事だ」

岸边は一体どこまで知っているんだ?

まるでマキマ自体が悪魔だと言うような口ぶりだ。

「これであんたの”情”が本物だったら、ちよくう笑えるけどねえ」
意地悪く笑ってみせるが、当然岸边の表情は揺らがないどころか、身じろぎひとつしない。わたしをただ見据える。

岸边のマキマに対する尋常じゃない殺意はなんなんだ?

いや、悪魔に対しての執着。

何がこいつをそこまで突き動かしているのか。

いや、突き動かしているとかではなく、そういう性質なのか。

そういうえば復讐とか正義感とか、そういうのがあると早く死ぬって、前にそんなこと言ってたな。

沈黙に敗れたのは、わたしの方だった。

「はあく……、分かったよ」

「代償は」

「本当だったら、あんたの身体から何かしらを、って言いたい所だけど

……」

岸辺の頭の先から足の先までゆっくり目をやる。

わたしは人間の”持っているもの”や”失ったもの”を透視する能力はない。だが、岸辺からは他の人間と違うにおいがした。

叩けば音が響きそうなほど空っぽで、虚しいにおいだ。

「ニコチンとアルコールに汚染された身体から貫つても別に嬉しくないね。そうだなあ……」

そもそも人間の血肉はもう懲り懲り。出来ることなら食べたくないんだけど。

わたしはしばし考えた後、岸辺に向かって四本指を立てる。

「毎日アイス四本、奢ること」

「……悪魔も、丸くなることがあるんだな」

「煩いなあ、十本に増やすよ」

岸辺が僅かだが目を丸くしたのを見て、何故かわたしが照れ臭くなる。

ただ、存外気分がいいものだ。

顔を背けたくて回転椅子を回すと、ギギギイと歪な音が狭い室内に響いた。

「でも、あんま期待はしないでほしいな。悔しいかな、わたしもマキマの力を防ぐのは、かなり気を張っていないと難しい。総じた力なんて足下にも及ばない」

「悪いが、鼻からそこまで大きい期待はしていない。そもそもお前がそこまで強い悪魔だったら、こんな事にはなっていないだろう」

こんな事、というのはわたしが特異4課のデビルハンターとして酷使されている現状のことを言っているのだろう。

悔しいが、ぐうの音も出ない。

マキマに記憶を操作されていなくとも、手綱を握られている事には変わりない。

「だから、お前は自分がマキマの支配下に置かれないうことを気をつけるんだな。マキマに気に入られもしなければ、嫌われもしないよに努めろ」

困った、嫌われる自信ならありすぎる。

「お前は、陰に徹せ。後は俺がどうにかする」

「どうにかってえ？マキマと殴り合いでもするつもり？」

わたしはまた回転椅子を回して一周、再び岸辺の前にきてにやにやと顔を見上げる。

「ああ、俺は最強のデビルハンターだからな」

と、根拠のない大層な自信をひけらかされただけだった。

わたしの力と引き換えに、毎日アイス四本。

それがわたしと岸辺で交わした契約だった。

そんなふざけた内容でも罷り通る物なのかと思ったが、無事岸辺の心境に変化があったようで。

「恐ろしいものだ。奴への不審感は持っていたものの、共に積み上げてきた物があることは事実だと思っていた。……しかし、記憶の捏造も、奴の能力のひとつなんだな」

岸辺の表情はいつも通り変わらない。けれどその声音から静かな怒りを悟った。

しかし、逆を言えば岸辺が使えるようになったのは”それだけ”。わたしの体格に合わない物理的な攻撃力や、悪魔を惹き寄せる力を使うことはできなかった。

悪魔と人間の契約は等価交換のように思えるが、実際は悪魔の方が優位だ。

人間の方が差し出せる物が少ないから。

デビルハンターに必要なのは、強い悪魔との契約よりも、悪魔と人間の関係性というのも重要なかもしれない。

デンジとポチタがまさにそうだろう。

まあ大概の悪魔は人間を忌み嫌っている。そんな日和見主義は罷り通らないか。

「そもそも、魔人と人間で契約を結ぶというのは前例のないケースだ。お前を魔人と分類していいものかという点もあるが……。それでも欲していた能力は手に入った。それで十二分だ」

「そうだね。岸边にさらに馬鹿力が加わったところでしようがないしね」

気が抜けて、暗い部屋のブラウン管テレビの電源を点けるてみる。果たしてこれは使えるのだろうか。

ブウン、と音を立てて数秒、ギリギリ生きていますというような調子で画面に映像が映し出された。

『敵か味方か、恐怖のデンノコ悪魔……』

「ん……………」

今一瞬、チェンソーの悪魔になったときのデンジが映し出された気がしたのだが、気の所為だろうか。電波が悪いのかテレビが悪いのか、映像が安定しない。

「ねえ……、岸边」

画面から目を離さず岸边を呼ぶが、返事がない。煙草の煙を吐く音が聞こえる。

また映像の乱れが一瞬直り、凝視する。そこに映るのは、やっぱりデンジだ！

「ちよつと、岸边!!」

また砂嵐になったテレビの上部をバンバンと強めに叩きながら、岸边を呼ぶ。

「うるさい」

「見て、テレビ!!」

わたしは振り返りながら、漸く直ったテレビを指差す。

「デンジがテレビに！映ってる！！」

空腹

「お邪魔しまゝす」

「……よろしく頼む」

チャイムを押すとすぐ扉が開き、アキくんが顔を覗かせた。

いつものような悪態は吐かれない。

何故なら今日のわたしは、任務で早川家に訪れているからだ。

チエンソーの悪魔の姿をしたデンジがテレビで放映されたことにより、世界中に彼の存在が露呈してしまった。

それにより、デンジは世界中の刺客から心臓を狙われる身となってしまうのだ。

しかし、護衛の人員が揃うのは明日から。今晚だけはわたしがアキくんやパワーと共にデンジの護衛をする、という名目の”お泊まり会”を許された。

一泊だけなので大した荷物もないのだが、ドアの中に入ると同時にアキくんが代わってポストンバックを持ってきて、少し気恥ずかしい気分になった。

「飯は？」

「まだ食べてない！」

「そうか、俺らも今ちょうど食ってるから」

実は家に入った瞬間、においで察していた。

今日こそちゃんとアキくんのご飯が食べれる。

今日は制服じゃない。

岸辺とバディになってから一気に給料が増え、使い所もないので何着か洋服などを買ってみた。

以前は白のカットソーとデニムパンツのワンセットしか持ってい

なかったから、色々幅が広がった。洋服も色々種類があり、特に女性物はアイテム数も幅広くて、実際買物に出かけると、案外面白かった。

今日はボーダーのスウェットにショート丈のチノパンツにした。

普段スカートとハイソックスで隠された脚が曝け出されてて少し落ち着かない。

玄関の鏡に映った白い脚は、依然として真っ白で細長い。

アマネだったらなんでも似合うかと思いきや買ってみたが、肌が出すぎて少し不健康に見えるかもしれない。

折角おしやれしてきたのに、と少しばかり肩を落とす。

「おう、来よったか」

リビングに入ると、パワーが食べ物で頬を膨らませながらわたしに話しかけてきた。

「ウヌが来ると聞いて、ウヌが好きそうなものを取っておいてやったぞ」

そういつて、煮物や味噌汁に入っていた野菜をサラダの上に雑に乗せられているという、残り物の盛り合わせを差し出された。

「あく…ありがとう。わたしもみんなにお土産。アイス」

「アイス?! ヤッター!」

パワーは食い気味にわたしの手からビニール袋を奪い、アイスの封を開けた。

怯えられていたときを考えると、まあ懐いてくれているほうなのかな。

「おい、他人に野菜を押し付けんな。……ていうかお前、俺の皿の唐揚げ食っただろ」

「デンジが食っておったわ」

「また見え透いた嘘を……。悪いアマネ、料理の中のありとあらゆる肉がこいつに食い尽くされた」

「大丈夫だよ、わたし煮物好き」

正直、母の悪魔の一件で肉を敬遠するようになってしまったので丁度良かった。

悪魔の癖にヴィーガンとは如何なものなのだろうか。

その内時間が解決してくれるだろう、くらいには樂觀視しているが。

アキくんが作った唐揚げなら食べてみたかったと思えるなら、まだ救いようがあるだろう。

しかし、味噌汁に白飯、おかずに唐揚げと煮物とサラダとは。なんて豪華！栄養バランスも良いし、揚げ物っていう二人が喜びそうなメニューも入れてある。

味噌汁からいただく。温め直してくれていたようで、適度に熱い。

わかめと豆腐と大根が入った素朴な味噌汁は、今まで食べたものよりも何より美味しかった。

「大袈裟だろ……」

「ん、声に出てた？」

「間抜け面になってんだよ」

そんな幸せそうな顔してたのか。

アキくんはぶつきらぼうにそう言ったが、照れ臭そうだ。

でも本当に美味しい。

施設で出る味気ない食べ物とも、外で食べる味が濃くて胃がもたつく食べ物とも違う。

「そういえばデンジは？」

「飯食ってからずっと部屋にこもってる。マキマさんの旅行が延期になったのがよっぽど堪えたんだろ」

マキマと旅行？聞いてないんだけど。

「アキくんも行く予定なの？」

「まあ……」

曖昧に答えるアキくんは、わたしの顔は見ずに食事に集中している。

やめときなよ、とか行かないで、とか言うとかアキくんは行くのをやめるのだろうか。

「ワシは行きたくない」

「ほんとう？じゃあわたしと留守番してようか」

アイスを全部食べんとする勢いのパワーからさりげなく四本抜き取りつつ、再度アキくんを見やる。

依然としてアキくんはわたしの視線に気づくことなく、黙々と食事を口に運んでいる。

「…………わたし、シャワー浴びてくる。ごちそうさま」

「なんじゃ、魔人の癖に食の細い奴じゃのう」

「風呂場、突き当たり右な。タオルは…………」

アキくんの声を無視してリビングを出る。

脱衣所で乱暴に服を脱ぎ捨て、風呂場の冷たいタイルに足の裏をつけた瞬間、頭も冷静になる。

何を意固地になっているんだ、わたしは。

アキくんがマキマのことを好きなのは、あの女の能力だ。

アマネの不安定に引き摺られている訳でもなしに、何を感情的になっっている。

コックを回し、シャワーを出す。

冷たい水が吐き出され、湯が出てくるのを待つ。

少し曇った鏡を手で拭う。

美しい顔と、裸体が現れる。

相変わらず白くて肉がない、あまり女性らしいとは言えない身体だ。

「ご飯、美味しかったね。……なのに今日も何も言わないの、君は」
風呂場の鏡に映る顔に語りかける。勿論返事がない。

そういえば、一人の空間ってこんなにも静かだったんだな。

風呂から出てリビングに出ると、二人とも自室に戻ったようで部屋が暗くなっていた。

テーブルの上は既に片付けられていて、先程まで食卓に並べられていた食器たちは、水切りラックに綺麗に立てかけられていた。

ベランダに出る。

夜は余計に静かで、うつすらと隣人のテレビの音が聞こえる。

前は気づかなかったが、端の方にガーデンチェアと木製の小さなテーブルが置いてあった。

座って、民家からぽつぽつと漏れる光をぼんやりと眺める。

静寂の中、たまに遠くでクラクションの音や、どこからかくしやみの音がした。

日頃の悪魔による喧騒が嘘みたいだ。

遠くの景色に目を凝らしたりして、どのくらい時間を消費していたのだろう。

カラカラ、とベランダの窓開く音が聞こえ振り返ると、スウェット姿に髪を下ろしたアキくんがいた。

髪を下ろしていた方が格好良いんだな、と当たり前のような事をぼんやり思った。

「交代で寝るぞ。リビングに布団敷いとくからお前は先に寝ろ」

すっかり忘れていたが今日はデンジの護衛で来ているんだった。

ただぼーつとしていただけなどと言ったら怒られそうだ。

「……いいよ、わたし眠らなくても身体に支障ないから。アキくんこそ明日からデンジの護衛でしょ。何かあるか分からないし、寝ておいた方がいいんじゃない」

先程のことが尾を引いて、つい素っ気なく返してしまう。するとアキくんは何も言わずに部屋に入っただけでいってしまった。

なんだ、冷たいなあ。と天邪鬼になって拗ねていると、ほどなくしてマグカップと上着を手に、アキくんがまた戻ってきた。

「そんな格好だと冷えるだろ、これ着てろ。あとこれも飲んどけ」
そう言っただけでマグカップを手渡され、肩に上着を掛けられた。

「……魔人は風邪ひかないよ、多分」

「多分なら着とけ。お前が体調崩したら戦力が減るだろ」

また「アマネの身体」を心配している。

ココアの入ったマグカップに温められていく掌と反して、心が冷えていくのを感じる。

もうアマネはわたしの中にはいないよ、ってはつきり言ったほうがいいのだろうか。

いや、何を考えているんだ。

わたしがアマネの存在を否定したら、彼女は本当にいない事になってしまう。

忘れられたくない。と懇願していたアマネの事をもう忘れたのか。

「……お前も、銃の悪魔討伐作戦に参加するんだな。マキマさんから聞いた」

アキくんの声に顔をあげる。

アキくんは柵に凭れながら遠くを見ていたようで、わたしの表情を見ていなかったようだ。

少しほっとする。

「うん。わたしは別に行きたくないんだけど、強制的にね。……アキ

くんは？」

「俺も参加することになった」

答えを聞くまでもない、アキくんは即答した。

アキくんがこちらを見る。

何か言いたげな目で、わたしの顔を見ている。

きつと、行かないで欲しいんだろな。

またアマネの身体が見るも無惨な姿になるのを、見たくないのだから。

わたしの身体の中には銃の悪魔の肉片があるらしい。

わたしはこの事に関して何も分からないままにいるけど、アキくんと言った方がいいのかな。

そしたらいまの優しいアキくんは豹変して、わたしを殺したいと思うのかな。

そんな事よりもわたしがいま、アキくんがアマネにそう思うように、

「行かないで」

と言ったらアキくんは行くのをやめてくれるのだろうか。

わたしが幼い頃のアマネがアキくんにしたような、支配するような眼差しをすれば、彼はわたしの言うことを聞いてくれるのだろうか。行ってほしくない。この夜の静けさや平和がずっと続けばいいのに。

そんなことばかり考えていた。

翌日、京都公安を除いた護衛の面子が到着し、その人間らを引き連れて、デンジはいつものように巡回に出て行った。

そして早速、道中殺された京都公安の者になりました、皮の悪魔と契約しているアメリカからの刺客と遭遇。

パワーがコベニの車で遊んでいたら、運よく轢き殺し正体が発覚したようだが……。

本当に運良く、だ。

今日も護衛の面々を引き連れ、デンジは怠そうに仕事に出ていったが。

「あんな護衛に囲まれて出かけるなんて、見つけてくださいと言わんばかりだね」

「そんな事は全員が分かりきってる事だ。デンジを餌にして敵を誘き寄せて早急に手を打つ。被害を最小限に抑える為にな」

横を歩く岸边が言う。

「それは理解できるけど…、昨日来た人間たち、護衛のプロだとかなんだとかマキマは言ってたけど、においの感じだと契約してる悪魔は弱そうだよ」

本人たちの身体能力は高いのかもしれないが、刺客だつて悪魔を使ってくるのだろう。しかも来るのは、国から選ばれたエキスパートたちだ。

対抗する悪魔も強くなければ、迎え討つのは困難になるのではないか。

「些か脇が甘い人選なんじゃないかと思うんだけどなあ」

マキマはデンジを奪われることは阻止したい筈。ボムを野放しにしていたのといい、一体何がしたいんだ……。

数歩前を歩く岸边からは返事がない。

余計な事は喋るな、とでも言いたげな背中だ。

確かにここじやマキマに話を聞かれているかもしれないしな。

わたしたちはこれから”マキマに殺す事”に焦点を当てて行動していかねばならない。

「岸边隊長！」

前から急いだ様子の男が駆け寄ってくる。

「対魔2課の中村から、応援要請が入りました！場所は1区にある1区デパートです！」

「デンジの巡回ルートにあるデパートか。ルート内にあるビルに何人かデビルハンターを配置していると言っていたが、功を奏したようだな。現時点の状況は」

「それが……、人形の悪魔を使った襲撃です。ドイツのサンタクロースです……！」

ドイツのサンタクロース。

国外からやってくるおそれのある刺客の中で、最も危険視されていたデビルハンター。

岸辺の話では、寿命で死んだ噂もあって言っていたが。

「……生きていたか」

「デパート入り口前で迎え討つ予定でしたが、予想以上の人形の数なようで……、かなり圧されているようです」

「分かった。車は用意しているな」

「勿論です！」

男と共に足を速める岸辺に着いていく。

アキくんやデンジだけじゃなくバディであるパワーと天使も一緒にらしいが、皆は大丈夫だろうか。

「こんだけの騒ぎになれば、サンタクロース以外の刺客も集まってくるだろうな」

岸辺は独りごちるように言った後、歩く速度は変えずに、顔だけわたしに向けた。

「こんな所で死んでる場合じゃねえぞ。お前も気イ引き締めて行け」

「……いちいち煩いな、分かっているってば」
「そうだ、こんな所で死んでいる場合じゃない。わたしには目的がある。」

それに、この身体はわたしだけのじゃないのだから。

現地に着くと、特異課に所属している小柄な女と暴力の魔人に合流した。

「君、名前なんだっけ」

「ひっ……東山コベニ、です」

コベニはわたしに怯えるように後退りしながら、小さい声でそう言った。

同じ課ではあるが、ちゃんと会話を交わしたのは初めてかもしれない。

常におどおどしているような子だが、実際はかなり動ける。ヘビ女を捕らえたのも彼女だった。契約している悪魔のにおいも、どこか掴みどころがない。

人畜無害そうな雰囲気なのに、少し奇妙な子だ。

その横にいる暴力の魔人は、施設に入ってきたのも最近な新入りだ。

危険な悪魔らしいが、人間のとときの記憶がかなり残っているようで、穏やかで明るいし、話も通じる奴だ。

しかし、どこかで嗅いだ覚えのあるにおいがする。それだけが引つかかる。

デパートの入り口前。

そこは予想と違って静かなものだった。

「な……なんですかこれ……」

コベニが怯えた声を出す。

地面には足の踏みどころに困るぐらいの、人形の死体。

近くの路地裏には、応援にきたと思しき対魔課の人間の死体もあった。

「全部の死体に、刃物で綺麗に切ったような断面がある。同じ奴がやってみたいだね、俄には信じ難いけど……」

屈んで死体を確認した後、岸辺を見上げる。

「これ、あんたが言ってた元バディの仕業？」

クアンシ。

中国から来ると予測されていた刺客。

元公安のデビルハンター。岸辺の元バディ。

以前街で会ったミナミという女が口にしていた名前だ。

対人格闘技に秀でていると聞いていたが…

「あいつだったらやりかねないかもな」

秀でているどころか、どう見ても人間業じゃない。

そんな物騒な奴とバディを組んでたのかと改めて岸辺を見やると、スキットルの蓋を開けながら、ふらりとどこかに歩き出した。

どこに行くのかとわたしも立ち上がると、岸辺の視線の先には、奇妙な格好の四人組がいた。

「やっとクアンシから離れてくれたか」

岸辺が四人に声をかける。

よく見れば皆頭部に人外の特徴がある。魔人だ。

そういえば、クアンシは魔人を仲間に連れてきているデビルハンターだと聞かされていたな。

「お前たちはデパートの人形を片付けてろ」

「うしー！」「はい！」

コベニと暴力は返事をしながら、デパートの中に駆けて行った。

「アマネ、お前もだ。さっさと行け」

「……岸辺。基本あんたにとっちゃ雑魚だけど、一人だけヤバイ奴が混ざってる。気をつけてよ」

あの脳みそが飛び出た、大分グロテスクな風貌の女の子。

他の子も魔人の中では強い方なんだろうけど、段違いに不穏なおいがする。

「人の心配するより、手前の心配をしろ。…まあクアンシは女に対しては甘いが」

「へえ、そんならこの美貌の持ち主アマネちゃんなら楽勝だね」
軽口を叩いてから、二人の背中を追いかけた。
岸边ならまあ……、大丈夫だろう。
言われた通り自分の身の心配だけをしよう。

デパート周辺と同じで、中にも首を切り落とされた人形の死体がごろごろと転がっている。

ここらは主にクアンシによって一掃されているようだ。もうデンジたちに追いついている可能性が高い。はやく合流しなくては。

果たしてデンジたちのおいを辿って着いたフロアには、

「は？なんで岸边がもういるの」

岸边が窓際の椅子に座っていた。

さつきまでこの男、下で魔人たちと戦ってたんだよな。

現に傍に立つデンジとパワーが先程の魔人の中にいた二人を拘束している。

「遅い。どこで道草食ってんだお前は」

「あんたが馬鹿みたいに速いだけでしょ……」

コベニと暴力は……いない。二人こそどこに行っただ。

デパート内は広いし、迷うのは分かるけど。

わたしもおいを辿れるとは言え、人形の死体の数が多すぎるのもあつて時間がかかったのは事実だ。

それにしたつて岸边の速さは異常だ。

岸边とテーブルを挟んで座っている眼帯の女、あれがクアンシか。想像していたより随分と若い。

そして、“変わった”においがする。……デンジと似たにおい？

アキさんと天使、他の護衛たちは倒れている。

見たところ気絶しているだけのようだが……。

異様な空間だ。

岸边とクアンシは、寛いだ姿勢で座り、眺めのいい席から景色を楽しんでいるような、一見何気ない光景に見える。

だが、確かに張り詰めた空気が漂っていた。

わたしも、デンジとパワーすら、下手に動けずにいる。

岸边の視線が僅かに動いた。

その視線の先を振り返ると、顔に傷のある男が銃を構えてこちらに近づいてきている。

銃口はデンジに向いている。

「デンジ避けて!!」

発砲音と、わたしが叫びながらその手元を蹴り上げるのと、岸边が銃弾から逸らそうとデンジに蹴りを入れたのはほぼ同時だった。

張り詰めていた糸が切れた。

デンジが体勢を崩すと拘束されていた魔人が目を開き、デンジを床に組み敷く。

「クアンシ!!」

彼女が叫ぶのを合図に、岸边とクアンシが動き出す。

クアンシの拳が岸边の顔面に当たる鈍い音がしたが、悪いがそれどころじゃない。

蹴り上げたときに宙に投げ出された拳銃を、男と僅差で奪い取る。

拳銃に触るのなんて、公安に入った時にした訓練以来だ。

デンジに一発当たったところで急所さえ外れればいい。

狙うは魔人の頭。

あいつがただの魔人であれば、それだけで死んでくれる筈。

思い切って引き金を引く。

いい弾道を描いたが、魔人に腕で防がれた。

その間、視界の奥で岸边が投げ飛ばされ、ガラスを突き破り落下していくのが見えた。

「岸边?! うっ、あ……っつ!!」

今度は魔人がこちらに火を吹いてきた。

火を吹く魔人ってなんだ。ドラゴンの悪魔? そんなファンタジーな恐怖も存在するのか。

間一髪直撃は免れる…が、その先には先程の男がおり、顔面を思い切り蹴られた。

その衝撃で手から銃が外れる。

まずい、銃を奪い返された。

男はこちらには目もくれず、デンジを抑えつける魔人を攻撃する。狙いは飽くまでデンジという訳か。

「うぐっ…?!」

いつの間にも移動したのか、クアンシがその男の首根っこを掴んだ。そのまま岸边同様、ガラス窓に向かって投げ飛ばした。

先程岸边を片手で投げ飛ばしたのもそうだが、この細い腕で成人男性を片手で持ち上げられるとは、普通考えられない。

やっぱりこいつ、人間じゃない。

「お嬢さん、大丈夫か? 血が出ている…」

何故かクアンシがわたしに手を差し伸べてきたので、思わず後退りました。

クアンシは首を傾げると、今度はパワーの方へ向く。

「ワシに近づいたらコイツを殺すぞ!! あとデンジを放せ!」

ポニーテールのような髪型の魔人を捕らえたままのパワーが声を張る。

「お嬢さん、その子を放してくれないか。でなければ戦う事になってしまう」

「卑怯者がア……!」

感情的になつてゐるパワーに、堪えてと視線を送る。

口の中が血の味だ。

歯が何本か抜けたみたいだ、血の混じつた唾液とともに吐き出すと、床に転がつていった。

勝算は微塵もないが、戦うしかない。

クアンシの脚をはらうように蹴りを入れる。こちらに視線を向けられる事なく、軽く跳んでかわされた。

しかし、宙に浮いている間は身体のバランスが効かないものだ。そのまま腹に一発殴りかかる。が、腕で防御される。

やり返してくる様子はない。

「さつき頭を強く蹴られたろう。あまり動くと良くない」

そして、ひとつも息を切らさず、そんな事を言つてきた。

「岸边のいう通りだね。女に甘いって」

「……あの男、昔から女にだらしないのは知っていたが、とうとう未成年に手を出すとはな」

「色々言いたいところだけど、わたしはただのバディだから！鳥肌立つような事言わないで」

俄に信じ難いといった表情で首を傾げるクアンシに、懐に忍ばせたナイフを手に取り、飛びかかる。

そのナイフを指二本だけで止められる。

「このナイフは……」

「納得した？」

わたしが使っているのは、前の任務ですつかり手に馴染んだ岸边のナイフだ。

しかし、平静を装うにも、相手は指二本でしか押さえていないのにも関わらず力が強く、わたしが押しても引いてもナイフはびくともしない。

次第に自分の顔が強張っていくのを感じる。

「お嬢さんは、本当に岸辺のバディなんだな」

やがてナイフを奪われ、クアンシの手元で回転し刃先がわたしに向く。

後ろに回避しようとした脚を軽く蹴られ、バランスを崩す。

窓際のテーブルに背中を打ちつけたと思ったら、ナイフが空を切る音が耳のすぐ近く聞こえた。

わたしはテーブルの上で組み敷かれた状態になった。

目の前には切れ長の暗い目をした、美しい女。

岸辺と大分昔からバディを組んでいたらしいが、到底五十歳前後には見えない。

しみも皺もひとつもない、綺麗な顔だ。

「近くで見ると尚更綺麗な子だ。マキマの元に置いておくなんて勿体ない」

「……そりゃどうも。わたしもそう思うよ」

目線だけ左横に動かすと、ネクタイごとテーブルにナイフが突き刺さっていた。動くと言が締まる、この状態で逃れるのは不可能だ。

「……お嬢さんはマキマに”飼われて”いないのか？」

「飼われた覚えは微塵もないね」

クアンシは小さく首を捻りながらわたしの顔を凝視した後、耳に顔を寄せてきた。

「お嬢さん、良い提案がある」

「はっ」

「私の女にならないか？君の事を気に入った。今よりもよっぽどいい暮らしを保証する。決して危険な目には遭わせない」

耳に息がかかるほどの距離で、わたしにしか聞こえないほどの小さな声で問いかけてくる。

あの魔人の女たちの一人に加われということか。

馬鹿げた提案に、わたしはつい呆れた笑いが漏れた。

「やだね。この美少女をあの不細工どもの中に加えるとか、ありえな

い。何が良い提案だ、馬鹿にしないでくれる？」

顔を上げたクアンシの眉間には皺が寄っていた。

「何故。君はマキマに囚われていないのだろうか。……私は分かる。あのチェンソーと同じで、君は特別なだろう」

わたしをただの魔人ではないと見抜いているのか。

見抜ける契約をしている悪魔がいるのか……。いや、恐らく最初に思った”デンジと同類”が正解だ。

「マキマは勿論、あんたに囚われるのだからお断りだよ。わたしはここに理由があるの。……ここには大切な人がいるから。わたしは自分の意思でここで戦っているの!!」

言いながら、腰を捻るようにして脚を上げ、クアンシの脇腹を狙う。が、予想はしていたが案の定防がれた。だけでは終わらず、足首を掴まれる。

「そうか、それは残念だ」

「うおあ?!」

そのまま片手で持ち上げられ、宙吊りの状態で先程割れた窓の外に出される。

高所に吹く強い風が、片方の足首だけが支点になった身体ごと揺らす。流石にこの高さは背筋がぞつとする。

「……こちらデンジ、パンツ見ないよ」

「ちえ〜」

頭を押さえつけられながらも、わたしの捲れたスカートの中を凝視するデンジを嗜める。

「私は……、マキマを殺そうだなんて事は考えない。チェンソーの心臓を祖国に持ち帰り、蔑まれてきた私の女たちに人権を与える。どうせ短い命だ、目先の幸と快樂。それで充分だと思わないか？」

「そうだね〜、そういう考え方もいいと思うけど……、わたしは反対。だって”わたしたち”、決して短命ではないでしょ」

わたしは煽るように笑みを浮かべる。

「それにさつき聞こえてきた、あんたの『無知で馬鹿のまま生きる事』ってのには全く共感できない。折角人間の脳みそを手に入れたん

だ」

はためくスカートから見え隠れするクアンシの表情は変わらない。

「何も知らず間抜けと言われて生かされるなんて、そんな詰まらない人生、堪えられない。わたしは御免だね！」

そう吐き捨て、腰に隠していた拳銃を取り出す。先程の男がクアンシに掴まれた時に落とした物だ。

「クアンシ!!……うつ?!」

黒髪の魔人が叫ぶ声が聞こえた直後、そいつの身体が突き飛ばされた。

床から現れたビームによるものだった。応援に来てくれたのか。

発砲音と、クアンシの手が緩むのはほぼ同時だった。

銃弾は反れクアンシの肩に当たり、わたしは宙へ投げ出された。

「チツ……外れた」

一瞬見えたクアンシの目が丸くなっていた。

わたしを本気で落とす気はなかったらしい。

ここ何階だ？落下が長くて身体の中の内臓が浮遊しているような感覚が気持ち悪い。

地面に叩きつけられたときのダメージはいかほどだろう。全身粉砕骨折？死んでも血さえあれば生き返るが……。

「……………くっそお、痛いのはやだなあ」

来たる衝撃に思わず目を瞑る。

ドス、と音はした。

しかし、痛みはなかった。何かに包まれているような感触。目を開ける。

「岸边?!」

岸边がわたしのことを抱えていた。

「いてえ……」

「え？あんたさつき、落ちて、け、怪我とかないの？」

岸辺が態とらしく両手を揺すっている。

普通に歩いていて、血も出ていない。先程落ちた時に受けた怪我などはなさそうだ。

と、言いたいことは山ほどあるが。

「なんで……、わたし、血飲めば回復するじゃん。わざわざ岸辺が腕傷めてまですることじゃないでしょお……」

「あれを見ろ」

岸辺がデパートの入り口のある大通りの方を指差す。

「げ、増えてる?!」

入る前まではそこまではなかった人形たちが、倍以上は数を増やしてデパートの入り口に向かっている。

「お前が気絶している時間も惜しい。だから助けた。さつきと行くぞ」

「……………はあゝい」

残念なような、しかしどこかほっとした。

アマネと同じような考えを持つと、きつと苦しくなる。

「蛸！」

上から声が降ってきた。

直後、地面すれすれで蛸に脚を掴まれ、九死に一生を得た男が目の前に現れた。

「また脱落者が増えたな」

逆さになったままの男、吉田ヒロフミは一度安堵の溜息を吐いた後、岸辺を見て苦笑いした。

ドクン

突如、わたしの心臓が大きく跳ねた。

この感覚は、アマネがアキくんを目にしたときと同じだった。

しかし、残念ながら今回はアマネの意思じゃない。

わたしによるものだ。

手先が冷たくなる。脚が震える。

「よくクアンシとのタイマンで、その程度で済んだな」

「秒殺でしたけどね」

「岸边……………、ちよつと」

横で談話している岸边に声をかける。

声も震えている。

「あ？今度はなんだ」

「おかしい、だってここは……………、絶対そんな事はない……………！」

「……………どうした、はつきり話せ」

岸边に肩を掴まれる。

本当におかしいのだ。あり得ないんだこんな事は。

地獄のにおいがするなんて。

「んだコレ……………」

岸边の呟いた声で顔を上げる。

岸边も吉田も、デパートの真上を唾然として見ていた。

天から降りてきた、六本指の巨大な手。

「地獄の悪魔……………」

わたしがその名前を口に出した瞬間、脳の奥の方からずるりと何か
が這い出てきた。

それもアマネのじゃない、わたしの記憶だった。